

龍田神社

龍田川

志貴山へ

富麻寺

中將姫の曼陀羅

寺、廣瀬神社などを見て、それから再び法隆寺町の狭い通を西に向つて進んで行く。と、龍田神社が町の中央にある。

これに参詣して、少し行くと、町はだら／＼坂になつて、川の橋のある方へと出て行く。そこが例の紅葉の名所の龍田である。生駒、志貴の山々がその前に見えてゐる。つまりらぬところではあるが、これも名所かと思へばなつかしい。今でも、楓樹が少しは河の岸にある。

こゝから王寺の停車場までは、一里に少し近い。志貴山に上るには、その途中から右に入つて上つて行く。山頂までは一里半位ある。その頂上に毘沙門天が祭つてあつて、大阪の方の眺望が中々好い、山の上に松永久秀が信長に亡された城址が残つてゐる。

王寺で乗換へて、次の下田で下りる。南に二十五町、天智時代の石光寺、その本堂の東にある中將姫の曼陀羅の糸を染めたといふ井戸を見て、更に、南に五町、富麻寺へと赴く。そこには、中將姫が蓮糸で織つた曼陀羅がある。東塔、西塔は、天平時代の初期の建築として、頗る名高く、ことにその九輪の高いのと、八輪なのが、他とその例を異にしてゐる。それに、東塔西塔のかう完全に二つ竝んで存してゐるのは、めづらしい

畝傍

神武天皇陵

畝傍山

橿原神宮

といふことである。

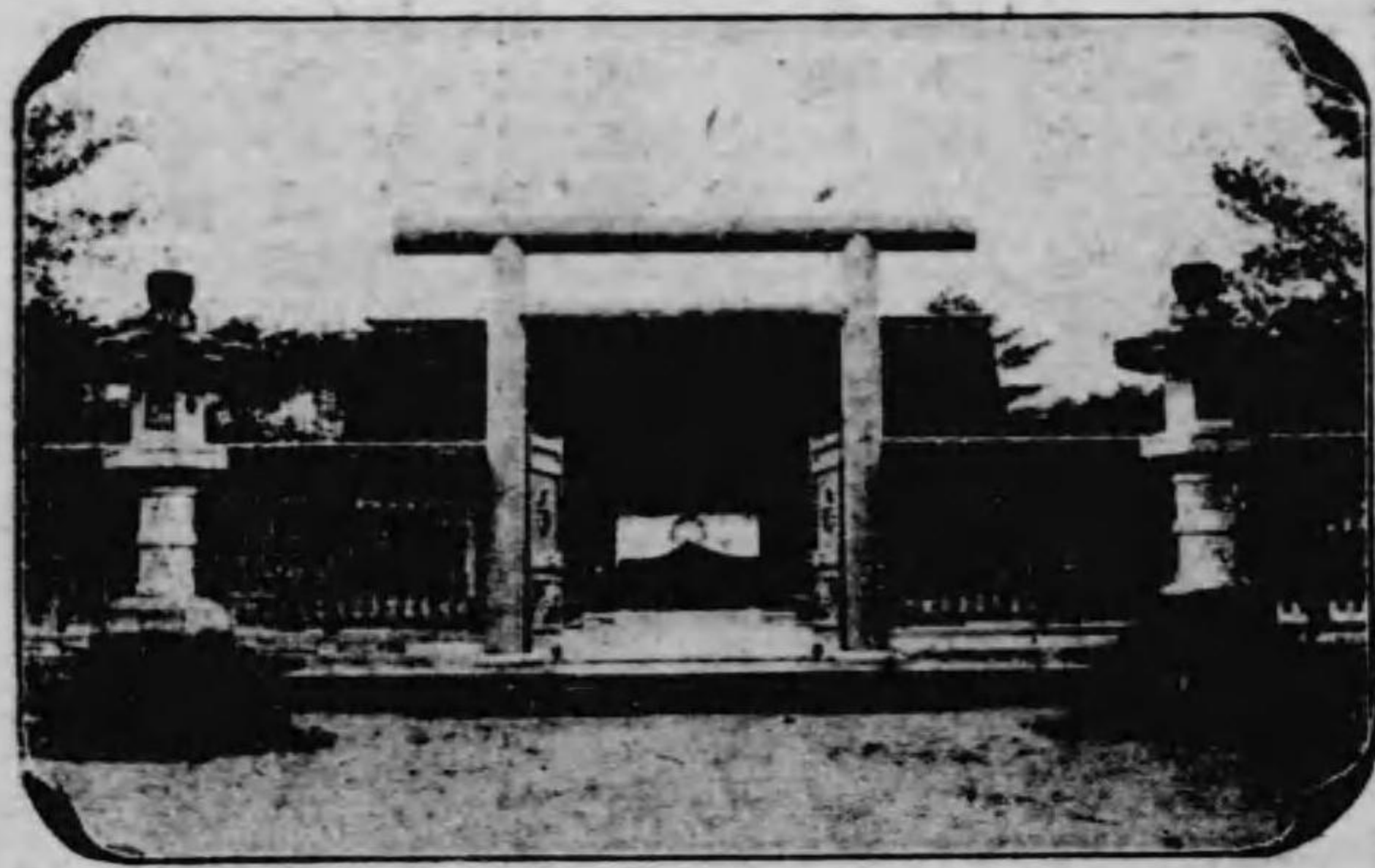
これから再び高田に来て、そこから櫻井、初瀬の方に行く汽車に乗る。御所から、吉野、五條、高野山の方へ行く人は、そこで、紀和線に乗替へることを忘れてはならない。畝傍には是非行つて見る要がある。何故なれば、そこは日本の開祖神武天皇の都したところで、そしてまた陵のあるところであるからである。畝傍の停車場のあるところの町は今井町である。大和木綿がそこから多く産出する。

停車場からレールを越えて南に向つて行くと、十町位で、左に綏靖天皇の陵があつて、その少し先の右に、神武天皇の陵がある。流石は日本最初の天皇の陵だけあつて、兆域も廣いし、規模も雄大で、あたりが塵をも留めず掃除されてゐる。それに、その後には畝傍山が聳えてゐて、それに松の靡ひてゐる形がいかにものんびりしてゐる。春の日などにはそこを歩くと、三千年前の昔に返つたやうな心持がする。一拜して、更に南に數町行くと、畝傍山の南側のところに、例の橿原神宮がある。皇祖が始めて大業を起したところだと思ふと、何となく襟が正される。この神社は明治二十三年に、京都御所の一部を移して造營したもので、今では官幣大社に屬してゐる。この西南、四町を隔て、久

飛鳥

歷代皇居の
址

岡寺



楯原神社

米寺がある。

これから南、東の方は、往古の所謂飛鳥の地で、淵瀬定めなき譬に引かれた飛鳥川は、源を天武の朝に樹木の伐採を禁ぜられた南淵山に發して、岡、楯の間から、甘楯丘の東麓をめぐつて西北に折れ、今井、八木方面に流れて行つてゐる。此間には、歴代の天皇の皇居の址が多く、允恭、顯宗、推古、皇極、天武などの諸帝は、皆この附近に都したのであつた。従つて史跡が非常に多く、細く見ると、人の知らないやうな面白い址が澤山ある。しかし普通の旅では、さうぐつぐつしては居られない。先づ岡村にある岡寺とその北五町を隔てた楯寺とに行つて見れば、まア澤山だ。岡寺は天智天皇の勅願、義淵僧正の開基で、有名な古刹

橘寺

弘福寺

元興寺の址

壺坂寺

であると共に、西國巡禮七番の札所として人に知られてゐる。橘寺は推古天皇十四年の創始で、金堂、拜殿、観音堂などがある。

この近所に、弘仁期の傑作と稱せられた持國、多聞二天の立像を藏してゐる弘福寺がある。飛鳥の安居院には、止利佛師の作の丈六の大佛がある。この寺は、崇峻天皇の朝に、蘇我馬子と聖德太子とが創立した、歴史にも有名な元興寺の址で、例の中大兄皇子が中臣鎌足と蹴鞠の遊びをしたのは、この寺である。この近所には、大官大寺の遺址だの飛鳥神社だの、向原寺だの、いろ／＼と見るものがある。そしてその北には、天香久山、耳無、畝傍の三山が鼎立してゐる形は、何うしても昔の繪としか思はれない。

楯原宮から久米寺に行つて、それから東南の方に行くと、貝瀬、平田などといふ地名がある。このあたりが、往昔の牟佐の地で、その北の大輕は、懿德、孝元、應神諸帝の都したところであつた。歴代の天皇の陵は、その附近に澤山に残つてゐた。

平田から高取に出て、壺坂に行つて見るのも面白い。しかし、これは、楯原宮からよりも別に、紀和線で行き、そこから下りて行くのが普通の路順である。壺坂寺は、例の淨瑠璃で名高くなつてゐるが、昔からきこえた寺で、西國六番の札所である。石佛が非

常に多い。淨瑠璃にある通り、寺は山路を十町ほど上つたところにある。寺の本名は南法華寺と言はれてゐる。

こゝから、南に、一里ほど下ると、吉野川の谷に出るやうになつてゐる。しかし、餘りに遠く行きすぎた。一先づ引返して、再び畝傍の停車場にもどつて来る。そして櫻井の方へと東に向つて、汽車に乗る。

櫻井

磐余

金堂と五重塔

廻廊

櫻井はすぐだ一帳場しかない。で、そこで下りて、先づ初瀬の観音へと向つて行く。この間に輕便軌道がある。この西方一帯の地は、往昔の磐余の地で、繼體天皇以後屢々皇居を置かれたところである。初瀬から室生の方に行く路がある。伊勢から大和に入つて来る昔の路である。初瀬から室生寺まで三里ほどある。そこにある金堂と五重塔とは、弘仁期の建築として著名で、殊にその五重塔は、奈良の諸寺に残つてゐるもの、中でも、最もすぐれものであるといふことである。

長谷の観音のある前の町は賑かで、丁度淺草や千日前見たいである。二王門にある木像は忘れずに見なければならぬ。殊に、こゝで面白いのは、三折九十二間の廻廊である。そこには、廊の角ごとに鐵燈籠がか、けてある。春の月夜などに、それに登ると、

紀貫之の故郷

談山神社



大和めぐり 寺谷長和

何だか昔に返つたやうな気がする。それに、この近所は、初瀬、吉野と言はれる位で櫻が多い。こゝらをぶら／＼歩くと、いかにも大和めぐりをしているやうな気がする。

それに、此處は紀貫之の故郷で、例の『人はいざ心も知らず』といふ歌は、こゝで詠んだのであるといふことだ。

引返して、今度は多武峯に行く。櫻井から、河西、下などといふ村を通つてやがて談山神社の一の鳥居のところに着く。樹木が晝も暗いほどに茂つてゐる。此處は藤原鎌足の長子定慧が、入唐歸朝後、公の遺志に由つて、攝津の阿威山から遺骸を此處に移したところで、藤氏の盛な時分には、それは繁榮したものださうだ。今でも社殿は壯麗

一九〇
 で、關西の日光と稱せられてゐる。こゝで特色なのは、社殿は内部は金碧をちりばめてゐて、外部はすつかり素木を用ひてゐることである。拜殿に伽羅の天井といふのがある。樓門の前には十三層の塔がある。そして、この塔の後から、十二三町登ると、山の頂に鎌足の墓がある。國家に事ある時は、この墓必ず破裂するといふので、一に山は破裂山と呼ばれてゐる。そこからは、大和平野を一目に見渡して眺望が好い。

こゝから吉野川沿岸の上市町に出る路がある。汽車の出来ない中は、吉野に遊ぶもの半分は、奈良から櫻井に来て、そしてこゝを越えて行つた。小さな峠があるが、さう大して峻しくはない。里程も二里には少し近い位だ。私は六田の柳の渡を渡つて、吉野に行つて、一夜其處に泊つて、翌日一目千本から櫻の渡を渡つて、上市に出て、それから、山越をして多武峯へと來た。

櫻井から三輪、丹波市、樺本、帯解、京終など、いふ停車場を経て、奈良に行く線路の沿線にも見るところが多い。三輪の大神社は中でも是非行つて見なければならぬ。其處には社殿は拜殿ばかりで、正殿がない。何ういふ譯かと訊くと、それは三輪山そのものを以て直ちに神體としてゐるのであるといふことである。三輪の檜原、女寶谷、峯

の杉、夫婦石などといふがある。三輪町では、何處の茶屋でも、三輪の茶屋といふ看板が出てゐる。「奈良の旅籠、三輪の茶屋」と梅忠に出てるのを附會したものかも知れない。丹波市には、天理教の本山がある。毎年正月六日から八日までの節會と春秋二季の大祭には、信徒が各國から集つて來て、頗る雑踏する。宗祖中山みき女の墓は、その北方松の茂つた丘の上にある。

今度は吉野に行く。

壺阪寺が見たければ、高田でわかれた紀和線の壺阪驛で下りる。これは前に既に書いて置いた。吉野に行くには、吉野口停車場で汽車を乗かへる。

そこから吉野川の六田の渡近くまで軌道がわかれて行つてゐる。その途中からは、吉野川の清く流れてゐるのが見える。ちよつと心持が好い。六田の渡は、柳の波と言ふので、上市の櫻の渡と相對してゐる。「よしの山のほりくたりにうれしきは、柳櫻のわたしなりけり」と私は詠んだ。

吉野山に登るところに、黒門がある。そこから一町毎に石標が立てられてあつた。一の阪を登り盡したあたりから、そろそろ花が見え出して來る。丁度長い丘の背のやうな

長峯の櫻

村上義光碑

吉野宮



本千目一

ところを通つて行くので、右も左もかなりに深い谷になつてゐる。そして、この丘の脊は悉く是れ櫻花であつた。

これを長峯の櫻と人は呼ぶ。

二十八町目に、例の村上義光忠烈の碑がある。豊太閤花見の蹟などもある。三十町目あたりが、一目千本のところで、花が頗る多い。こゝで、上市の方から上つて来る七曲の道路が合してゐる。谷と花と丘との具合が頗る見事だ。そしてこの花の中に、吉野宮がある。官幣大社で、後醍醐天皇を祀つてゐる。攝社が三つ、御影社には藤原資朝、藤原俊基を祀り、船岡社には兒島高德、櫻山茲俊を祀り、瀧櫻社には土居通増、得能通昌が祀である。忠臣御魂を護るといふ形

藏王堂

吉水神社

勝手明神社

があつて、いかにも吉野らしい。こゝから花を出て、吉野町に入つて行く。芳山館、芳雲館など、いふ旅館がある。町も丘の脊の上に立つてゐて、谷に俯し崖に凭つた形が面白い。それに、町を隔て、藏王堂の屹然として聳えてゐるさまは人目を聳た、しむるに足りる。町の盡きたところに黒門がある。銅の鳥居がある。ついで二王門がある。即ち金剛峯寺の總門で、大きな藏王堂は、實にその金堂を成してゐるのである。

この堂は康正元年再建、慶長十九年豊臣秀吉の修理したもので、規模が頗る雄大だ。大塔宮が吉野落の時に、離杯を挙げられた址は本堂の前に今も残つてゐて、大きな四本櫻が其處にある。その西に、南朝三帝五十餘年の行在所であつた實城院の址なども残つてゐる。南朝の歴史は、一々目の前にあらはれて来るやうな氣がせずには居られない。こゝから、三町、吉水神社、例の後醍醐天皇が『花にねてよしやよしの、よし水の枕の下に岩はしる音』と詠まれた吉水院である。この吉水院は元は藏王堂の供僧坊があつたのを、明治になつてから神社に改祀して、後醍醐天皇と楠正成とを祀ることになつた。そこにある南朝の寶物は、旅客は是非一覽しなければならぬ。

勝手明神社は、源義經の妾靜御前が法樂の舞を奏したところ、それから本道を左に

大和めぐり

折れて谷に下る。櫻が非常に多い。で、それを七町ほど行つて突當ると、如意輪山の下に如意輪堂がある。正行が『かへらじと……』の歌を扉に刻したところで、今でも、その扉は其處に藏されてある。その堂の奥に、後醍醐天皇の陵がある。北面して立つてる。藤井竹外の『古陵松柏吠天鷹、山寺尋春々寂寥、眉雪老僧時報帝、落花深處說南朝』の絶唱は、實に此處で出来たのである。

で、再び本道に戻る。南に二町、竹林院、天王櫻、猿曳坂、こゝから東の谷を望むと、すべて是櫻花で、その風景の美、容易に筆に盡くされぬ。こゝを中の一、目千本と言つてゐる。

これから中院谷に行つて、佐藤忠信が山僧横川覺範を討つた首塚といふのを見、忠信が義經のために防戦した跡や、布引櫻や、瀧櫻や、雲井櫻を見て、猶登ると、世尊寺址がある。保延六年の銘のある古鐘が其處にある。水分神社は、これから二町、金峰神社は猶それから五町、この下に蹴抜の塔がある。此處等あたりに來ると、路はもう非常に細くなつてゐる。やがて西行庵の「淺くともよしや又汲む人もあらしわれにこと足る山の井の水」の苔清水がある。丁度庵室の前のところにある。こゝ等にも、花はかなりに

多く、幽趣却つて中の千本に勝る趣がある。こゝが奥の千本である。

これから奥は、修驗道の大峰山に登つて行く路で、頂上まで六里、山は四月十日に開けて十月十日に閉ぢられる。登攀するもの今も絶えない。

これから南朝の落ちて行つた賀名生の行宮の所在地などを訪ふのも興があるが、これは、此方から行くよりも、寧ろ五條町の方から行く方が便利だ。

で、其夜は吉野の香雲深いと一泊して、曉の櫻でも見て、歸りは一目千本のところから下に下りて、七曲の花から櫻の波を渡つて、上市の上流に妹春山を望みながら、多武峯の方へ出て來るのも、面白い興味のある春の旅である。

大和めぐりと言ふのは、先づザツトこの位だ。細かく探れば、また見るところが澤山にある。その時には、奈良の市街あたりで、『大和巡』といふ本を一冊買つて見るが好い。それは五十錢ばかりの本で、頗る詳細をきはめてゐて好い本だ。

吉野まで來ると、五條から高野山の方へ行つて、それから和歌の浦の方へ出て行きたくなる。また、さう行つても、決してわるい道順ではない。しかし高野と和歌浦とは、別に書くつもりだから、此處からつゞけて行く人は其處で参照して貰ひたい。それから、

大和めぐりの中には、笠置、月の瀬も入れたいのだが、これも伊勢参宮の條にあるの方に詳しく書いて置いた。

十二 河内の諸勝

- ▲大阪 から關西線で、柏原に行き、河南線に乗る。
- ▲大和 方面から来るにも矢張さうだが、葛城山脈の峠を越えて行つても好い。車の通じないところは僅かだ。
- ▲堺 の方から来る高野線の汽車はすつかり出来て、紀州境の紀伊見峠にトンネルを穿つて、橋本に行つてゐる。高野山に行くのはわけはない。大阪汐見橋停車場はこの線の起點で、哩數二八、一、三等賃金六十八錢。
- ▲柏原 長野間は哩數一〇、三、同賃金二十一錢。
- ▲富田村 から千早までは車は通ずるが、歸りがないので賃金は高い方。むしろ

歩く方が好し。

▲金剛山 には千早からする。案内者がなくても、さう困らない。

楠公の遺蹟

河南線

平野町

大和川

道明寺
天満宮

此處で言ふ河内の諸勝は、主として楠公の遺蹟をさぐる爲めの記事だ。そして、起點は大阪から發足することにする。もし、奈良から行かうとする旅客ならば、關西線の柏原驛で河南線に乗替へて、富田林へ行つて下りる。

大阪の天王寺驛から汽車に乗る。やがて平野町の瓦葺が近く目に落ちて来る。こゝ等は大阪平野の中心で、菜の花が多いので、春は頗る見事である。平野町には、融通念佛の總本山としてきこえた大念佛寺がある。瓦葺の中に突出してゐる大きな烟突は、町で著名な紡績會社である。この東一里に、八尾町がある。この附近は例の大坂兩役の古戦場で、木村重成の奮戦したところだ。墓が今でも其處に残つてゐる。

柏原で河南線に乗替へる。大和川の鐵橋がやがて来る。左に聳えた山は葛城山脈で、二上山、葛城山、金剛山といふ風に右に順に並んで見渡されてゐる。好い景色だ。道明

河内の諸勝

大坂冬の陣
の諸將の墓

葛井寺

貴志八幡



道明寺天神

寺で下りて、有名な天満宮に参拜する。境内に梅が多いので、花の頃は大阪から其日
がへりの旅客がよく遊びに来る。道明尼寺、允恭天皇陵などがその近所にある。それ

からこの近所は、大坂冬の陣に、真田幸村、後藤基次、薄田兼相等が奮戦して徳川の麾下を惱した古戦場、玉手、圓明、片山などといふ村には、今でもその地がところどころに残つてゐる。基次、兼相の墓をさぐつて見るのも興味が深い。

葛井寺は同じ名の停車場から下りて行く。西國巡禮五番の札所としてきこえてゐるばかりでなく、正成、正行が常に兵を此間に出したことは歴史にも書いてある。この附近で見るとべきものは、譽田神社、應神天皇陵、白鳥の陵などである。應神天皇の陵は、殊にその大なるを以て世にきこえてゐる。

富田林町

水分

誕生所

建水分神社

赤坂城址

楠公の遺蹟を訪ふには、富田林町で下りて、さびしい町を横つて、石川の流にかけた橋を渡つて、そして金剛、葛城の二山に向つて段々入つて行く。このあたりから見た金剛山は、鬚眉殊に鮮かで、いかにも近畿の名山だといふ氣がする。大抵はさびしい田圃の間を通つて行く。で、一里半位で、水分といふ村に達する。こ

こは楠正成の誕生したところで、今でもその址がちやんと残つてゐる。こゝらの農民は、楠正成を呼ぶに、楠公様、楠公様と言つてゐる。そして、丁寧にその址の所在を旅客に教へて呉れる。田圃の中にある誕生所から三四町離れて、建水分神社がある。社殿は正成の建てたもので、南北朝時代の標式的建築として世にきこえてゐる。今、特別保護建造物の一つである。その境内にある楠木神社は、楠公の戦死後、後醍醐天皇が追悼の餘、自から正成の像を刻し、社を此處に建て、楠木大明神の號を賜つたもので、頗る由緒の深いものである。今でもその像は残つてゐる。

で、水分村を出て、少し来ると、丘がある。平野に臨んだ丘である。そして千早の方へ行く路が、その丘の東を掠めて、奥深く入つて行つてゐる。その丘が、昔赤坂の城の

あつたところだと思ふと、旅客は感慨無量であらう。
 成ほど好い地形だ、奥に千早を控へて、赤阪を左に、右に桐山の城を控へては、
 数万の敵も容易にこれを抜くことは出来まいと思はれる。それに河南の平野がさう大し
 て廣くない。大軍を動かすには不適當である。正成が此處にゐて、北軍を惱したのは無
 理はないと思つた。
 その丘の上には、城址を示した木標が立つてゐて、それから、河南の平野を隔て、和
 泉丘陵を望んださまはちよつと面白い。
 こゝから千早までは、まだ一里半以上ある。全く萬山の中である。小さな溪流に添つ
 て、唯一條の道が通じてゐるばかりである。これでは、いかに多い軍勢でも、何うする
 ことも出来まいと思はれる。
 千早は蕭然とした一村落だ。その村の上に城址があつて、私の行つた時には、そこに
 小學校があつた。啾唔の聲が静かにきこえてゐた。城址は東方高さ百丈、西は六十丈、
 南は七十丈、北は三十丈、上は平坦になつてゐて、千早神社がある。それから少し登る
 と、楠正儀の墓がある。

千早城址

正儀の墓

観心寺



正成の墓(観心寺内)

さびしい不便なところではあるが、普通の旅客にはちよつと行くに厄介なところではあるが、それでも、此處は是非行つて見たまへとお勧めがしたい。

正儀の墓のある處から、金剛山の頂
 まで廿五町、かなりに峻しいけれど、
 さう大して勞れるほどでもない。山頂
 には、杉や松の木の多いので、眺望は
 餘りすぐれてゐない。そこに葛城神社
 がある。

こゝから東に下りると、一里半か二
 里で、紀和線の北宇智驛に達すること
 が出来る。私は大阪から来て、こゝを

こゝへて、吉野の方へと出て行つた。

千早の近所に、南朝の遺蹟が猶二三ある。川上村にある観心寺は、その大なるものである。そこは、千早の左を劃つてゐる丘陵のすぐ裏手に當つてゐる。里程にして一里に

少し遠い位のものだ。其處は後村上天皇が、吉野から賀名生、賀名生から天野山、それから此處に行幸あらせられたところで、天皇は最後に遂に此處に崩御あらせられた。寺の奥に今、天皇の陵が残つてゐる。

それから、その天野山に行くには、高野線の長野驛から下りて、東北一里半、和泉境の山の中にある。そこにある金剛寺には、今も行在所の跡が残つてゐる。

長野から三日市を通つて紀伊見峠を越えて紀の川の峽谷に下りて行く路は、昔の高野街道で、大阪方面から高野山に参詣する人は、皆なこの路を通つて行つたものであつた。今では、旅客は和歌山から粉河寺に参詣して、そして行くのを順路としてゐるけれども……。

名所圖繪を見ると、この三日市といふ驛が、高野参詣の客で賑つたさまがよくわかる。

十三 和歌の浦と高野山

▲高野山 には、大和奈良の方から入つても好い。又、大阪汐見橋の汽車で河内を通つて行くのも好い。

▲大阪 難波から和歌浦までは電車、七十二錢、時間が一時間四十分、頗る便だ。ところによりて割引がある。

▲大阪 から堺を経て濱寺に行く坂堺本線も便利だ。詳しいことは旅行案内を見よ。

▲和歌の浦 へは和歌山から電車。

▲和歌山 から加太へ軌道。

▲和歌山市 から高野山口まで哩數二三九、賃金四十錢、途中粉河寺に寄るに便だ。粉河驛は途中下車驛。

▲大阪 汐見橋起點の高野鐵道に行けば、橋本まで哩數二八、一、賃金六十錢。

▲高野山 に登る駕籠は、高野口から二圓五十錢、女人堂まで一圓九十錢。

大阪より

松尾寺

牛瀧山

岸和田

二〇四
▲高野から吉野へは、橋本から汽車、哩數十六、時間一時間半、賃金二十七錢で吉野口へ。それから支線の軌道に乗る。

矢張、大阪を發足點にして出かけて行くことにした。
住吉から堺、濱寺あたりまでは、大阪の條に既に書いた。この南海線の線路は、電車を用ひてゐるので、頗る輕快で氣持が好い。和歌山までは、隣へでも行くやうな心持で行ける。

この線路の中で、旅客の行つて見るところは穴師神社、信田森、松尾村にある松尾寺、松尾寺の奥にある牛瀧山大威徳寺、西國巡禮の第四番の横尾寺などである。中で、牛瀧山は紅葉の名所で、秋は大阪から一夜とまり位でよく人が出かけて行く。汽車から丘陵の中を三里ほど山の中に入つて行くのである。

岸和田はちよつと繁華な町だ。そこには流行佛の蛸地藏がある。町の東には、久米田寺、久米田池がある。久米田池は狭山の池と共に上古灌漑の爲めに開疏したものと

貝塚御坊

往昔の日記

世に名高い。貝塚驛には、貝塚御坊の巨刹、また水間寺には、お夏清十郎の墓があると
いふことだ。

紀州近く、この線路の右の方は、往昔の日記で、允恭天皇が狩獵にかこつけて、一代の美姫衣通姫の許に通つたところだといふことである。萬葉集の中には、このあたりを詠じた和歌が非常に多い。

このあたりは、線路が茅渟の海に面してゐて、感じが好い。いかにも柔らかな靜かな氣分が漲つてゐるやうなところである。

やがて和歌山市に着く。
和歌山市で見るとべきものは、岡公園、市の東南岡山町にあつて、一名、天女山と呼ばれてゐる。林泉の美に富んでゐる。
城も見事だ。

それに、町には電車が通じてゐて、何處へでも行きたいところに行ける。例の日本三景に次ぐと言はれた和歌の浦にも、この電車で行けば譯はない。
先づ一番先に、誰でも和歌の浦へと志す。入江が大抵田になつて了つたので、昔のや

電車

和歌山市

和歌の浦



和歌の浦

うな面影は見ることは出来ないけれど、それでも、玉津島明神のあるあたりは、風光が頗る明媚だ。成ほど上方の人々が好きさうな静かな柔らかな景色だと誰でも思ふ。しかし入江が田になつたので、また田が人家になつたので、何處か俗なやうな気がせぬでもない。片男波は、明神から右へ行くくと数町のところにある。餘り大したものでもない。玉津島明神社から、入口を隔て、莫供山がある。岩石が高く聳えてゐる。そこに南仙神社と東照宮とがある。眼下に和歌の浦を見、左に紀三井寺を見る。

その近所に宿屋が澤山にある。蘆邊茶屋、望海樓、米新などといふのが大きい。大抵はつれ込宿であるから、夜中騒がしくつて寝られないやうな

眼に邂逅さないと限らない。丁度大阪人に取つての江島、鎌倉といふ形である。

新和歌の浦といふのが、近頃出来た。つまり和歌の浦の先の雑賀岬の此方の方のところがだ。紀州の海岸を航行する大阪汽船會社の汽船の何うかすると碇泊するところだ。此處に來ると、いくらか海らしい海が見える。波濤なども高い。

で、今度は車を雇ふなり船でわたるなりして、向ふ岸の紀三井寺に行つて見なければならぬ。例の『故郷をはるく、こゝに紀三井寺』と御詠歌に唄はれた西國巡禮第二番の靈場である。寺の門前は、賑やかな町を成してゐて、名物などをひさぐ店が兩側に並んでゐる。そこから見上げるやうな高い石階がついてゐる。

この石階を上りつめると、山門があつて、そこから見た眺望は中々好い。丁度金澤八景の能見亭。近江八景の三井寺に相當してゐる。『あゝ、これは好い』かう誰も言はずには居られまい。

本堂は流行佛だけあつて、可成に立派だ。女達は、歸りには苦しいなどと言つて、女坂を下りる。

で、和歌山へ引返す。暇があつたら、紀の川を渡つて、加太の淡島大明神に行つて見

根來寺

る。もう少し暇があつたら、賑やかな市中などをそこ、と歩いて見る。縣廳のあるところや、兵營のあるあたりや、城の下のあたりなど別に面白い變つたこともないが、ちよつと逍遙して見るのも好い。もし、さういふ暇がなければ、すぐに停車場に行つて、高野山行の汽車に乗つて了ふ。

途中に、船戸驛といふ停車場がある。紀州で名高い根來僧徒の據つた根來寺は、そこを下りて一里半位行つたところにある。昔は根來の僧徒と言へば、その剛勇なので世にきこえてゐた。織田信長も度々攻めたが何うすることも出来なかつた。しかし秀吉が起つてから、遂にその巢窟は覆へされて、寺は焼かれ且つ破壊された。それからは元のやうな大きな寺は出来なかつたが、それでも今は眞言宗の本山で、弘法大師の身代り鎌もみの不動を本尊として、賽者が常に陸續として絶えない。

粉河寺

それから、もう一つ旅客の寄つて見なければならぬ寺がある。それは粉河寺である。西國巡禮第二番の『父母のめぐみも深き』と御詠歌にある粉河寺である。それは、しかし、汽車の線路から根來寺のやうに遠く離つてゐない。線路の粉河驛からは、その大きな瓦葺が指されて見えてゐる。天台宗の巨利で、光仁天皇の御代大伴孔子の創立

富士崎の奇

したところである。これも矢張、秀吉に焼かれたが、慶長の後、再興して、以て今日に至つてゐる。

粉河で下りたら、次に、その東南十五六町のところにある富士崎の奇岩を見るが好い。それは丁度紀の川の北岸で、奇岩激流と相戦ひ岩頭に辨財天の小祠を安んじ、富士に似た巨岩が屹として川の中に聳えてゐる。對岸には俗に紀州富士と言はれた龍門山が聳立してゐる。

高野口

九度山

眞田父子の
址
牡丹

名手驛からは、舟岡山の勝地に行くやうになつてゐる。

妙寺驛つゞいて、高野口驛、そこで、高野山行の旅客は多くは汽車を下る。旅客は先づ紀の川を渡る。と、其處に、眞田昌幸、幸村の一時隠棲した九度山村がある。昌幸は其處で死し、幸村は此處から召されて大阪役に加はつて戦死した。昌幸の墓は、今でも善名稱院にある。そこは牡丹の名所で、高野山に遊ぶ人は、大抵其處に寄つて見るやうになつてゐる。これから推出川に添ひ、一里、路は漸く峻しくなつて、車の通じないところが又一里位ある。今では、女子供は駕籠に乗つて登るが、やがては輕便か、電車が出来るであらうと思はれる。



高野山金剛堂

やがて神谷に着く。高野の山中の町としてや、賑かである。近松の『心中萬年草』などが思ひ出される場所である。

これから極樂橋を渡り、不動阪を登る。終ると、既に高野山である。

神谷は高野口道、橋本道の相交又したところで、紀和線で東から来ると、橋本から此處へ出て来るやうになつてゐる。旅館には花本館、花屋、金川などがある。

山に入つて、先づ清めの不動で、手洗ひ口漱ぎ、それから岩不動、袈裟掛松、稚兒ヶ淵、花折坂などといふところを通つて、女人堂のところへ行く。昔は女はこゝから上へは登れなかつた。高野口から此處まで里程三里十六

町と言はれてゐる。

女人堂の前には、參詣人取調所があつて、氏名年齢籍住所などを調べ、宿坊の案内をして呉れる。やがて大門がその前にあらはれて来る。頗る宏壯である。高さ二十二間、表行十五間、奥行九間、二重の樓門を成してゐる。これから幾多の僧坊の左右に連る間を通つて、藥師如来を本尊にした金堂、夫から二町ほどで、金剛峯寺の本堂へと達する。

此の山は、日本でも昔から名高い靈地で、その沿革も古く、威嚴も神々しく、歴史にもよく出てゐる。昔の貴顯にしてこの登路を往來したもの、古來幾人といふことを知らないほどである。

創建は弘仁七年で、弘法大師が唐から歸つて後、日本全國を周遊して、特に此處を選んで、自分の基礎となし、以て眞言宗の正宗を天下に弘めたところである。つまり弘法大師の生命の繫つてゐる靈山であるのである。古來、變遷と榮枯とは免ることは出来なかつたけれども、それでも、今に、寺域二里半四方を有し、坊舎百三十餘を數へてゐるのであるから、以てその規模のいかに大きいかを知ることが出来る。

金剛峯寺の主坊は、東西三十間、南北三十五間、本尊は弘法大師で、歴代の尊像がそ

ここに安置されてある。梅の間、柳の間、書院、兵書院等がある。柳の間は豊臣秀次の自裁したところである。

その西に大學林、中學林の校舎がある。

これから一の橋を渡つて、奥の院の御廟に至る間、兩側は悉く墓で、殆ど立錐の地がない位である。貴賤上下、遠いも近いも、皆な此處に遺骨なり遺髪なりを持つて來て墓にしたもので、舊諸侯の墓碕は、殊に高大をきはめてゐる。平敦盛、曾我兄弟、武田信立、豊臣秀吉、織田信長、明智光秀などの墓が並んでゐる形は、面白いと言つて好いのか、不思議と言つて好いのか、滑稽と言つて好いのかわからない。

それから玉川の御廟橋を渡ると、今度は歴代皇帝の寶塔があつて、その奥に弘法大師入定の地がある。千餘年断えない灯をもつてきこえてゐる燈籠堂などもあれば、經堂、納骨堂などといふものもある。唯だ不思議に驚くばかりである。

兎に角不思議な一別天地であることは争はれない。冬は雪、春は花、秋は紅葉、夏は蚊を知らない。それに、山中にはめづらしいものがかなりにある。例の佛法僧といふ鳥、萬年草といふ草、こゝから出た水は或は瀧となり、或は川となり、或は瀬となつて四方

に流れ落ちてゐる。それに、林相にも富んでゐる。榎、檜、杉、樅、松、横——これが高野の六木である。

兎に角、旅客は是非一度登つて見なければならぬ。で、歸りは、神谷から橋本に出て、紀和線に乗つて奈良の方に来て好い。五條から吉野に入つて來ても好い。

十四 紀州の奥めぐり

- ▲紀州の奥に行くには、主として大阪名古屋間の大阪商船會社の汽船に乗る。
- ▲大阪田邊間の汽船は大阪發午後十時半、田邊へ翌日の午前十一時着。賃金田邊まで二等二圓内外。
- ▲田邊勝浦間 三等一圓二十五錢、二等一圓七十五錢。大阪から大阪勝浦間の愈

航に乗るもよし。緑川丸、武庫川丸。午後三時大阪發、翌午前六時勝浦着、田邊は夜中だ。

▲勝浦より 新宮まで軌道、哩數九、六、三等賃金二十七錢、那智山に至るには那智口で下車、本堂までそこから一里餘。

▲普通 の旅客には難かしいが、那智山から、大雲取、小雲取を経て本宮へ八里内外

▲熊野川 の早船は、本宮、新宮間一圓内外、瀨八町の船が五十錢。

紀州の兵

これは普通の旅客には、餘り必要がない。しかし、多い旅客の中には、何うも平凡な旅ばかりして歩いて面白くない。ちつとはめづらしい處にも入つて見たい。かういふ人もないとも限らない。それに、紀州の奥は、有名な山水の地である。私はこれを閑却して通つて行つて了ふ譯には行かない。

紀州は大きな國である。そして沿海線の非常に長い國である。西、和泉から、東、伊勢まで百二三十里ある。そして此間乃至此奥には、種々な名勝と山水とが隠れてゐる。それに、この國の南部は、潮流の加減で非常に暖かい。蜜柑が出来たり、榕樹があつたりしてゐる。春は三月になると、菜の花が咲く。

紀州の奥で、人口に喰灸してゐるのは、那智山、次に新宮町、次に勝浦町、次に北山川の瀨八町。それに、紀州灘は波の荒いところだと誰も彼も思つてゐる。

この奥に入つて行くのに、便利なのは、矢張、大阪熱田間を往復してゐる大阪商船會社の汽船だ。この汽船は大阪と熱田とから隔日毎に出る。そして志摩から、伊勢、伊勢から長いその紀州の沿岸を小さな港に寄港しながら絶えず航行してゐる。だから、この汽船に乗ると半日乃至一日で、陸を行つては到底車も何も通らないやうなところを樂に行くことが出来る。但し、この汽船はあまり大きくない。それに、餘り綺麗でもない。

先づ房州通ひの汽船の毛の生えた位のものと思へば間違はない。

波は紀州の悪灘だから、かなり荒い。比井岬の鼻、潮岬の鼻など中でも殊に險悪だ。波が甲板を洗ふやうなことは間々ある。しかし海岸を縫つて行くのだから、汽船が顛覆するやうな虞は滅多にない。

紀州を
汽船で行

しかし、陸にも捨て難い名勝が澤山にある。和歌山市から田邊に行く間でも、ちよつとカラアが變つてゐる。漆器の出来る黒江町、紀州蜜柑で評判な有田町、山の中にある龍神温泉、日高川の右岸にある安珍清姫の道成寺、由良、周參見の海港、熊野街道にある諸舊蹟、一々探討すれば、容易に盡きない面白味がある。

田邊町からは、海岸路と山路とが右と左に別れる。山路を行くと、田邊町から熊野の山中の本宮まで二十餘里、悉く山嶺の嵐氣の中である。海岸路を行くと、南の絶端の串本まで三十三里、すべて是漁蟹の村である。

であるから、紀州の奥——熊野地方に行くには、何うしても汽船で串木か、勝浦あたりまで行く方が好い。串本には、橋杭岩の勝がある。頗る奇景である。奇岩が橋の杭のやうに海中に飛び飛びに竝んでゐるのである。それから、古座には古座川の勝がある。「大八州遊記」の作者は、熊野川にも劣らない溪流だと言つて賞めてゐる。

勝浦には、温泉がある。そしてそこから新宮までは、新たに軌道が出来た。途中から那智山へと入つて行くのであるが、この路はさう大して峻しくはない。その代り景色も凡だ。唯、春先行くと、大きな蜜柑が黄く熟してゐたり、菜の花が咲いて蛙が啼いたりし

てゐるのがいかにも氣持が好い。那智山は其處から一里半位、町のあるところから、瀑のか、つてゐるさまが一目に見わたされた。そこから杉の竝木の中の磴道を上つて十町位で、那智山権現の堂宇のあるところに達する。

那 智 瀧
そこから瀧の下まで七八町位もあらうか。



瀧もかなり大きい。瀧のか、つてゐる絶壁も見事だ。しかし、雄大とか豪宕とかいふよりも、何方かと言へば、繊細な綺麗な感じを人に與へる。日光の華嚴などは比べ者にならない。こゝから大雲取、小雲取の峻を越えて、熊野の山中本宮に出る路があるが、これは中々峻しいから、普通の旅客には鳥渡むづかしい。



静八町

三輪崎から新宮に行く。新宮には、熊野神社、秦徐福墓などがある。徐福が薬を求めた蓬萊山は、實は此處であつたといふ話である。これから静八町まで行くには、熊野川を船で上るなり陸を歩くなりしなければならぬ。船は急流を上るので頗る遅い。路は峻しいが、寧ろ陸路を歩く方が増した。この間は溪山の勝が頗る見事だ。北山川の熊野川に落合ふ處まで五六里ある。それから北山川を溯つて二里ほど行くと、静八町に達する。深山幽谷の中で、ちよつと人は行けないけれど、旅客と言はれるには、こゝらあたりまでは入つて見る要がある。深潭碧を湛ゆること十五六町、この間を船で見に行く。何とも言はれぬほど好い。實際、天下の奇勝である。

溪の盡きたところに、田戸といふ處がある。そこには小さいながら旅館もある。こゝから護良親王の隠れた玉置山へ一里半位、途中に花折塚といふ片岡八郎の戦死した古蹟がある。下に下ると、十津川の谷に出る。しかし、本宮に行くには、そつちに行かずに、玉置山から間道を通つて行く。これも山路で、かれこれ二里位あつたと覚えてゐる。本宮は熊野川の沿岸にある。大きな華表のある熊野神社がある。町はさびしい。これから一つ小さな峠を越すと、湯の峯といふ温泉場がある。地方の人の行く温泉の割には設置が整つてゐる。歸りは本宮から、船で熊野川を下る。この船賃はさう高くない。何でも一圓足らずだと思つてゐる。それに、この河船は、旅客が是非乗つて見なければならぬものである。何故と言へば『大八州遊記』の作者が天下第一と激賞した熊野川の奇勝がそこに横つてゐるからである。

富士、天龍、玖摩、阿賀——さういふ種類の川と同じだが、山が深いので、感じが殊に幽邃だ。本宮から二三里下つたあたりが殊に風景がすぐれてゐる。

再び新宮に歸つて、元の道を勝浦に行つて汽船に乗る。これから、もう少し先に行つ

て、木の本の海岸の花の窟を探らうとする人は、三輪崎から、汽船で木の本に行く。このあたりはすべて風景の好い處で、南伊勢から来る熊野街道は、昔の名所圖繪にも詳しく書いてあるやうな處だ。

汽船で伊勢の長島まで行つて、それから峠を越して、伊勢の山田に出て来るのも面白い。長島から山田まで二日路である。

また本宮から、陸路を取つて、近露栗栖川の方を通つて、田邊に出て来るのも好い。この山路はかなり難道だが、潮見阪から田邊の方の海を望んだ景色は、中々すぐれてゐる。

十五 瀬戸内海

▲東京 神戸間哩數三七五哩四、三等三圓八十一錢。

▲東京 岡山間哩數四六五、五、貨金同四圓四十四錢。

▲廣島 まで五六六哩二、五圓十四錢、宮島まで五圓二十四錢、岩國まで五圓四十四錢。

▲下關 まで東京から七〇五哩七、六圓十一錢。

▲姫路 和岡山間は、山陰線に連絡する汽車、哩數四〇、九、貨金六十八錢。

▲岡山 宇野間は、讃岐へ行く至要の交通路、哩數二〇、四、貨金三四錢。

▲宇野高松間 の連絡船は軽快で氣持が好い。一時間半位。

▲津山 へは岡山から哩數四八、八、貨金八十五錢。

▲宮島 連絡船は、宮島停車場から一町ほど。連絡船心地よし。汽船貸片道八錢。

▲宇品 高濱間、汽船、朝八時半、午後一時、六時半、かう三度出帆する。時間

四時間、途中、音戸瀬戸の風景は好い。三等六十錢、二等一圓、波なし。

▲尾の道 から多度津へ汽船。

▲岩國 から錦帯橋のある岩國町まで電車、往復二十二三錢。電車の終點から錦

帯橋まで五町ほど。

●●●●●
 ▲小郡山口間 は七哩九、三等賃金十三銭。
 ●●●●●
 ▲原狭大窪間 は十二哩二、三等賃金二十一銭。秋吉臺の方へ行く道。

瀬戸内海一周は、面白い旅だ、中國線を宮島まで行き、それから引返して、廣島から宇品に行つて、そこから、汽船で伊豫の高濱に行つて、松山に行き、又引返して、高濱から多度津に行き、琴平に行き、高松に出て、そこから連絡船で、海を一飛び、兒島半島の汽車に乗つて岡山に歸る。これは、普通誰でもやつて、一番簡単な旅だが、これでも細かく見ると、随分いろ／＼なところを見て歸つて來られる。

で、先づ大阪から神戸に行く。この間には摩耶山がある。神戸では、楠公社と、生田の森と、諏訪山公園と、それから兵庫の清盛の人柱でも見れば、それで澤山である。車で飛ばせば譯はない。歩いたとて、半日か、れば樂に見られる。

神戸を見物するには、一つ手前の三宮停車場で汽車を下りる方が便利だ。そこを下ると、四五町で生田神社がある。例の源平の戦に梶原景季が簾に梅花をさして戦つたと

ころだ。今、神社の境内に簾の梅といふのがある。外に、梶原の井戸、敦盛萩などといふのもある。社殿もかなり立派だ。これから東北に行くと、布引温泉がある。旅館が二三ある。常盤館、富貴樓、菊水などといふ。その先に布引の女瀑、それから二三町奥に男瀑がある。この間の路は眺望に富んでゐる。海がよく見える。

其處から引返して、北野町から西に行くと、諏訪山公園に達する。此處も矢張眺望が好い。神戸の市街は、いくらか山に架してゐるやうにつくられてゐるので、到る處から海と港とが見渡される。公園には曾て金星を觀測した金星臺と言ふのがある。

諏訪山は、温泉もあれば、料理店もあるといふ。歡樂境で、逗留して、緩くり遊んで行きたいやうな處だ。旅館も、神戸一流の好い家がある。

しかし、急ぐ旅では、さうゆつくりもしてゐられない。すぐ下りて、町の通へ出て、それから海岸へ行つて見る。港は横濱と比べては、規模は小さいが、棧橋がすぐ近くにあつて、船に乗るには便利だ。外國人の多く住んでゐるところなども、小ざつぱりしてゐて好い。

相生町に出て、相生橋を渡つて、神戸停車場の傍から、楠公社へと行く。楠正成

の湊川に戦死したところで、水戸の義公の建つた例の『嗚呼忠臣楠子之墓』が表門を入ると、すぐ右の方にある。七八年前までは、名古屋の大須観音見たいに、境内が見世物や飲食店で雑沓してゐて、頗る社の尊嚴を害してゐたが、湊川附替の工事が出来上つてから、それをすべて其方へ移したので、今では、さういふ俗氣はなくなつて了つた。境内には、日清日露の分捕物が澤山に竝べて奉納されてあるのを見る。

この社の北四町に、楠公の一族七十三人が自盡した廣嚴寺がある。俗に楠寺と言はれてゐる。その南一帯の地は、福原の遊園地のあるところで、神戸の俗な方面を代表してゐる。

神戸に来て、感慨に堪へないのは、此處に一度平清盛が都を遷さうとしたことである。その時分、この一帯の地は、既に立派な市街になるところであつたのであつた。福原奥平野などに、今日でもその址が澤山に残つてゐる。處が、それが中途でやめになつて、また元の魚蟹の村となつて了つた。そして何百年の星霜を閲した。義公が楠公碑を立てた時分には、此處等はすつかり田圃であつたのであつた。頼山陽なども、船で海から来て、そして、その墓を訪うて詩を賦した。昔の名所圖繪などを見ると、田の中にほ

つつりその碑が立つてゐて、その前に旅客が参拜してゐる圖などが書いてあつた。それが一朝にして、今の繁華な港となり、市街となつた。考へると、不思議な氣がせずには居られない。

神戸では、紹介するものがあつたら、川崎造船所の内部を見せて貰ふ方が好い。奥平野から湊山の方まで行つて見るのも好い。會下山などに登つて見るのも好い。

で、神戸をすまして、今度は兵庫の方へ行く。今では殆ど人家がついてゐる。兵庫は神戸と違つて、昔、和船の港としてかなりに榮えたところだけに、家のつくりも、路の具合も、神戸と違つてや、古風だ。來迎寺には、松王人柱の碑があつて、清盛が、經ヶ島(筆島)を埋め立てた時の記念を語つてゐる。その西南の眞光寺に、清盛の塔や、經政の琵琶塚がある。それから眞直に行くと、和田岬に出る。新田義貞が足利尊氏の水陸の軍を邀撃して敗れたところである。岬頭には、舊砲臺、燈臺、水族館などがある。春先などにちよつと遊びに行くのに好い。その他、本間孫四郎遠矢の跡などが残つてゐる。神戸の旅館では、西村、中居、蓬萊館、諏訪山の西常盤、中常盤、東常盤、常盤化壇、音羽花壇などである。

須磨は神戸から四哩、二十分か、れば行ける。

こゝで説がなければならぬのは、例の源平二の谷の合戦である。平氏の陣した址、安徳天皇の行在所のあつた跡、三の谷、二の谷、一の谷、すべてこれ、曾て平氏の軍勢で埋められた所であつた。それを義経は、神戸の裏の方から来て、搦越を越えて、一氣にこれを押破つて了つた。敦盛が熊谷に打たれた址には、今敦盛塔が残つて立つてゐるし、すべて其當時の古蹟を語つてゐないものはない。

それからすつと溯つて、源氏物語の時代の思出されるのも、この海岸だ。この海岸には別に地形の變化がないから、その時分も今もそのさまは變つてゐないだらう。矢張松があつたらう。漁村があつたらう。さう思ふと、感慨が頻りに起つて来る。

松風村雨の臺、須磨寺に琴柱の松をたづね、敦盛の青葉の笛を一目して、昔を偲ぶのも興味も饒い。旅館には、海月館、松の家、敦盛樓など、いふのがある。

敦盛塔から五六町行くと、鹽屋驛、次は舞子驛だ。一體、須磨から明石までの間は、汽車の中から見ても景色の好いところだが、むしろ其處は旅客は徒歩で歩いて見る方が好い。其方が興味も饒いし、感じも好い。里程もわづかしかない。三里に少し遠い位の

ものである。

この海岸から見た淡路島は、中々好い。頼山陽が、「一帆如坐一帆行」と吟じたが、實際さういふ景色だ。扇頭の小景と言つてわるく言ふ人もあるが、しかし、此處は此處で、靜かなのんびりした氣分があつて、春の日などに歩くと、何とも言はれない、「うつくしき舞子が濱は春がすみよそはふ時ぞ見るべかりける」私は其處でかういふ歌を詠んだ。

そして、この海岸では、矢張舞子あたりが、その中心を成してゐた。松のた、すまひなども捨て難い。一夜、靜かに泊つて行きたいといふやうな氣がする所だ。旅館には、龜屋、萬龜樓、海老屋、松菊樓、皆な好い旅館だ。



濱の子舞

垂水には、海神社がある。今、國幣中社で、神功皇后時代からある古社として名高いものである。

やがて明石に着く。

此處に來ると、淡路島は、もう餘程左になつて見える。明石の城址は、汽車の中からも見えて行けるが、寫眞などでもよく人に知られてゐる舊城址だが、この山寄りの處に、公園だの、人丸神社だのがある。人丸神社は、ちよつと行つて見る價值がある。此處にある人丸の像は、歴史上にも信用の置けるものださうである。龜の井、盲杖、櫻などいふものがある。

町の善樂寺には、源氏の明石の巻にある明石入道の碑がある。

明石からは播州の太山寺に行く路が東北にわかれて行つてゐる。太山寺は鎌足の男定慧の創建したもので、境内も廣く、境も幽邃である。二王門にか、けてある扁額は、小野道風筆として世にきこえてゐる。

明石からは淡路島岩屋方面へ和船がいつでも出る。

これから姫路まで行く間に、旅客の是非見通してはならない勝地がある。それは即

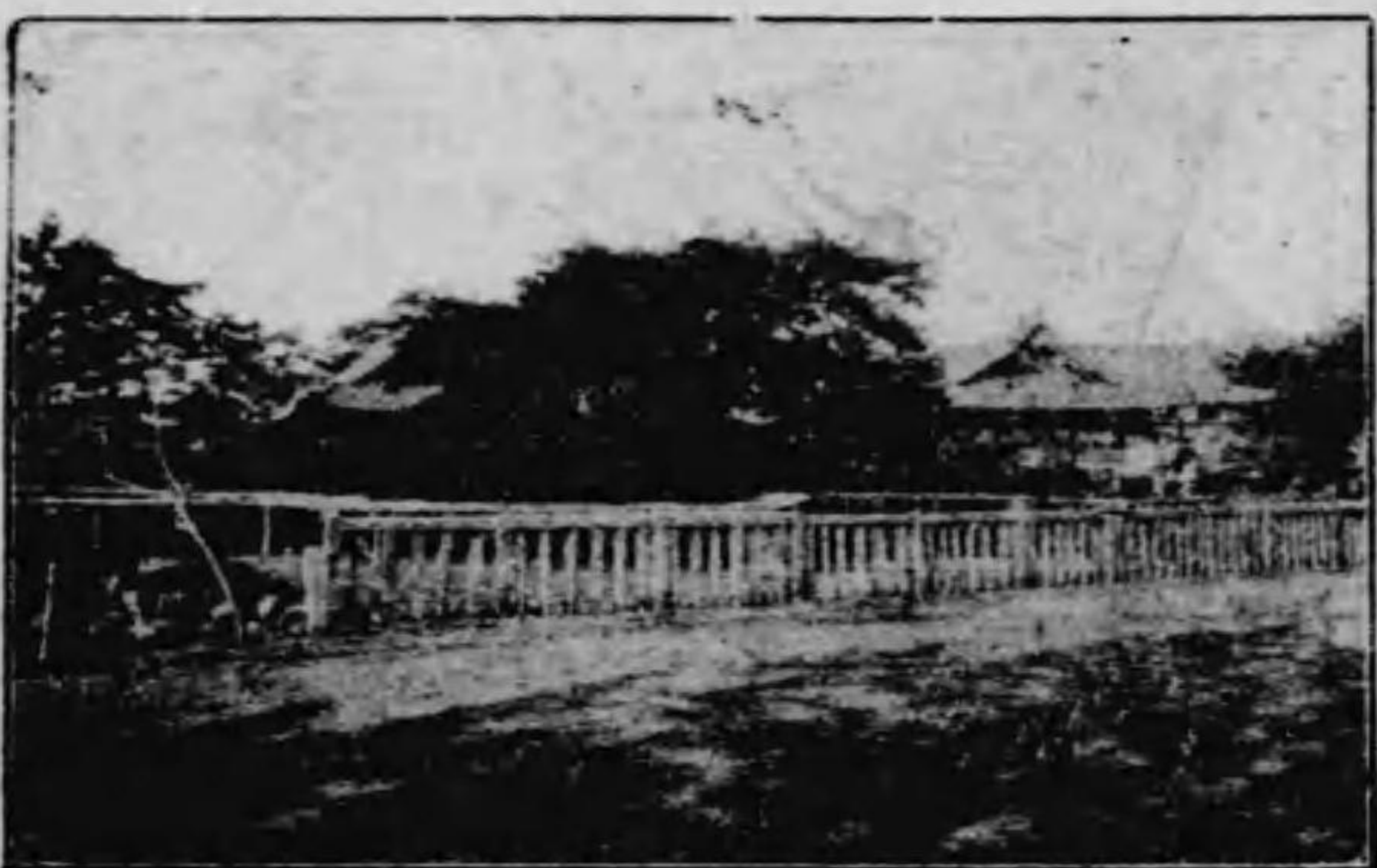


生石神社(石寶殿)

ち播州の松めぐりである。これは、高砂の尾上の松、別府の手枕松、尾上の鐘、石の寶殿などを見て、最後に會根の松を見たいふ順序である。

それには寶殿驛で下れば、石の寶殿に行くには一番近いが、順序としては、加古川驛で下りて、先づ別府に行き、それから高砂に来て、松と尾上の鐘とを見て、石の寶殿から會根の松の方へと行く方が好い。加古川から車賃がすべてで七八十錢あれば足りる。

松としては、別府の手枕の松が一番好い。相生の松は代が變つたので、や、新しい。手枕の松についでには、會根の松である。ことに、石の寶殿は、是非見なければならぬ。それは頗る古いもので、風土記にも『池之原南有作石、形如屋、長



曾 根 の 松

二丈、廣一丈五尺、高又如之、傳之聖徒生御世、
弓削大迪所作之石也」と書いてある。少くとも二
千年以上を経過したものである。今、そこに生石
子神社が祀つてある。この近傍では、頻りに石を
切り出してゐる。

この石の寶殿の少し向ふに、觀瀾所といふ處が
ある。大きな石に、姫路の藩儒永峰某の揮毫した
觀瀾所の三字が大きく刻んである。此處は播磨か
ら四國の山を見渡して景色が好い。
曾根の松は、菅原道真が太宰府に左遷せられた
時、此處に上陸して紀念に稚松を植ゑたもので、
今の松はその三代目だといふことである。そこは
は天満宮が祀つてある。曾根は松と入江との間に
あるやうな繪のやうな村だ。



瀬戸内海

姫 路 の 白 鷺 城

曾根の近所に、兒島範長の戦死したあと
が残つてゐる。

市川の鐵橋をわたると姫路市、そこには、
舊城址にある天主閣、射楯兵主神社、町の
西北十六町にある藥師山の遊園地、北方
一里七町餘を隔てた廣峰神社、姫路山の麓
にある芭蕉翁の冢などがある。辨慶が鬼
若丸時代に荒した書寫山園教寺は、天台の
巨利で、市の北二里三十町位のところに
ある。

この外、飾磨の津なども行つて見て興味
が多い。

汽車は此處で、播但線を右に岐つてゐる。
この線路は、中央脊梁山脈を破つて、但馬

の牛野鐵山に出て、和田山に行つて、山陰線と連絡してゐる。この間、時間は二時間半、汽車賃は三等六十八錢。

山陽線の汽車は右に丘陵、左に海を豫想して、絶えず進んで行く。平々凡々で、人目を惹くやうな處はあまりない。それに海も容易に汽車の窓から見えない。龍野には、榎保川の鮎鱒がある。また、そこから南に三里ほど行くと、昔、船着で、遊廓のあつた室の津がある。今は衰へて、見る影もないけれど、ちよつと變つてゐて面白い。

那波驛からは、例の四十七士の赤穂へ三里だ。矢張南に行くのである。途中に小さな峠があるが、車は樂に通ずる。町の草岳寺は淺野家の菩提所で、四十七士の遺物を珍藏してゐる。舊城内には大石良雄の邸跡の、遺愛の櫻だのがある。

此處は赤穂鹽の主産地である。

瀬戸内海の勝を探らうと思ふには、汽車で旅行しては駄目だ。矢張、この海岸を飾るから阪越、尾崎、牛窓、虫明など、いふ風に行つて見なければ、本當の味は味はれない。昔は交通が主に船で、四國から上方に上つて行く人は、皆な船で一つ一つさういふ港を通つて來たから面白かつたのである。それに、その時分は、船の往來が頻繁であつたか

ら、港も從つて繁昌した。

上郡驛からは、北に美作街道、因幡街道がわかれて行つてゐる。汽車のない時分には、山陰道の鳥取、松江に行く人は皆な此處から下りて行つた。例の後醍醐天皇が隱岐に行幸せられた時にも、此處から杉坂峠を越えて、作州の津山の方へと出て行かれたのであつた。この近所は南北朝時代には、赤松圓心の勢力範圍で、その根據地の白旗城は、その北一二里の處にあつた。後に山中幸盛が毛利に對抗した上月城も、何でもその少し奥の方にあつた。

やがて三石のトンネルが來る。兒島高德が據つて以て後醍醐天皇を奪ひ奉らんとしたところである。今は、春通ると、赤ちやけた岩山に躑躅などが咲いてゐた。そこでは蠟石細工などが出來た。

藤野の芳嵐園、和意谷の池田家の墓所、和氣驛近く流る、東大寺川、旨い鮎、山陽街道の片上町の近所にある伊部焼の主産地、「古備前物」の珍重される長船の刀、西大寺の會陽、さういふこま／＼した名勝が、岡山に行くまでの汽車の兩側に澤山にある。和氣から少し行つた左には、兒島高德の據つた熊山が指點される。



岡 山 後 樂 園

やがて岡山に着く。

岡山にはかなり見る所がある。第一に、先づ後樂園である。日本での三大名園と言はれるだけ頗る林泉の布置に妙を極めてゐる。亞公園の七層樓、榮町通の雜沓、城址の天主閣、市で一番賑やかだといふ京橋の畔、そこから真直に突當つた東山公園、その東の櫻山にある三動神社、東照宮など、半日位ゆつくり遊んで行くには十分である。

其他、蓮昌寺、本行院の中にある小早川秀秋の墓などもある。

後樂園は、金澤の兼六園と水戸の偕樂園と比べて見て、矢張此處が一番好いと私は思ふ、兼六園などに比べては、餘程明るい藝術的の感じのする好い庭園である。

こゝで、美作の津山の方へ行く中國線が岐れてゐる。

中國線は洪井から来て、此處を横つて、そして北へ向つて走つて行つてゐるのである。この線路は半ば旭川に添つてゐるので、風景が好い。作州の津山まで、時間は二時間、汽車賃は三等八十五錢である。

それから、一方、兒島半島の宇野に向つて、汽車が左にわかれて行つてゐる。四國の高松に行く唯一の線路で、この線路は兒島半島の卑濕地から、瑜珈山の東を掠めて、ぐるぐる廻るやうにして、その終點宇野灣に達してゐる。宇野まで時間一時一分、汽車賃三等三十四錢である。宇野からは、高松に行く連絡船がいつも明るいペンキ塗の色を碧い海に見せて待つてゐる。頗る便利である。

岡山附近で旅客の思ひを誘ふものは、高松水攻の遺址と、吉備津神社と、豪溪と、この三つである。吉備津神社は二つある。一つは岡山附近の一の宮に、一つは備中にある。共に推古天皇時代の古社だけあつて、中々宏壯である。中でも、備中にある方が、規模も感じもすぐれてゐる。それから少し北に行くと、高松の城址がある。秀吉が足守川の水を引いた當時のさまなどが想像される。秀吉の本營を置いた蛙の鼻と、毛利の高等司令部のあつた底山と相對してゐる形なども面白いと思ふ。

そこから高松の稻荷、總社、高梁街道の虫粟といふところから、右に横谷川の谷を入つて行くと、豪漢が其處にある。溪流としてはや、小さいけれど、岩石にはめづらしいものが多い。中に武元登々庵の天柱といふ二字を書いた石がある筈だ。

それから、岡山の近所の今村には、黒住教の本社宗忠神社がある。

汽車は岡山を出て矢張同じやうな處を通つて西に向ふ。

倉敷は花笠の主産地だ。それに大きな紡績會社などもある。やがて河邊川の鐵橋をわたつて、玉島驛に着く。こゝにはちよつとした海水浴場がある。町も明るい好い感じの

する町だ。沙美海水浴には、療養院がある。この附近は、東海道の平塚、茅ヶ崎など、

同じやうに、空氣に一種のオゾンがふくまれてゐて、病人などには好いといふことだ。

金神驛には、金光教の本部の大谷金神があるので、祭日には停車場が一杯になるほどの

の賽者が蝟集する。

鴨方驛と笠岡驛との間で始めて海が見える。汽車で來ると、明石から此處まで殆ど

海の光を見ることが出来なかつたのである。その爲めか、感じが急に新しくなる。前に

横つてゐる島は神ノ島、その手前にある小さな島は片島である。西の方に見えてゐる島

は葦島で、その向ふに大きく横つてゐるのは、その絶角に輛の町を有してゐる沼隈半島である。

笠岡の町は丘に凭つて、そして海に臨んでゐる。汽車の中から見ても、一夜位泊つて

行きたいやうな氣のするところだ。こゝから少し行くと、備後で、やがて福山の市街と、

その白壁の城とが見え出して來る。

山陽街道の井原と福山との間に、神邊といふ一小驛がある。そこには菅茶山の廉塾が

あつた。『黄葉夕陽村舎詩』は實に其處で出來たのであつた。頼山陽も安藝から上方に行

く途中には、いつも其處に寄つて行つた。山陽の詩にも、だから、此の近所を詠じたも

のが多いのであつた。

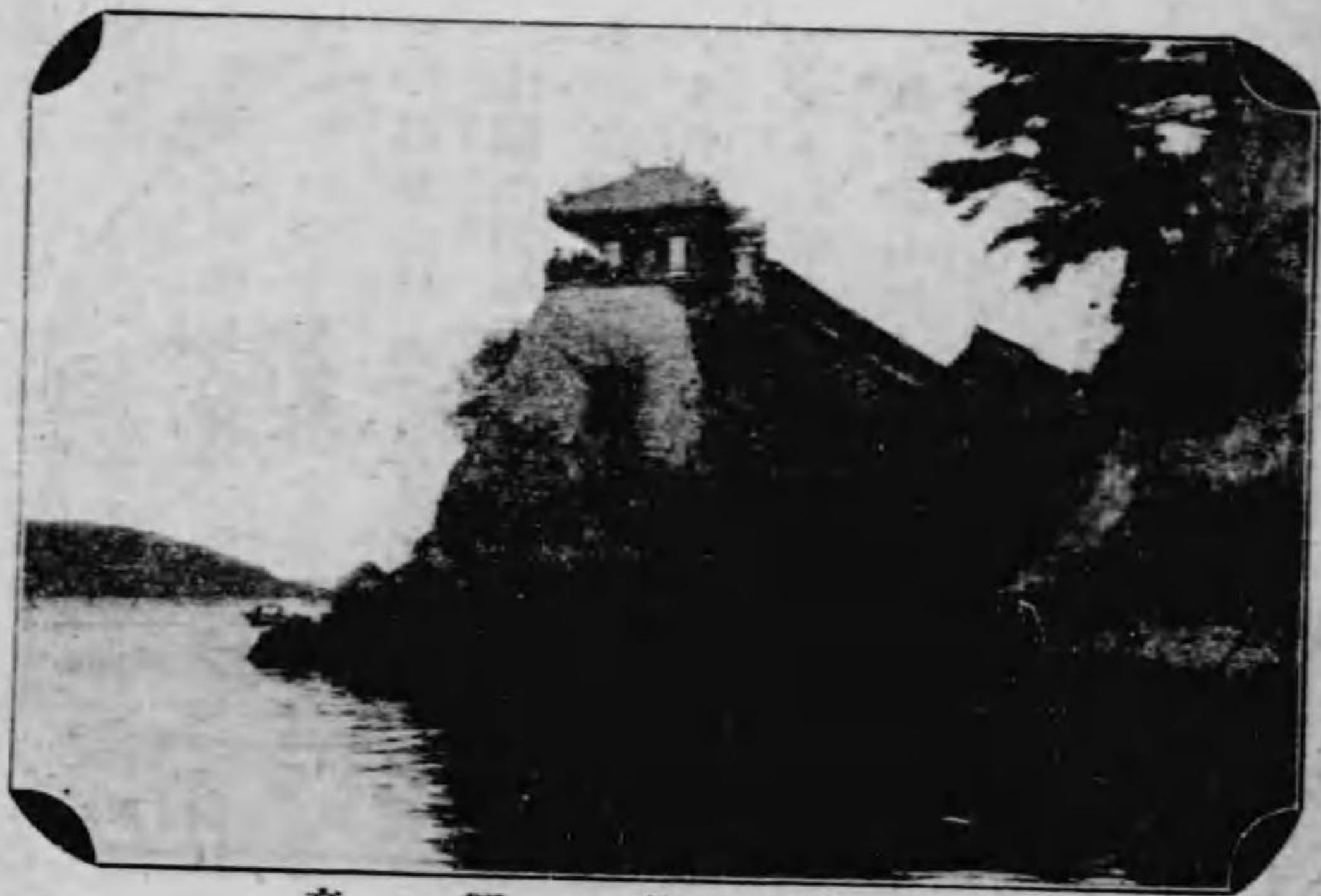
福山からは、出雲街道と伯耆街道とが右にわかれて行つてゐた。

福山からちよつと南に入るが、瀬戸内海の眞の風光を知らうとする旅客は、其處から

輛の津に行くことを忘れてはならない。

輛の津は沼隈半島の一角で、斜に讃岐の多度津と相對してゐる。海を隔て、靡いて見

えてゐるのは、象頭山とそれに連つた山脈である。



阿伏菟觀音

町と、町にくつつくやうになつて海中に浮んでゐる仙醉島とは、丸で繪のやうである。こゝは瀬戸内海の要津で、神功皇后以來世に知られてゐるところで、交通の便を水路に取つた昔にあつては、頗る殷賑な趣を呈したであらうと思はれる。足利時代に經營されたといふ安國寺といふ寺もあれば、重盛の石碑のある小松寺といふ寺もある。名物は保命酒、壘表、花筵などがある。遊廓などにも、古の趣が残つてゐて、何となくなつかしい。

その他に、此處では非見なければならぬものは、町から少し離れて、宇後地にある沼名前神社と、千手觀音が祀つてある福禪寺とである。前者には國主水野勝成が桃山から移



尾道の港

瀬戸内海

したといふ能舞臺がある。後者には「日東第一勝」と韓客の題した對潮樓の舞臺がある。こゝ、あたりから見た瀬戸内海は、尤も粹と美とを極めたものだ。

それから少し暇があつたら、その西一里ほどのところにある阿伏菟觀音に行つて見るが好い。そこは觀音堂の舞臺から梶子瀬戸を見渡すといふ形になつてゐて、雑誌の口繪の寫眞などによく見かける瀬戸内海屈指の勝景の所である。

福山から松永、尾の道——其處は千光寺の眺望できこえてゐる。汽車の右に見える山が即ちそれである。しかし、此處を度々通る旅客もつい臆却なので、汽車を下りて、そこに登つて見る人も稀であらう。が、私は是非それをお勧め

する。尾の道市も賑やかな處ではあるし、ちよつと一汽車おくらせば、何の不便もないのであるから。

そこに登るには、停車場から三四町、町の通を左に行く。そして郵便局のあるところの少し行つた處から左に入る。登路二三町で、寺のある處に着く。寺は松と岩石とで蔽はれて頗る風致に富んでゐる。千百年來の古刹で、後に多田滿仲が再建した。岩にはいろいろな名がついてゐる。烏帽子岩、重岩、屏風岩、蛤岩などといふ。

寺の本堂の庭から見た眺望は、頗る美だ。尾の道瀬戸に朝霧の沈んでゐるさまなどは、他には容易に見ることが出来ないものである。前にある向島の形も好い。こゝと、阿伏菟岬と、鞆とこの三つを見れば、瀬戸内海の大觀は略盡したと言つても好い。寺から下りて来たところに、清水の湧き出している井戸があつた。

そして、この寺の上は、千疊敷と言つて、昔の城址であつた。今は開いて、公園にしてゐる。

尾の道からは、多度津に通ふ汽船が毎日出る。その他にも、此處を基點として、彼方此方に出て行く船便は澤山ある。旅客は此處で下りて、四國に渡つて見るのも好い。

尾の道から糸崎、三原、それから、再び山の中に入つて、沼田川の幽谷を溯つて行く。三原は小早川隆景の城のあつたところである。停車場の西北十八町に、月ヶ瀬に比しても劣らないと言はれた西野の梅溪がある。

これから廣島の手前の海田市驛に出るまでは、全く山の中である。西條だの、二本松だのといふ驛がある。西條は柿の名産地だ。清酒、木綿なども出来る。左に鏡城山といふ獨立山がある。こゝから西條川の谷に沿つて下つて、海岸の竹原の方へも、呉の方へも行く路が岐れてゐた。

海田市驛に來ると、又海が見えた。菅茶山の詩に『夷唐山如斷、城近簇人烟、崖曲蕃蕨圃、江灣牡蠣田、舍郎借驛遞、賈豎課官船、一宿津亭夕、潮鳴客枕前』といふのがあつた。實によくその附近のさまを寫生してゐると私は思った。實際、今でも甘藷の畑と牡蠣の田が多い。所謂廣島牡蠣といふのもこゝ、らと廣島の市街の南の海岸とで養ふのである。

海田市からは、呉市の方へ行く支線がわかれて行く。そこから、呉までは、三十分か、れば行ける。

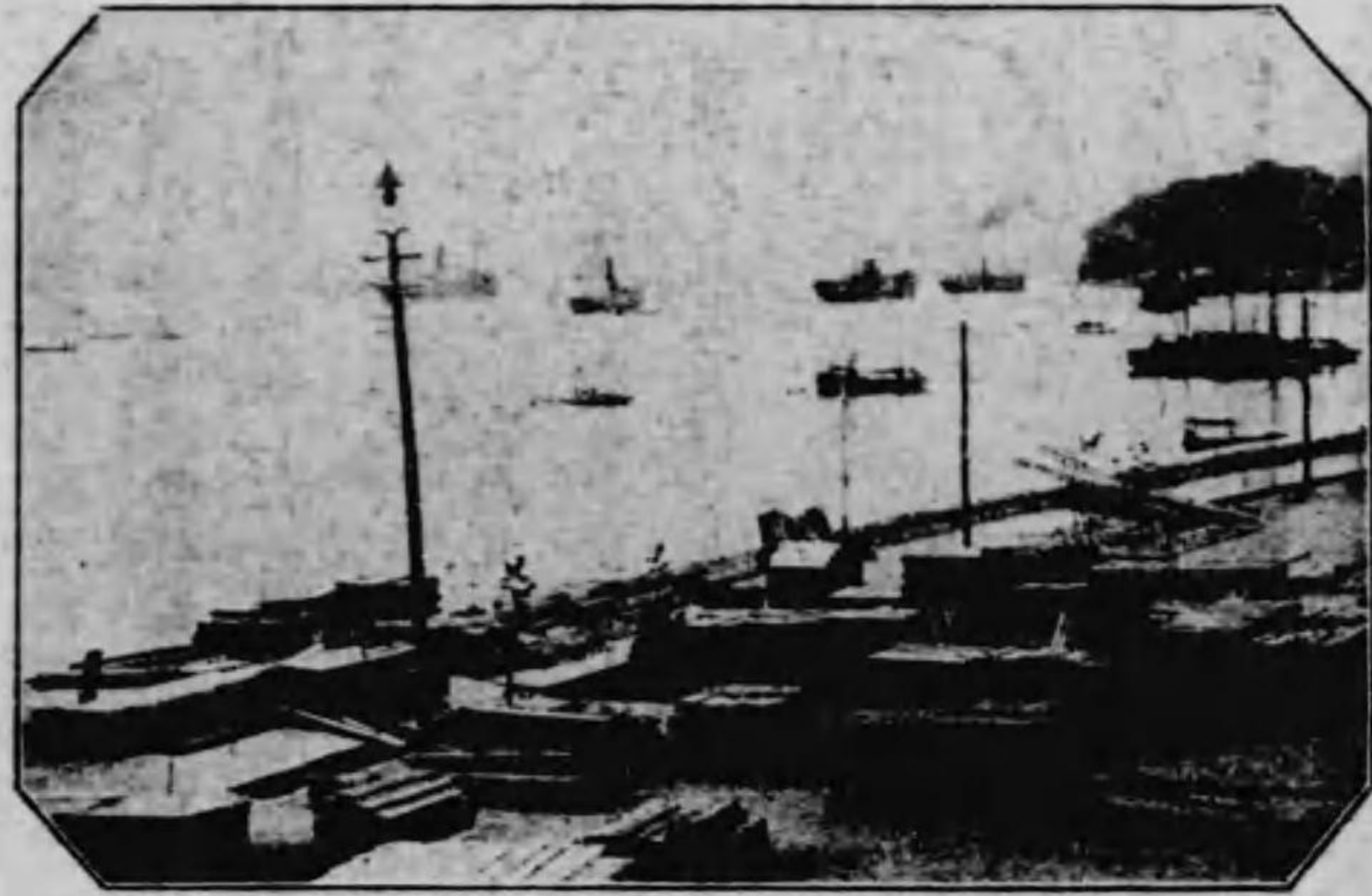
廣島に来ると、気が晴々する。漸く此處まで来たかといふ気がする。もう例の日本三景の宮島も近い。かう思ふと、一段落ついたやうな気がする。

浅野泉邸



廣島では、城址と、天主閣と、大手町から元安橋にかけての繁榮なさまと、浅野侯の邸であつた泉邸と、比治山の眺望と、饒津公園と、それから市の南の方にある公園と先づこの位行つて見れば澤山だ。中で、泉邸と饒津公園とが好い。泉邸は、しかし、見せて貰ふのに時期があつて、平生いつでも行つて見るといふわけには行かない。しかし、庭園としては、小じんまりしてゐて、や、趣致に富んでゐる。堤を上ると、太田川の流の見えるのなども好い。

饒津公園は、市の西北になつてゐる。市街の中央からはかなり離れてゐるが——大手町から一里近くあるが、汽車では、丁度その横を掠めて行つてゐる形になつてゐる。公園の中には、饒津神社があつて、松の木の大きいのが影を濃かにあたりに落してゐる。公園の奥に、二葉山といふのがあつて、そこは眺望が好い。蒲洒な料理屋などもあつた。



宇品港

この公園の右の方に招魂社、頼政の室高蒲の前が遺言して建てたといふ鶴羽神社、石段の高い東照宮などがある。そのこの樓門の前からは、廣島市の萬葉を隔て、宇品、宇品島、江田島、嚴島などが一目に見渡された。好い眺望だ。廣島から宇品までは確か電車が出来たと思ふ。宇品は丁度廣島の前港を成してゐるといふ形になつてゐた。歩けば、里程二里位あると思つた。何とかいふ橋があつて、それを渡ると、長い町がついて、そして港へと入つて行つた。

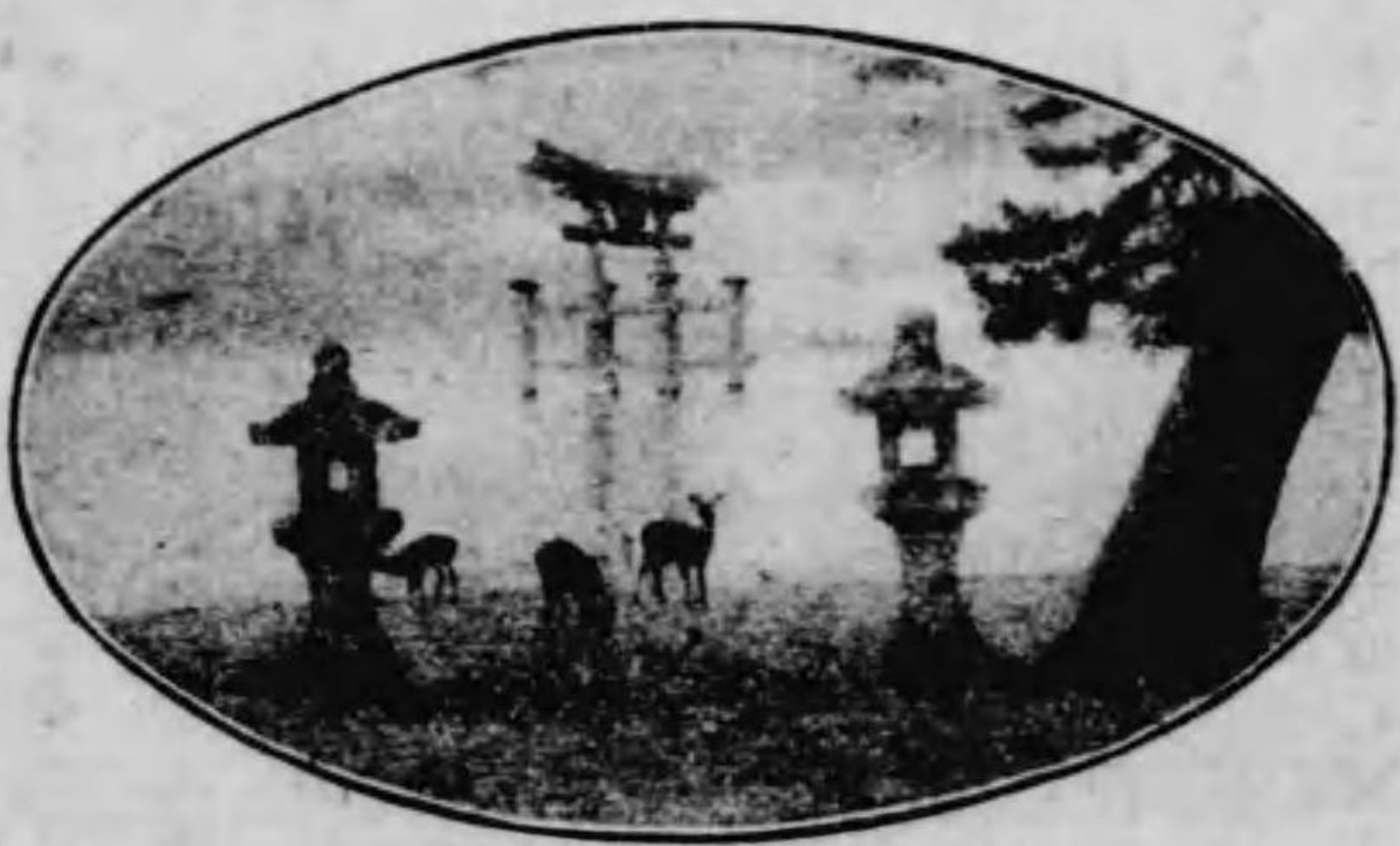
時の知事千田貞曉が萬難を排してつくつた港で、日清、日露の兩役には、兵士は大抵此處から乗船して戦地に向つた。

此處からは四國の伊豫の高濱に行く汽船が毎日出て行く。この汽船は、吳に寄つて、平清盛の開鑿したといふ隠戸の瀬戸を通つて、そして高濱へと出て行くのであるが、風光の好いところで、旅客は容易に甲板の上から下りられないほどだ。高濱まで四時間あれば行ける。宮島見物に行つた人は、多くは此處から松山に行き、引返して、また汽船で、多度津から金比羅、高松の方へと廻つて行くものが多い。

廣島から出て行くと、太田川が見える。この川の上流には、可部町、毛利元就の出た吉田町、それからすつと奥に、霧の海でこえた三次町がある。今では、そこまで汽車が出来た。

廿日市あたりから、海岸の松が凡でない。海も好い。嚴島はすぐ向ふに大きく見えてゐる。やがてトンネル、丘陵の中、ついで、明るい宮島の停車場に着く。

そこで下りて、真直に路を海岸の方へと行く。そこに連絡船の待合室があつて、向ふに渡る切符を賣る。たしか片道八錢だと覚えてゐる。



嚴島

連絡船は軽快な綺麗な白いペンキ塗の心持の好い汽船だ。

好加減客を集めて、それを載せて、汽船は静かに出て行く。前にはもう例の宮島の華表の海中に浮んでゐるのが見えてゐる。人家がゴタゴタと固つて見える。帆船が無數に碇泊してゐる。

海上二三分、やがて嚴島に着く。其方にも矢張り、連絡船の大きな待合所がある。其處を出ると、暫しの間片側町で、一方は美しい海である。やがてひだり手に千疊敷のある丘の下をぐるりと廻つて、潮の中に浮き出したやうな社殿のところに行く。先づ、そこで社殿に入る。案内料を拂ふと、案内者が先に立つて、ひろい氣持の好い廊下を一々案内してつれて行く。さした潮の引残りが、ところどころに小さな池を成してゐる形も面白ければ、他の社殿のやうに、押詰つて暗くなつてゐないのも好い。感じがいかにも明るい。昔はこの廊下に、

無数の繪畫がか、けられてあつて、中には國寶になるやうな名畫もあつたが、今ではそれをすつかり取外して、一部は倉庫に入れ、一部は寶物庫の中に置くことにした。で、

社殿を一通り見て、大元浦の方へ行くと、其處に公園がある。彌山の方へ登つて行く路はそこからわかれて



千疊敷と五重塔

潮が干てゐると、その海中の大華表のすぐ下のところまで、下駄ばきで行くことが出来る。この華表は、時々改築するけれども、その形は、昔のままで、少しも變へないといふことである。本社殿の舞臺のはづれから、此處まで八十八間あるといふことである。潮の満ちてゐる時に、わざわざ船を漕ぎ出して行つて見るのも面白い。

五重塔なども立つてゐる。そこに行くには、社殿の左から、細い道を少しの間上つて行

く。大きい小さいしやもじの掲げてあるのが段々眼に附く。やがて大きな堂の中に入つて行く。

外國人でない我々でも驚くほど、大小無数のしやも子が其處にか、けてある。そして其處に來た遊覽者のいろ／＼な名が書いてある。満堂悉くしやもじだと言つても差支ない位だ。

此堂は豊臣秀吉が征韓の役の記念に寄附したもので、此處では名高いもの、一つになつてゐる。

宮島に來て、旅館は何うしても岩惣が一等だ。位置が好いし、感じが好い。設備もよく整つてゐる。宿賃などもその割には、さう高い方でもない。私の考へでは、宮島は、海山の眺めも好いが、紅葉谷の公園が好い。新緑と紅葉の時が殊に何とも言はれない。そしてその岩惣は、その公園の中に位置して、その好い處を獨占してゐるやうな形になつてゐる。離座敷の欄干の前に腰をかけて、潺湲と流れる水を見た時の世離れた感じは、ちよつと他に求めることは出来ない。宮島に行つたら、是非岩惣に一夜泊る方が好い。少し位高い宿料や茶代にはかへられない印象を旅客はそこから受けることが出来る。

この他には、宮島にはもう見るところがない。彌山に登れば好いが、これは今ではちよつと厄介だ。しかしケールブルカーか何かやがて出来る筈だから、その中、旅客は容易に其處に上ることが出来るやうになるであらう。この他、船を儲つて、七浦七えびすを見て廻るのも面白い。

宮島は、歴史上にもちよつと面白い。例の清盛のこともあれば、毛利と戦つた陶晴賢のこともある。この島——この扇頭小景のやうな島は、昔からいろ／＼な歴史で彩色されてゐるのである。

それに、宮島の町が特色に富んでゐる。貝細工や土産物を賣る店と旅館とが並んで、狭い通には、何處となく漁村らしい感じが交つてゐる。江の島の町などよりも、感じが好かつた。

こゝからは、別府、吳などの方に行く汽船が毎日出る。旅館で聞けば、その時間などはすぐわかる。それに、吳鎮守府や江田島が近いので、海軍の白いランチなどがよく海上を鷗のやうにして通つて行く。軍艦が五隻も六隻も海中に碇泊してゐるのを見ることなどもあつた。

宮島を出て又西行の汽車に乗る。玖波驛はもう周防國である。そこには、小さき海水浴場が開けてゐた。

その先の小方にも、海水浴場があつた。此處あたりに来ると、瀬戸内海も尾の道、輛あたりとは丸で感じが違つて來てゐた。海もひろく、波も大きく、島々も面積の廣いものが多くなつてゐた。左に宮島を見て、南に大島列島を望んだまは、今までの瀬戸内海には見られない好い眺望であつた。

大竹驛の奥には、小瀬川の上流に、蛇喰魚切などといふ溪流の奇勝があつた。

しかし普通の旅客は、さう細かく入つて見てゐる暇はない。宮島から岩國までは、すつと汽車で行つて了ふ。

岩國には、例の錦帯橋がある。これは一度は見ても好いものであつた。昔の名残——開けなかつた封建時代の遺物と言つたやうな氣のする橋だ。

其處に行くのには、一汽車遅らせるつもりなら、樂に行つて見て來られる。岩國の停車場の前には、岩國町に通ふ電車が待つてゐて、すぐ旅客を其方の方へと連れて行く。二十分ほどで、電車は山に近い感じの好い岩國の町へと入つて行く。そこはもとは六萬石の



岩國錦帯橋

城下で岩國縮、岩國蚊帳、岩國半紙などといふ物産の出来る賑やかな町だ。

電車の終點から、右に眞直に、士族町らしい處を五六町行くと、もう其處は橋であつた。橋も面白いが、橋の架つてゐる岩國川の眺望も好い。向ふの山は、丁度京都の嵐山に似てゐる。

橋を渡つて三四町行くと、城址があつて、そこは公園になつてゐる。中には吉川元春以下歴代の靈を祀つた吉香神社がある。城濠に白い藤の花の咲いてゐるのも面白ければ、その前に藤の花の茶屋のあるのも感じが好かつた。『城あとのやしろの前の休茶屋ながき日影に藤の花咲く』ある年の晩春に、私は其處でかういふ歌を詠んだ。

橋は延寶元年に、吉川廣嘉が一年々の洪水を防ぐために、始めて考へてつくつた橋で、ちよつと其構造は面白い。成ほど昔は甲斐の猿橋と、阿波の祖谷の葛橋と三大奇橋と言はれたのも尤だと思つた。

橋の少し下流に、小赤壁と言つて、景色の好い處がところあつた。

で、橋を見て戻つて、電車で停車場に行つて汽車に乗る。藤生、由宇、神代、大島などといふ停車場がつづく。皆な左に海を豫想した開けた氣持の好い地形である。由宇驛の近くには、大將軍祠、岩代村の岩金瀧などといふ名所がある。

前に大きな島が見え出して來た。それは大島列島の中で一番大きい屋代島で、ちよつと見ると、島とは思はれない。

大島驛の西一里には、維新の志士僧月性の草庵があつた。

こゝらの地形は、注意して見ると面白いところだ。右に長く海中に出てゐるのは、室津半島の最南端で、柳井津から出た路は、半ばその南岸、半ばその西岸を縫つて、室津へと達してゐるのであつた。上の關海峽はその絶端に小高く見えてゐる山のかげのところに當つてゐた。

柳井津町は、柳井津織などといふ織物の出来る賑やかな町であつた。それに醬油も出来た。柳井津醬油の名は、龍野醬油と共に關西にひろくきこえてゐた。

こゝから四國行の汽船は出て行つた。

瀬戸内海の勝を探らうとする旅客は、是非此處から、室津、上の關方面に行つて見なければいけない。尾道、鞆あたりが、内海の勝の序幕であるならば、此處あたりが中幕で、長府から下の關にかけてが、その最後の幕であると言つて好い。室積港の少し先にある普賢岬にも是非行つて見る方が好い。

しかし、これをやるには、汽車旅行の途中ではや、いそがしい。上の關あたりに一晩泊つて、それから室積を見て、普賢岬に廻つて、徳山の方へ出て行くのであるから、二夜は途中で過すつもりでなければいけない。備後の阿伏鬼、周防の普賢、瀬戸内海では共に世にきこえた勝景の地だ。

汽車は柳井津から海に離れて山の中に入るので、徳山までは、もう見るやうなものもない。

徳山からは、石見の津和野に行く道路が右にわかれて行つてゐた。

徳山は周防灘中での良港で、水深が大きく、軍艦なども港近く入つて來ることが出来た。海軍の煉炭製造所などが其所にあつた。それに、この町は故兒玉伯の出身地として世に多く知られてゐた。その記念で、中國での私立圖書館では一番好いと言はれる兒玉文庫なども其處にあつた。

徳山の次驛の福川驛の北十五町には、陶晴賢が大内義隆を弑して反旗を翻した若山城址があつた。

富海驛のあるあたりの海岸は、風光が明媚で、松などが多く、小舞子と言はれてゐた。海水浴場なども到る處にあつた。杵崎神社に、船を懸して、遊びに行くのも面白いトリツプの一つだ。

防府町は元三田尻と言はれたところで、その奥にある山口町の前港をなしてゐるやうな形になつてゐた。鹽田が所々に見られた。それに、この北の佐波川の灌域は、土地豊饒、所謂防長米の出來るところで、従つて、米の輸出が非常に多い。

町には、酒垂公園といふ公園がある。丁度丘陵の半腹をひらいて拵へたやうなところで、眺望には富んでゐた。有名な宮市天神の祠堂は山の南麓に位置してゐた。大華表が

二五四
あつて、その傍には一千年大祭記念の標石が立てられてあつた。神殿の西には、眺望の好
い春風第一樓があつた。神苑なども綺麗だ。

防府から山口に行く道は、例の鯖山峠の大きなトンネルのある道路だ。昔はこれが山
口に入つて行く本道であつたが、小郡の方が開けて、そこに汽車が出来てからは、此の
道は、もう誰も通るものもなくなつて了つた。

大道驛のある海岸も、瀬戸内海の勝地としてきこえてゐる處であつた。

小郡驛は、人烟が盛だ。ちよつと、心持の好い停車場だ。山口町の方へ行く小さな汽
車が其處で旅客を待つてゐた。

中鈴八幡宮、公園、榮山大神宮、梅ヶ峠、それから嵐山の渡月橋に似ると言はれ
た東津橋、そこを左に登つて行く妙勤寺などといふ名勝があつた。

旅客は暇があつたら、其處で下りて、山口町を見て来るのも好い。狭軌ではあるが、
汽車があるので、わけなく行ける。汽車も一時間半ほどか、れば行ける。山口の手前
は、湯田温泉があるから、歸りに其處で一泊するのも好い。

山口町は、丘陵で四面をかこまれたやうな感じの好い町であつた。それと言ふのも、

大内氏時代に非常に榮えて、中國の京都と言はれた程であつたからであつた。町が何處
となく古びて、影が濃やかだ。それに、住んでゐる人達の風俗にも好い處があつた。町
で見物すべきところは、城址の中にある龜山公園、そこには毛利敬親以下藩主の銅像な
どが立つてゐた。公園から右に鴻の峯を望んだ形はちよつと好かつた。その他、萩街道
の上堅小路町の築山の八幡、それは應安年中、大内弘世が山城八坂から勸請したもので、
舊六月七日から七日間、鷲の舞といふ祭があつて、今でも山口名物の一つになつてゐた。
社の西にある築山社には、大内氏累世の靈を祀つた廟があつた。こゝらは昔大内氏の別
荘のあつた遺址で、今でもその國石が二三依然として存してゐるといふことであつた。
その時分、宗祇が大内氏に招かれて、西國に下つた時、大内京兆つき山にて一座興行の
時、此處のさまをつかまつるべきよし所望ありしに、「池は海、梢は夏の海山かな」と書
いてゐるが、それを思ふと、昔のさまなどが眼の前に浮んで来るやうな氣がした。
それから下堅小路町にある臨濟の巨利龍福寺、そこがもと大内弘世以來の館址のあつ
たところださうで、寺では現に大内義隆の畫像を藏してゐた。

兎に角、中國の京都と、はれたところだけあつて、町名も、地形も、すべて京都に似

たところが澤山にあつた。

其他、毛利が萩から山口に移つて来た時に此處に移した毛利元就を祭つた豊榮神社といふ別格官幣社が町の北にあつた。そこには元就の木像があつた。

鴻の峯には、天文年間、豊後の大友晴英が大内を襲いで名を義長と改め、自から防長二州の主と稱して、毛利に對抗した舊城址が残つてゐた。

山口から石州津和野まで十二三里、萩まで八里二十町、共に車が通じた。小郡驛からまた西に向ふ。

嘉川、阿知須、船木などといふ停車場がついた。船木には、船木櫛の名できこえた櫛が名産になつてゐた。

小野田驛を通る時には、旅客はその左、海岸の方に、遠く、烟突の煤烟を漲してゐるのを見落してはならない。それは、日本でも有名な小野田セメント會社の工場である。現今、資本百二十萬圓。

厚狭驛からは、大嶺線が右にわかれて行つてゐる。この線路は、この奥に海軍の大嶺炭田があるからで、其處から出る石炭は、その質が非常に良好であるといふことであつ

小野田

セメント會社

厚狭

秋吉臺

カルスト

た。それに、産出の分量もかなりに多かつた。海軍では、これを附近の煉炭所に持出して、そしてそれを製して、軍艦や工場に用ゐた。また、この大嶺の奥には、秋吉臺といふ地理學上所謂カルストの特相を露した高原があつて、大小無數のトネリ(吸込穴)がその高原の上に穿たれてゐるのできこえてゐた。しかし、普通の旅客には、大して興味を惹くやうなところでもないかも知れない。

このカルストと言ふのは、石灰岩の臺地の上を流る、雨水がその一部に滲入して、そこで侵蝕作用を逞うして、さういふトネリといふ穴をいくつも作るのであつた。そしてその穴は挿鉢又は漏斗の形をなしてゐた。大きいのは、小噴火口位もあつた。中には楕圓形のもあるが、普通は丸い。この吸込穴の中では、野菜などがよく出来た。それと言ふのも流水が豊饒な土壤を運んで来るからであつた。

それに、この広い高原に、川が一條も流れてゐないと言ふことも注意すべきことの一つであつた。それは皆なこのトネリに吸込まれて、池中に入つて溪流をつくる暇もなく、悉く地下流になつて了ふからであつた。そしてその地下流は、彼處此處に行つて、再び罅隙を求めて世間に流れ出してゐた。

瀬戸内海

日本にはめづらしい地形として、地理學者や地質學者の間に知られてゐた。厚狹驛からは、もう長府下の關はいくともない。旅客は此處あたりに来ると、播磨、備後、安藝、周防、長門と、段々地形が變つて來てゐるのに氣がつかずには居られまい。丘陵と海、その海も、もう餘程趣が變つて來てゐた。右に聳えてゐる連山も餘程高くなつてゐれば、左にをり／＼見える海も、瀬戸内海とは思はれないほど趣が變つて來てゐた。

殖生、小月から長府に行く間の海は見事だ。汽車を下りて、海岸を歩いて見たら、さぞ好からうと思はれる位であつた。汽車はその陰に下の關市を有してゐる大きい高い丘陵に添つて、彎形をなして、海に面して、次第に長府へと進んで行つてゐた。

曼珠、干珠など、いふ鳥が海に竝んでゐるさまは、繪のやうであつた。そして海を隔て、見えてゐる山の翠微は、豊前豊後の所謂嶺西の山であつた。

小月驛には、その附近に、源平の激戦した跡だといふ亂橋の松原だの、維新の志士高杉晋作の墓だの、吉田川の川口にある白崎の濱だのがある。二三里隔てた山中には、有名な巨利神上寺がある。それは大淀三千風の「行脚集」にも書いてある名高い大きな寺であつた。

汽車のレールの右に連つた山と山との間、それを越えて、豊浦から、裏日本の油谷灣の方へ行く路がわかれて行つてゐた。その油谷灣の一邑正明までは、そこから十二三里を隔て、ゐた。

小月から、一宮、幡生、それから長府へと汽車は入つて行く。長府は風光の明媚な町だ。それに、町のひらけたのも頗る古い。例の仲哀天皇の豊浦宮は、實に此處に置かれたのであつた。それに、長門の國府が此處に置かれて、長い間榮えて來た。

今、海水浴場が其處にある。源平の古戰場を探らうと思ふ旅客は、下の關まで行つては、あとに戻るやうな形になるから、寧ろ此處で下車して、車か何かでゆつくり行く方が好い。長府から壇浦までは一里半位しかない。長府の町の南に、松崎の磯といふ景色の好いところがある。其處にも、暇があつたら、行つて見る方が好い。

實際、此處まで来ると、瀬戸内海の長い長い繪巻物も、段々おしまひになつて行くやうな気分を感じずには居られない。實際、長い美しい繪巻物だ。須磨、舞子、淡路島、それから播磨の松、家島群島、牛窓、室津、蟲明の瀬戸、段々景色は明るく美しくなつて来て、笠岡、尾の道、そこらに來ると、暫しはじつと見詰めてゐたいやうな氣がする。それから、や、海に離れて、山の中を通つて、宮島、玖波、上の關、室の津、室積、いかにも繪が中心に入つて行つたやうな氣がした。それから、段々出て来て、徳山の海、三田尻の海、大道の海、ついで、長府、最後の下の關の瓦葺粉壁、帆檣林立、いかにもすぐれた卷末の風景ではないか。

下の關に入ると、ぐるりと趣が變つて了ふやうな氣がした。もう、向ふは瀬戸内海ではなかつた。九州の山が近く早瀬の瀬戸を擁してゐた。門司港の帆檣、白堊、汽船、それから混雑と一眼の下に集つて見えた。

下の關には、旅館は澤山にあつた。しかし、私はいつも川卯といふのに泊つた。此處等は、旅館がわるく、不親切で、宿賃が高いと言はれてゐるに拘らず、そこは、親切で、女中などもわるく旅客にまつはつて來なくつてよかつた。しかし、赤間宮近所の大吉あ

たりへ行つて、土地の女でも聘んで、一夜面白く騒いで遊ぶのも、興味があつた。馬關の藝妓は多いのできこえてゐた。

で、先づ下の關の見物へと出かけるとする。車で行くのが一番便利で簡單で好い。五十銭出せば、赤間宮から龜山八幡、安徳天皇陵、平家の墓、それから壇浦あたりまで伴れて行つて呉れる。

先づ和船の碇泊してゐる海岸を通つて車は駛つて行く。帆檣が林立して、漁師の鳴などが着を賣つて歩んでゐる形などにも、漁市らしい海港らしい氣分が漲りわたつてゐるのを見る。通りもかなり賑やかな軒の揃つた市街だ。

やがて市街が段々狭く狭くなつて行つた。狭斜らしい氣分がそこ、となく漲りわたつてゐた。小ちんまりとした料理店らしい家などもあつた。この奥のところです、女郎屋のあるのは」など、車夫は走りながら指して教へて呉れた。やがて一番先に、車夫が梶棒を下すところは、龜山八幡に登つて行く石階の下であつた。龜山八幡は、馬關の海の眺望臺としては、殊にすぐれたところとしてきこえてゐるが、實際、そこから見た海は好い。馬關の港の混雑したさまは一瞬のもとに集つて見え、速吸の瀬戸に白帆の重つ

て出て行くさまは、丸で手に取るやうだ。彦島、六連島などもそこからすつかり見えた。そこに参詣して、それから赤間宮へと志して行く。この附近に、日清談判の時に、李鴻章が打たれたところがあるが、それを車夫は梶棒を留めて教へて呉れたりした。大吉樓と言はれる料理店は入口の小さい、しかしその樓上からは、海の一日に見えさうな家であつた。例の春帆樓などもその近くにあつた。



宮 間 赤 關 の 下

此處は元は阿彌陀寺と言つて、當時、寺僧が天皇の遺骸を此處に葬つたところであつたので、其後、影堂が建ち、寺は勸願寺となり、それから明治になつて、今の官幣社になつたのであつた。安徳天皇の山陵は、丁度社殿の下の右のところに位置してゐた。そ

こに参拜して、あたりのさまを眺めると、當時のことが歴々として胸に迫つて來すには置かなかつた。

社殿の右の後の方にある平家一族の墓も感慨が深い。前列が七墓、後列が七墓、清経資盛、經盛、知盛、教經の名が前列にあつて、後列の左の隅に小さく二位局の墓が指された。平家物語の一節などが思出されて來た。

此處を下りて、猶東に、五六町行くと、やがて狭い狭い漁師町が盡きて、壇の浦の海光があらはれて來た。つまり長府から海岸を傳つて來た路が、すつと下の關の市街に入つて行かうとしてゐる處だ。

壇の浦には、別に見るものがない。「は、アかういふところかなア」と思はせるだけで、引返して、歸りに、平家蟹といふもの、干したのを土産に買つて來るのも興味があつた。その蟹は、甲羅に人間の憤怒の状があざやかに現れてゐて、平家の亡恨がそこにあつた。私を買ひに行つた時、「い、え。何うして、刀なんか入れやしません。ちやんと、元からかうなんです、それに、此頃ちや、數が少くなつて、餘程、何うかしなけれ

ば、漁師の網にか、らなくなつて了ひました。昔は澤山にあつたものだから、何うしてお安くはない」と言つて、半老いたその主人は話した、何でも、一箇三四十錢したと覚えてゐる。

で、歸りに、春帆樓の入口や、遊廓の中や、さういふところを通つて、停車場の方へと歸つて来る。門司に渡る連絡船は、停車場からすつと下りて行つたところにあつて、簡単に旅客を九州の土へと渡して呉れた。

十六 出雲大社参拜

▲京都 きて東京から汽車三等三圓四十八錢、夜の八時の三等急行で行く京都着

翌日の午前九時六分、すぐ福知山行に乗れる。

▲京都大社 間の汽車賃三等二圓八十四錢併せて七圓と少しあれば、東京から大社まで行ける。

▲天橋立 を見るには、綾部驛で乗換へ、大阪から新に舞鶴に行く汽車に乗換へる。舞鶴で又この線に乗替へ、海岸の海舞鶴驛に行き、そこから宮津への連絡驛に乗る。

▲宮津 連絡驛は、一日三回出る。

▲天橋立 の巡覽船は、切戸には行くが、成相には行かぬから、成相まで和船を備ふもよし歩くもよし、俵もある。

▲城の崎 の玄武洞は、同名の停車場が一つ手前にある。下車して見物して行くが好い。

▲城の崎 から松江へ汽車哩數一二七哩時間六時間。鳥取で一吋下りて見るもよし。途中で東郷温泉に一夜泊るもよし。

▲境 へ行くには、米子驛から汽車に乗替へる。夜見半島をその汽車は行く。米

子境間 哩數六哩 三等貨錢十五錢。

▲米子 境間小蒸汽がある。又安來境間に蒸汽がある。其他、隱岐に行く汽船、敦賀に行く汽船、下の關に外海を大廻りして行く汽船、それ等は皆な安來、境から出て行く。

▲境 下關間の汽船はなほ波が荒い。

▲尖道湖 の小蒸汽は、平田、松江、庄原間を航行す。汽車開通せし爲め、昔の如く便ではないが、尖道湖の風景を見るには好い。

▲今市 一畑薬師間電車。

▲今市 から掛合、木次の方に行く軌道が新に出来た。

▲石見 の方へ行く汽車も順次に出来て行つてゐる。やがては濱田の方まで出て行くであらう。

出雲大社へは、昔は東京からは、容易に參拜が出来なかつた。交通が不便で、何處から行つても、山路を二十里や三十里越えて行かなければならなかつた。しかし、今では、中國線の汽車が出来て、東京からでもわけなく參拜することが出来るやうになつた。

今では、今日の夜の十一時に、東京驛を立つと、翌朝の九時には、京都七條着、それから、すぐ大社行の汽車に乗ると、その日の夜には、既に出雲の杵築灣頭の波の音をきくことが出来た。それに、汽車賃も頗る廉である。三十圓も、懐にすると、ちよつと行つて、大社から、尖道湖、松江、美保の關、伯耆の大山などを見て來ることが出来た。便利の世の中になつたものだと思ふ。

この間で旅客の行つて見なければならぬところは、日本三景の一である丹後の天橋立であつた。そこは、三景の中で、一番邊陲の地にあるので、行つて遊ぶものは割合に少なかつた。『宮島、松島は知つてゐるが、橋立はまだ知らない』かういふ人はかなり多い。今では、汽車やら連絡船やらが出来て、割合に簡單に行くことが出来るやうになつたが、それでも女子供にはまだむづかしい。普通、山陰線を通る旅客に取つても、

「まあ臆切だ、この次にしよう」と言ふ人が多い。

そこに行くには、丹波の綾部驛で、山陰線を舞鶴線に乗換へる。そして舞鶴驛まで行つて下りる。この線路は、連絡船のある海舞鶴までは行かずに、わきに外れて、新舞鶴(軍港のある方)の方へ行つて了ふ、従つて旅客は此處で海舞鶴まで行く僅かの間の汽車の切符を買はなければならない。そして海舞鶴に行つて、其處に待合せてゐる宮津への連絡船に乗らなければならない。

この連絡船は、一日に三回位往復する。しかし、夜になつては出ない。だから、あらかじめ、連絡時間を調べておく必要がある。それに、此連絡船は、船は綺麗だが、とても門司や宮島の連絡船のやうに樂には行けない。何故と言へば、海舞鶴、宮津間の海は、風濤の荒い北海であるからである。そしてその里程も六七里ある。ことに、由良川の河口を正面に見たあたりを通る時には、波濤はいつも高い。非常に風だと言はれてゐる日でも、船に弱い人は、甲板の上に出ることは出来ない。

宮津に行つてから、橋立を見に行く小蒸汽がある。便船もある。しかし、これも宮島や松島のやうに便利でない。だから、天橋立を見るには、何うしても、一日乃至二日宮

津に泊らなければならない。

それから、この山陰線で下りて見るべきは、城崎の温泉であつた。そこは中國では、殊に聞えた温泉で、その開けたのも古い。それから、鳥取市もちよつと下りて見たい。湖山池なども見たい。暇があれば、山中幸盛の影塔のある鹿野町あたりまで入つて見ると好いのだが、汽車の旅では、それはちよつと難かしい。

それから、伯耆に入つて、東郷池に湧出してゐる東郷温泉、御來屋驛のすぐ後にある名和神社、これなどは、一汽車遅らせても、是非寄つて見なければならぬところだと私は思ふ。

京都を朝の汽車で、その夜は宮津一泊、翌日は切戸から成相の笠松まで行つて、引返して城崎一泊、(これはかなり急行だ)その翌日は、鳥取市で一汽車遅らせて見物して東郷温泉一泊、その翌日は名和神社に参詣して、眞直に大社、そこから引返して、松江に来て泊るか、もしまだ早かつたら、松江の大橋の畔の小汽船で美保の關へ行つて一泊、そしてすつと引返して来る。その間に、もう少し餘裕があつたら、一島薬師、鰐淵寺、日の御岬などへ行つて見るのも興味が饒い。尼子歴代の城址のある廣瀬町へも、出來れ

ば、行つて見る方が好い。

まア、一週間、四五十圓あれば、樂に、のんきに行つて來られる。

それに、出雲が面白い。物貨も安いので従つて宿料も廉い。女にも出雲女と言つて綺麗なのがゐる。文化におくれてゐるだけに、何處か心持が痒い。そして、風景は日本でも三景と何方が好いか思はれるほどの宍道湖、中の海、夜見ヶ濱の氣色があつた。旅客は、何を措いても、先づ行つて見なければならぬところだ。

京都の七條から、汽車は例の嵐山の傍のトンネルを抜けて、保津川に添つて、西へと向つて行く。保津川の谷は、早船で下つたのはまた別な趣があつて、ちよつと感じがわるくない。やがて山は開けて、龜岡に着く。此處に來ると、愛宕山が丁度、その裏を見せるといふ形になつた。

八木、園部、殿田、胡麻、和知、山家などといふ小さなさびしい停車場が段々ついで出て來た。所謂、丹波山地の中心で、京都府中で最も開けないところを我々は行くのであつた。昔から丹波は山の中としてきこえてゐた。人をあやめた罪人が丹波の山の中にかくれたなどといふ話は、昔の草双紙などにもよく書いてあつた。例のおさん茂右

衛門なども、琵琶湖畔で死んだと見せかけて、そしてこの山の中へと入つて來たのであつた。歴史上でも、京都から公卿の此地へ隠遁したものは尠くなかつた。天皇の陵などもこの山の中にあつた。

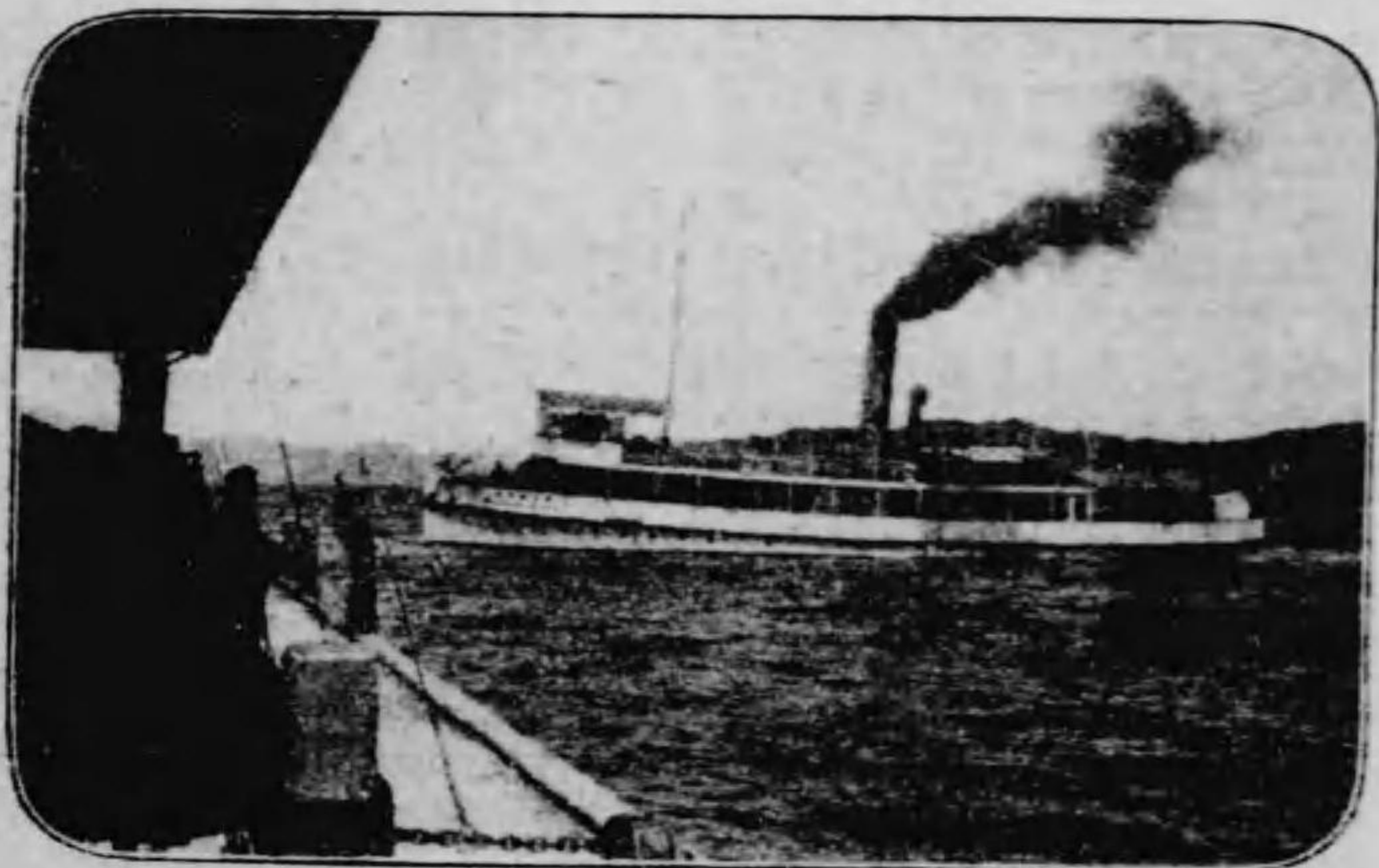
普通の旅客には、見る物もない面白くない山の中ではあるけれども、いかにも山の中のさびしい感じは、私の心を惹かすには置かなかつた。東京が控へた不毛な武藏野と、京都が持つた寂寥とした丹波の山の中と、其處に面白い對照を私は感じた。

和知川の深い谷から段々その源に近づいて行く形も奇であつた。村と村とが山に凭つたり崖に欹つたりしてゐる形も面白かつた。春は其處には躑躅が咲き、河鹿などが好い聲をして鳴いた。中でも、殿田などはことにさびしい停車場であつた。薪炭などが一面に積まれてあつた。

このさびしい山の中も、山家驛を過ぎて、綾部近くなると、同じ山の中と言つても、一種違つた感じを持つて現はれて來た。和知川の谷は殊に面白い谷であつた。そして汽車はその谷の縁をや、低い綾部平野に向つて下りて行つた。

綾部町は、下りて歩いて見たいやうなところであつた。和知川に架けた橋のあたり、

ここに、瀟洒な旅館でもあつたら一夜泊つて行つて見たいと思つた。此處では夏は鮎が獲れた。綾部驛は山陰線と、大阪から来た舞鶴線と相交するところになつてゐた。辨當茶などを賣る。天橋立を見に行く人は、此處で汽車を乗換へなければならなかつた。汽車を乗換へて天橋立に行つて見ることにした。綾部の次が梅迫、その次はもう舞鶴であつた。この間に丹波、丹後を境した峠があつて、かなり長いトンネルがあつた。それに、此處等に來ると、丹波の山とは引かへて、山が非常に峻峻になつてゐるのを私は見た。つまり若狭、越前、丹後三國に跨つた中國山脈の主峯であつた。で、やがて汽車は舞鶴驛に着く。先に、新舞鶴まで行つて、軍港の方を見て來るのも好いが、要するに、軍港と鎮守府だけで、——横須賀見たいなもので、別にこれはと言つて見るやうなものもない。だから、先づ新舞鶴は何うでも好いとして、其處で下りて、眞直に、宮津の方へ志すことにする。舞鶴から海舞鶴まで、汽車が別にあつて、その間は六錢か七錢の丁場だ。そこには、宮津の方へ行く白いベンキ塗の汽船が待つてゐた。



宮津連絡線出帆

舞鶴は港として面白いカラアを持つてゐるところであつた。入江の深く入込んでゐる形も面白ければ、港外に一獨立山の屹立してゐるさまもめづらしかつた。港には、和船や汽船が二三碇泊してゐた。こゝから若狭の小湊に通ふ汽船は、毎日正午頃、此處を出帆して行くことになつてゐた。

連絡船はそこで宮津の方へ行く客を乗せて靜かに港を出て行つた。少し行くと、右の方に深く入込んで、舞鶴の軍港の一部が見えてゐる。水雷艇が波を蹴立て、走つて來るなども見えた。

このあたりは、山が高く、徒崖が峻しく海に落ちてゐて、海山の眺めが世のつねでは

ない。やがて汽船は港外から北海の方へと出て行つた。

北海はかなりに波が高かつた。由良河の河口あたりに行くと、汽船は凄しく動搖した。舞鶴から宮津まで陸路を行くと、六七里あつた。その間には、河守附近に元伊勢大神宮があつた。これはもと加佐郡河守上村にあつたのを雄略天皇の時伊勢に移されたもので、今でも此地は元伊勢と言はれ、外宮、内宮、宮川、五十鈴川、天の岩戸といふ風にちやんと揃つてゐるのが面白い。それから酒頭童子で人の知つてゐる大江山、三莊大夫の舊地由良などがある。三莊大夫の邸址や、安壽姫を祀つた小祠などがあつた。この間は、ちよつと歩いて見ても面白い。

汽船で行くと、大江山、由良岳が甲板の上から見える。由良川の河口を見たところも趣に富んでゐる。やがて宮津近くなると、右の方に天橋の松の長い砂嘴が見え出して来た。甲板の上から見ただけでは、松の向ふの海が見えないので、他の奇がないが、それでも橋立が見えると言ふので、人々は皆な甲板の上に出て見た。

宮津では旅館は荒木が一番大きい。しかし旅客は埠頭近いところに旅店を選ぶ方が興味が饒い。何故と言へば、船を上つたところが丁度狹斜街で、所謂「縞の財布が空になつた。あつた。

天橋に行くには、小蒸汽もあり和船もあり車でも行けるが、成相の下まで行くには、往復いくらで、和船を一隻雇つて行くのが面倒臭くなくつて好い。陸路を行けば、宮津から海岸傳ひに、切戸の文珠まで、一里半、それから渡しをわたつて、長松の中を一里半位で、成相の下まで行くことが出来る。切戸の文珠は天橋山智恩寺と言つて、中々大きな流行佛である。本堂なども立派だし、門前町も賑つてゐる。瀟洒な旅館などもある。文珠だからと言つて、智慧の輪のやうなものが海岸に立つてゐるのも滑稽だ。それに、

此處に詣づるものは、智慧の出るやうにと言つて、智慧餅といふものを食つて行く。切戸から渡を渡つて、天橋の松の中に入つて行く。路も綺麗に、自動車でも飛ばした



天橋の立

麗な磯清水が湧き出しているたりした。
 和船で行くと、この長い天橋の内側を掠めて、
 真直に、成相山の方へ向つて漕いで行くのであ
 った。船を捨てたところに、藤の花の咲いた休
 憩所などがあつた。そこで、草履をかりて、と
 ある宮の中を抜けて、成相へと登つて行く。そ
 こから笠松に行く間は、かなりの登りで、十二
 三町あつた。しかし其間は、一步一步天橋の姿
 を振り返つて見て行くといふやうなところで、登
 るに従つて、天橋の天橋たる趣を展開して来る。
 笠松には松の下に瀟洒な茶亭があつて、そこか
 らは、天橋が唯一目に見えた。成程三景の一だ
 けあると思はずには居られなかつた。それに、
 周囲の山の高いのは、宮島にも松島にも見るこ

との出来ない特色である。天橋の向ふには、宮津町の瓦葺粉壁が給のやうに展けて見え
 た。

ここに、例の天橋股くら鏡といふことがあつて、それをやつて見るために、旅客のた
 めに拵へてある扁平な石などが置かれてあつた。滑稽だが、一度はやつて見る方が好い。
 海の中にある天橋が、丁度空の中に浮んだやうに見える。

此處から二十町奥に、成相寺がある。古い大きい寺だ。
 天橋は此他、切戸文珠の上の櫻山、但馬街道の橋畔、そこを見るに適したところとし
 てるた。成相からは、縦一文字、橋畔からは横一文字になつて見えた。

宮津から福知山までは、都合が好いと自動車があるが、普通は矢張連絡船で舞鶴まで
 引返して、綾部まで戻つて、山陰線の汽車に乗繼ぐ覺悟でなければいけない。で、綾
 部から、また山の中を通つて、福知山町に行く。町には城址や兵營などがあつて、かな
 りに賑やかだ。福知山音頭などといふ唄を藝妓達は唄つて旅客にきかせた。其處からは、
 生糸や織物なども出来た。

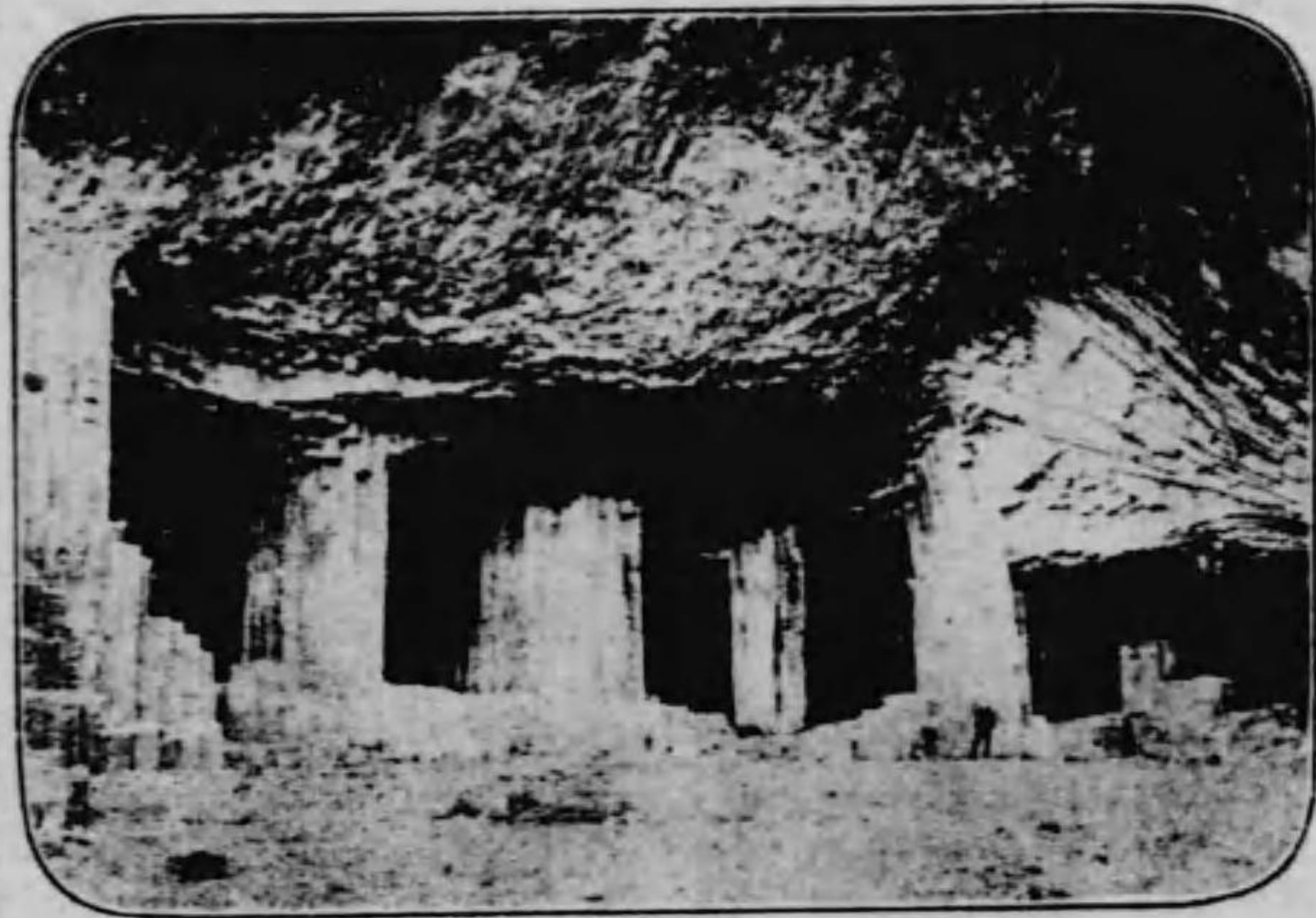
和田山驛から播但線——但馬の生野を経て播磨の姫路に出て行く——が左にわかれて

行つてゐる。和田山から八鹿を経て豊岡に行く間は、丘陵の相錯した間に溪流が流れてゐたりして、感じの好い處だ。仙石驛動の出石の城下は、豊岡に入る手前の右の丘陵のかけのところに位置してゐた。豊岡は賑やかな好い處だ。停車場も大きい。これから城崎川に沿つて、次第に日本海の方へと汽車は出て行く。

城崎では、西村が好い。温泉のあるところは、停車場から五六町折曲つて行つたやうなところで、浴舎が到る處に亞字欄干をめぐらしてゐる。此處には、内湯がなくつて、旅店から、湯札を買つて、共同浴槽に入つて行くやうになつてゐる。共同浴槽は、三四年前に新築したもので、規模は頗る宏壯だ。それに、設備も完全してゐた。しかし、もう老衰した温泉で、湧出量は、道後などと同じく、矢張少いらしい。

こゝには、温泉寺、日和山などといふ勝がある。

その他、此處で見通してならないものは、例の名高い玄武洞であつた。それは来る時、玄武洞停車場の川向ふに、小さく見えてゐるのがさうだが、行つて見ると、かなり大きい。三箇の洞穴、第一は間口十三間、奥行十七間、第二は間口十三間、奥行十五間、第



玄 武 洞

三は第一と略同じだ。いづれも例の柱狀節理で、頗る奇觀を呈してゐる。入口の左手には、柴野栗山の揮毫した玄武洞の三字が刻んであるのを見た。

これから、汽車は但馬因幡の國境に蟠つた大きな山脈の中を通つて行つた。トンネルがところどころにある。竹野、佐野、香住に來ると、日本海の波が晴れやかに見渡される。鎧といふ停車場のあるあたりは、中でも殊に風景がすぐれてゐた。

それに、此處で注意しなければならぬのは、餘部の長い鐵橋が暗いトンネルの中にあることであつた。これは日本でも名高い長い陸橋で、そしてそれが全くトンネルの中にあつた。だか

ら、そのトンネルを通る時は、轟音が凄しく、あたりに反響して旅客の耳を聳せしめるばかりであつた。

居組驛あたりも、ちよつと、海山の風景がすぐれてゐる。

しかし、鳥取平野に出て来るまでは、この間は、大抵徒崖の中で、さびしい。私は晩春の頃、其處を通つて、「山うつぎ山ふぢ咲きてあら山の中ゆく旅もなぐさまれつ、」といふ歌を詠んだ。

鳥取では、一汽車遅らせて下りて見る。しかしさう大して見るものもなかつた。城址と、標溪神社と、長田神社と、興祥寺と立光寺と位のものだ。立光寺には、荒木又右衛門の墓があつた。

それから市の近郊では、吉川經家の墓のある中の郷村の圓護寺、六月二十六日の會式に賓客の雲集する天台の巨利摩尼寺、南郊の言方温泉、稻葉山の一角にある宇倍神社、宇部野村大字岡益にある耒來公園、そこにある石堂といふ一大古墳、先づその位のものである。

鳥取から千代川に沿つて下ると、日本海沿岸に賀露港があつた。そこには賀露神社と

いふ古社がある。

で、又汽車に乗る。千代川の鐵橋をわたつて少し行くと、湖山の池がやがて其前に見える。有名な湖水で、松と砂山とが一帶に連つてゐる。湖に近く、湖山といふ小さな停車場があつた。

靜かに歩いて見たいといふやうなところであつた。吉岡温泉が其近所にある。

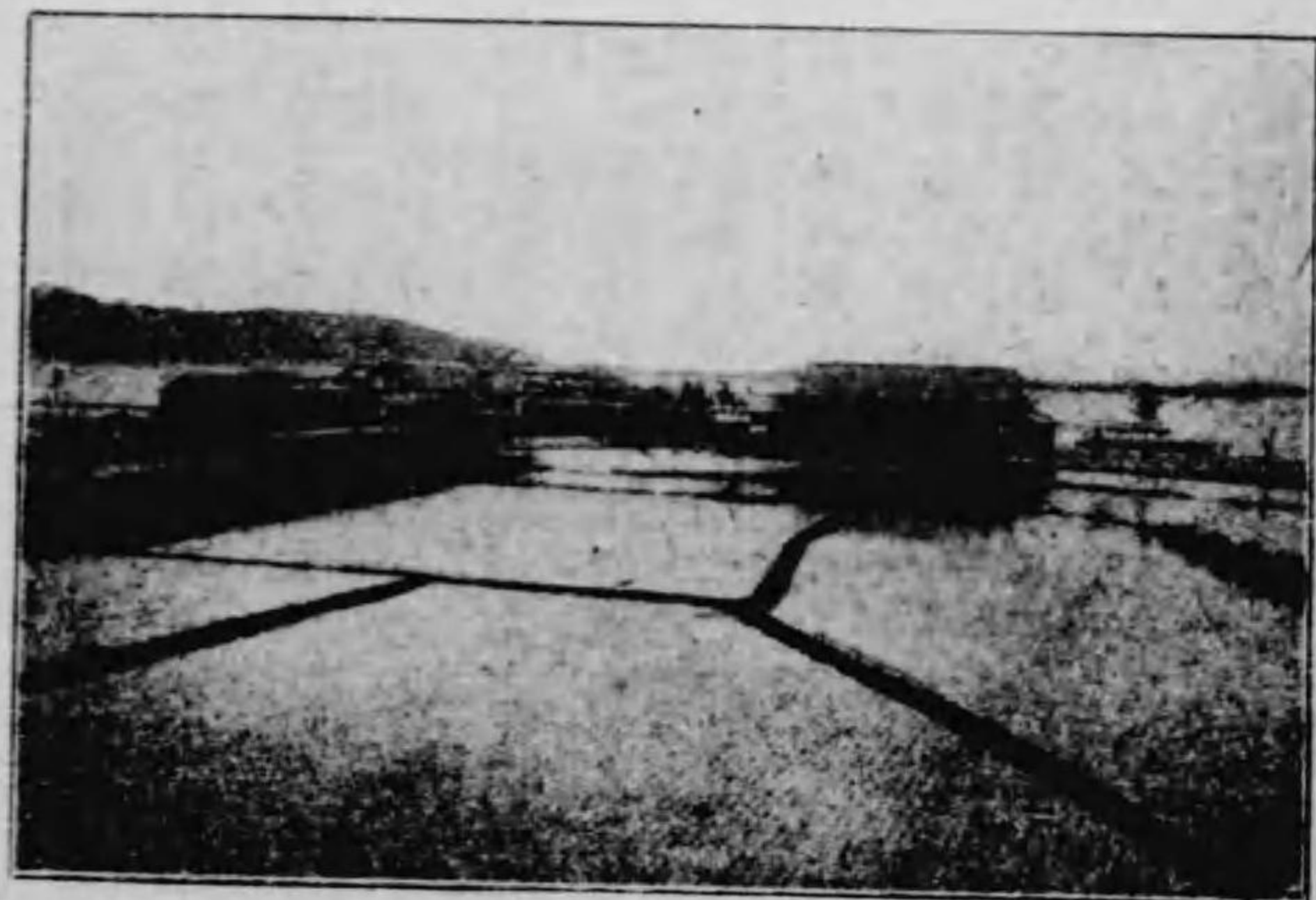
これから寶木、濱村などといふ停車場がある。旅客は左の窓からすつと向ふに連つた山の翠微を見落してはならない。それは標高三千四百尺を有した鷺子山で、その麓に、

山中幸盛の菩提を弔つた幸盛寺のある鹿野町があつた。尼子毛利歴代の屈指の城砦で、

兩軍は此處で何遍となく合戦をした。町では繭生絲などが出来た。立派な羽二重なども出来た。

青谷、泊、それから松崎、共に海岸に近い小さな停車場だ。泊あたりからは、もう伯耆の大山が見え出して來てゐた。

松崎に來ると、東郷池が見える。さびしい小さな池だ。しかし旅客はその池の岸に、乃至は池の中に、人家の二三歴落として連つてゐるのを見落してはならない。それから



東郷温泉泉

温泉が湧き出してゐた。静かな心持の好い温泉場だ。養生館といふのに、私は一夜とまつたが、その時の興は未だに忘れることが出来ない。

松崎の南二里に、三朝川の勝がある。こゝは普通の旅客は入つて行かないが、溪流の勝が中々好いといふことだ。片柴といふところから入つて行くので、奥に三徳山三佛寺といふ天台の古刹があつた。文珠や地藏の岩窟の中に刻まれてゐるさまも一奇である。秋は紅葉が好いさうだ。

松崎からトンネルを越すと、上井の停車場がある。これは元倉吉と言つた停車場で、倉吉町までそこから一里半位しかない。こゝで下りて、南して、人形山峠の嶮を越すと、十七八里で



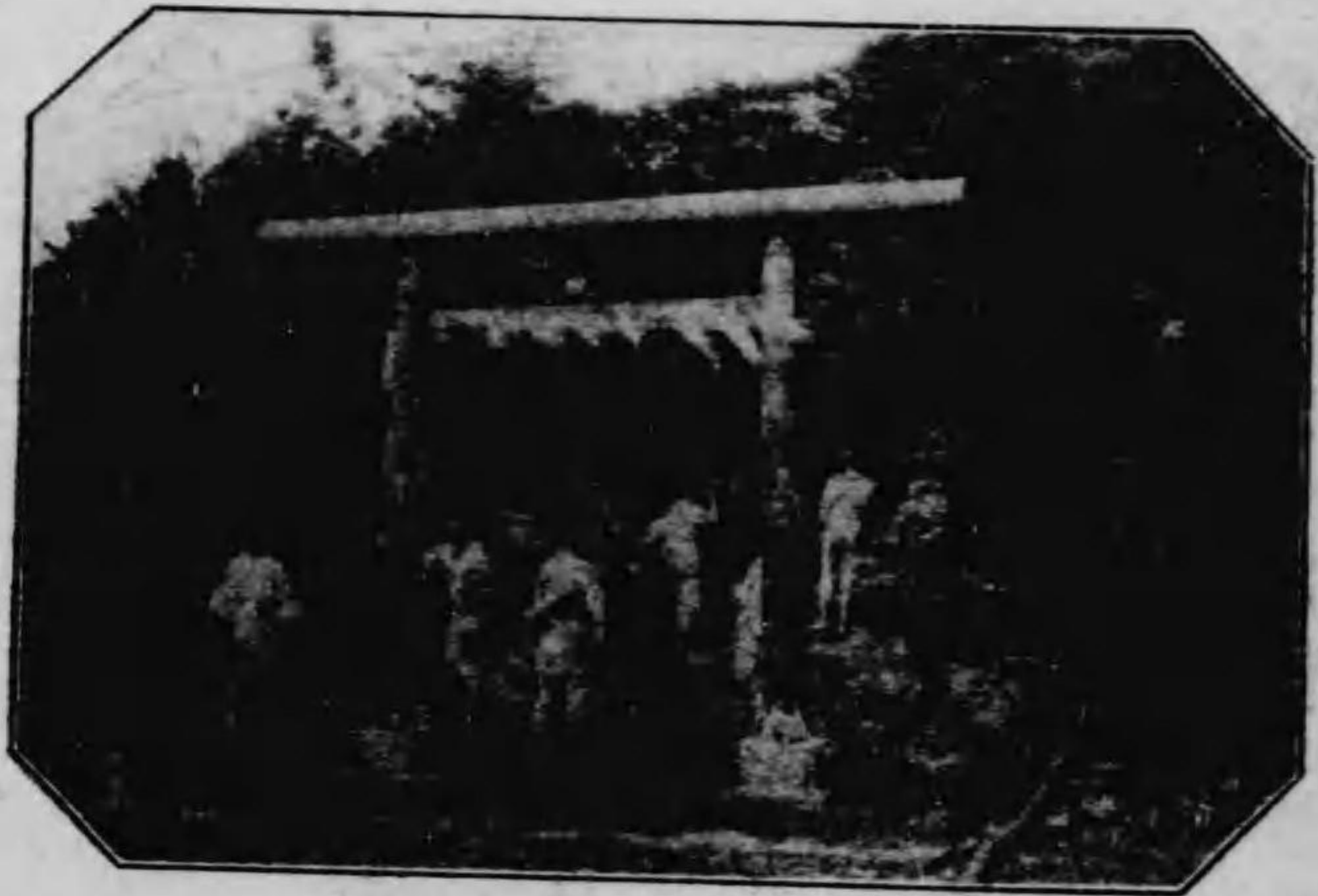
大山遠望

作州の津山へと出て行くことが出来る。汽車の連絡しない時分には、出雲の四十曲峠の一路と共に陰陽連絡の重要な道路であつた。

これから由良、八橋、赤崎、下市、御來屋などといふ驛のあるところは、右は日本海に臨み左は大山とその廣い裾野とを見て行くやうな、高原的氣分に富んだ、非常に心持の好いところだ。例の元弘帝の舊蹟のある船上山には、赤崎驛から上つて行くのが一番便利だ。

この近所には、松が多い。それに、晴れた日には、波濤を隔て、隠岐の島が微かに見える。元弘帝のことの何々しても、思ひ出されずには置けないやうなところだ。

「赤崎の赤松並木ゆき子等の群に夕日のさしに



大山頂上奥院前

けるかな」もう一つは、「あら海の八重の八汐路はるく」とこえてましけん昔をぞおもふ」この二つの歌を、私は御來屋まで行く間に得た。

御來屋町には、元弘帝の上陸した跡が名和川河口の東南隅にあつた。今、そこに海水浴場が開けてゐた。

名和神社にも、旅客は是非一度参詣しなければならぬ。

大山は、山陰では確かに名山だ。そしてそれが絶えず汽車の右に見えてゐる。御來屋を出ると、今度は、海を隔て、島根半島の山々が見え出して来る。その北の一角の海に落ちたところは、地藏岬で、その少し手前に、例



名和神社

の美しい美保の關があつた。そして夜見が瀧の彎形をなした長い岸は、遠くその前に連つて開けた。

米子まで行く間、大山は少しもその影をかくさなかつた。中でも、大山といふ小さな停車場あたりから見た形がことにすぐれてゐた。そして山には、其處から登るのが一番近くて順路であるといふことであつた。山頂まで三里、眺望のすぐれたのは、言ふまでもない。

米子からは、夜見ヶ瀧を縦断して、境に至る汽車がわかれて行つてゐる。この哩數、十一哩二鎖、汽車賃三等十五錢。都合によつては、先づ境から美保の關に行つて泊つて、そして逆に松江から大社に行つても好い。

米子町は、汽車の出来ない前には、陰陽連絡の四十曲峠の道路の要衝に當つてゐたので、旅客は常に其處に集つて来た。頗る殷賑な光景を呈した。今でも、その名残が残つてゐる。氣風に何處か粗雑な純でないところがあつた。こゝからは、今でも中の海を航海して松江、境に往來する汽船が出て行つた。城址、錦光公園などがある。

汽車は米子から中の海の南の岸を通つて西へ向つた。やがて中の海の晴色が美しくその前に展げた。

安來には、例の安來節がある。

『安來千軒、名の出たところ、』

十神山から、沖見れば。

『安來千軒、名の出たところ、』

十神山のこんもりとした丘が汽車の中からも見える。山の下の入江には、帆船が林立して、いかにも昔榮えた和船の港であるのが點頭かれた。安來節は松江でもきかれるが、本當のを聞かうと思へば、此處に來る方が好いといふことだ。安來節保存會といふやうなものまで出來てゐる。

この近所には、清水寺、雲樹寺、ことに古來記以來の舊蹟である比婆山、伊邪美命の墓所だといふ久米神社などがあつた。

尼子氏歴代の城址のある廣瀬町は、その次ぎの荒島の停車場から、富田川の流に溯つて二里ほど行つたところにあつた。その城址は月山城址と言つて、尼子經久が山陰山陽十一ヶ國に威を振つたところである。城壘の形などは今でも明かに指點することが出來た。廣瀬町では、廣瀬編といふ織物が出來た。

榎屋驛からは、出雲風土記にある伊夜神社、其他、神魂神社、八重垣神社に近い。出雲は古い國だけに、古い祠が今でも到る處に残つてゐる。

馬淵から松江——しかし、それはあと廻しにして、すぐ真直に大社の方へと向つて行くことにしやう。

湯町、そこには、松江の人達のよく出かけて行く温泉がある。設備も先づ整つてゐる方だ。

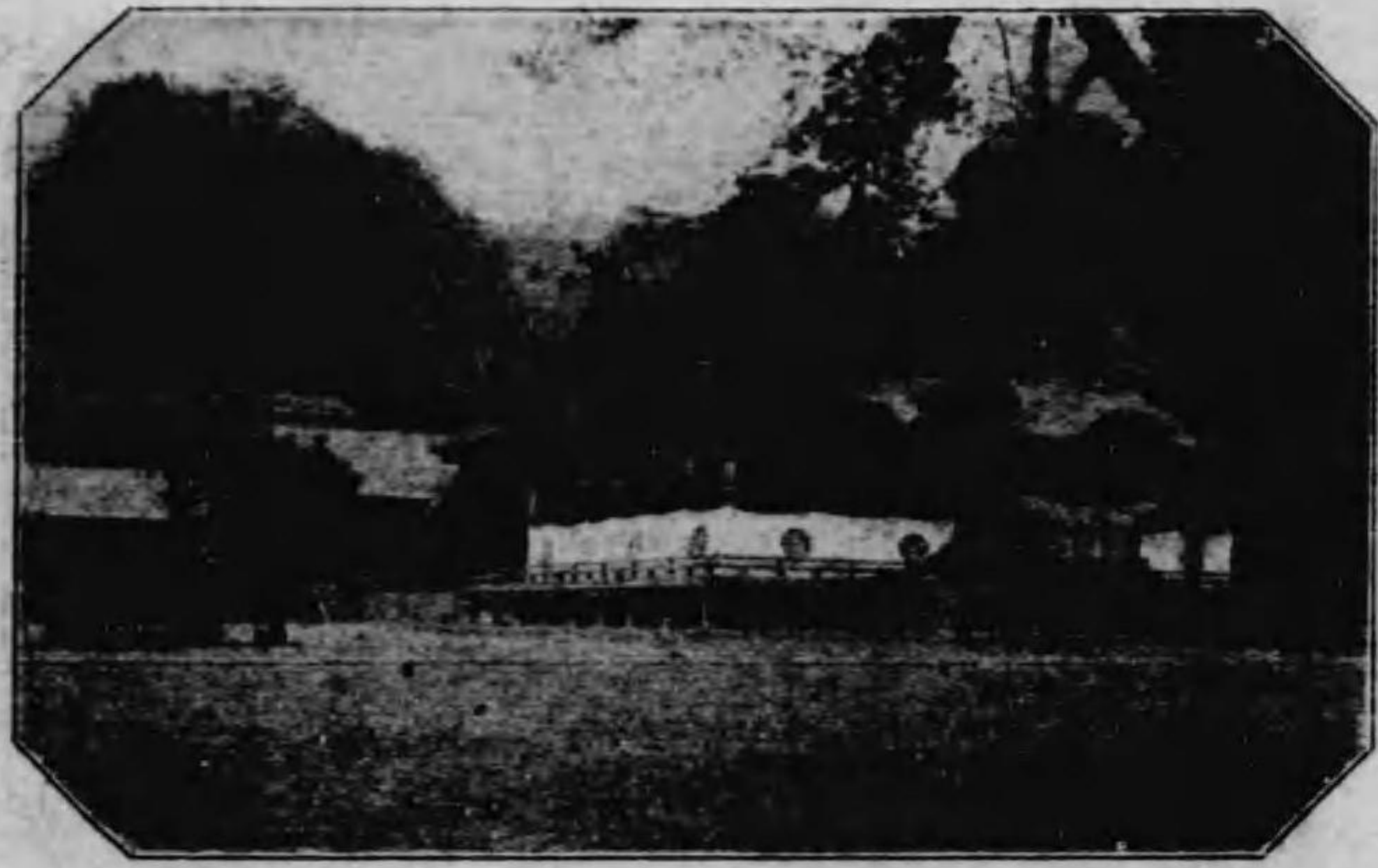
これから宍道湖が一目に見えて、それが長い間、汽車の窓を離れない。宍道の一瞬は、中でも殊に風光の明媚なところにあつた。それから庄原へ行く。此處は松江、庄原間の

汽船の發着點で、もとは旅客は主としてこれに頼つたのであつたが、今は汽車が出来て、餘程町も衰へたであらうと思ふ。しかし、こゝから、汽船で松江に行くと、宍道湖の勝を仔細に探るには便だ。

簸の川を渡つて、直江、それから、今市、やがて日本海の波の音が松林を越して此方にきこえて來るのを旅客は耳にするであらう。そして松の防風林の多いのを見るであらう。右に連つた山脈が近く海に盡きてゐるのを見るであらう。そこに、大社を持つた杵築町があるのであつた。

此處で見ると、汽車の右の窓から、丘陵の連亘した上に、矢張山陰の名山である石見の三瓶山を望むことが出来る。

大社驛から眞直にひろい道が出来て、三四町で、大社の一の華表のあるところへと出て行つてゐた。そこからたらふくと下りて、松竝木の間を二町、又華表を入ると、例の古風な伊勢大廟と同じ形の社殿がその前にあらはれて來る。祭神は大國主命で、背後に八雲山、鶴山、龜山が並び、社殿は瑞籬に圍れてゐる。拜殿、社務所、八足門、何となく神代のことか思ひ出られる。寶物には、後醍醐天皇寄附の谷風の琵琶、古鏡、曲玉、筑



出雲大社

紫鉾、秀頼寄附の秀吉の太刀などがある。一覽の價値は十分にある。

それから、千家北島の兩宮司は、神代から此處に奉仕して來た家柄で、向つて右が北島、左が千家の邸であつた。

大社は伊勢の大廟を見た人の眼には、やゝあつけなく見えるであらう。しかし、神代のこと考へるには、前者よりも後者の方が却つて種々なことを思ひ起させる。

杵築の町は、やゝ爪先上りになつたやうな町だ。矢張、參詣者が多いだけに旅館が多い。こゝから西に七八町、海岸に出ると、そこは、稻佐濱と言ふところで、海中に奇岩などがあつて景色が好い。こゝでは夏は海水浴が出来た。



日の御崎神社

二九〇

日の御崎は、こゝから陸を行けば、車も通はない山路を通つて二里半、三里近くあつた。船で行けば、稻佐濱から二時間ほどで行けた。しかし、裏日本海だから、餘程風の好い時でないとなかなかりに難儀だ。しかし、日の御神社のあるあたり、日の御燈臺のあるあたりの雄大な風景は、とても、他では多くは求めることが出来ない。私は船で行つて、歸りに、陸路を歸つた。杵築では、因幡屋、大島屋、竹の屋などといふ旅館がある。稻佐濱の方には、養神館、保壽館がある。

で、大社の参拜をすまして、歸りは、今市で下りて、そこから、電車で一畑の薬師に参詣するのも好い。一畑の薬師と言へば、眼病に靈驗



一畑寺

二九一

があるかで、出雲では、有名な流行佛になつてゐた。祠堂も立派なれば、門前町も家並が揃つて賑やかであつた。それから、暇があつたら、鰐淵寺へも行つて見るが好い。

で、歸りは、平田から汽船で松江へ渡つて行つても好い。今市まで戻つて、汽車で來るのも好い。で、松江市に着く。

松江は好い處だ。縣廳のある町で、この位感じの好い町は、日本にも多くあるまいと思はれた。停車場から、町の中心までは、かなり遠い。大橋のところまで十二三町ある。この大橋は中の海と宍道湖とを連絡させるための運河に架つてゐて、そこは境、美保の關の方へ行く汽船の發着點になつてゐた。そして

左は廣く宍道湖に向つて展けた。

松江の旅館では、皆美館が一番だ。取扱が好く、室は湖水に面してゐて、女中などにも閑雅なのが多かつた。その他一文字屋、赤城館などといふのがあつた。

『ま、になるなら、松江の湖水』

いつかあなたの嫁が島』

その嫁が島が皆美館の二階の間から手に取るやうに見えた。私は其處で土地での安來節のオーソリチーだと言はれる勝子といふ姐さんから、安來節を聞いた。安來節は、一種野趣があつて面白い。

松江で見物すべきところは、先づ城址にある公園である。其處には、入り口に、物産陳列所などがあつて、ひとり手に旅客をその城址に伴れて行く。城址にある松は見事だ。それに、今でも天主閣が残つてゐて、遊客の自由にそれに昇るのを許してゐる。それに其處から見た宍道湖は、パノラマそのまゝであつた。

春は、櫻が咲いて、かけ茶店に、櫻餅の招牌などが下げられた。

松江で名物は、出雲焼の陶器、松江瑠璃などが重なるものだ。それに、宍道湖で獲れ

る蛸は、大粒で、味噌汁にして食ふと頗る美味だ。東京などではとても食はれない。諏訪湖の蛸なども比べ物にならない。

それに羨しいことは、此處等に生魚の多いことである。旨い烏賊の生つくりなどは、他の土地ではとても食はれない。鯛も何方かと言へば旨い方だ。

で、松江で、一夜泊つて、翌朝早く、大橋の袂から、境、美保の關に行く小汽船に乗つて、運河を中の海へと出て行く。風があると、この小汽船はかなりに揺れる。しかし景色は非常に好い。宍道湖よりは、むしろ此方の方がすぐれてゐると思はれる位だ。途中に大根島がある。そこに汽船は寄港して行く。『中の海のはなれ小島の船つきのさや豆畑なつかしきかな』かう私は詠んだ。其處は地味が豊饒で、野菜物などが非常によく出来た。それに此處には、牡丹の名園があつて、松江あたりから人がよく出かけて見に行くといふことであつた。

境は面白い港だ。港の前が深い潮流の早い入江を成してゐる形も好い。西廻りの大阪商船會社の汽船や、敦賀に行く汽船や、隠岐に通ふ汽船などが岸に横附になつてゐて、烟突から薄白い烟を靡かせてゐた。入江のすぐ向ふに聳えてゐる山は、島根山脈で、嵩

山などといふのが其處にあつた。そこに登つて見ると、長く弓弦を張つた夜見ヶ濱は、中の海と外海との間に浮び出してゐて、天橋立を大きくしたやうなすぐれた眺望を持つてゐるといふことだつた。しかし、そこには滅多に登つて見るものもなかつた。これから汽船は、外海に出て、次第に美保の關へと向つて行つた。次第に波は高くなつた。夜見ヶ濱の汀線の見えるあたりに來ると、その上に聳えた伯耆の大山が何とも言はれないすぐれた堂々とした形をあたりにひろけてゐた。東海の富士よりも、私は此方が好きだ。

關の五本松、一本伐りや四本

あとは伐られぬ夫婦松

といふ唄があるが、やがてその關の五本松が向ふの山の上に見え出して來た。そしてその徒崖の鼻を廻ると、美しい美保の關の港が其處に展げられた。棧橋と、海に臨んだ旅館と、その奥に見える美保神社の華表と……

美保の關は町すべてが狭斜のやうなところであつた。藝者は皆な旅館に聘ばれて行つて、其處に泊つた。また、其處に遊びに行く人は、單なる遊覽者はごく稀で、大抵は遊



美保の關

ぶ考を持つて行くものが多かつた。従つて一夜中騒ぎ立てられて寝られないで困るやうなことはよくあつた。町の通はごく狭い一筋路で、漁村らしい気分と遊覽地らしい気分とは混り合つて、混雑と巴渦を卷いてゐた。土産を賣る店と、生魚をひさぐ店と旅館とが兩側に續いた。美保神社は事代主命と三保津姫命とを祀つた國幣神社で、四月の七日には青柴垣の神事、十二月七日には諸手船の神事がある。社殿も立派だ。

こゝから、海岸を傳つて、十七八町行くと、地蔵岬——島根半島の絶端に出ることが出來た。そこには大きな燈臺があつて、其處から

は隠岐の青螺は手に取るやうに見えた。
 それから美保の關を出立點として、半島の裏めぐりをすると、また世に知られない奇
 勝が澤山にあつた。雲津浦の絶望、瀬崎の百日灘、七類灣の七穴、加賀浦の潜戸など
 いふ勝は中でも殊にすぐれてゐた。しかし、路がわるく、小さな峠を登つたり下つたり
 しなければならぬので、健脚のもので、暇のあるものでなければ探ることは出来ない。
 この半島の裏道を、美保の關から日の御岬まで行くには、何うしても二日かゝるといふ
 ことであつた。

これでまア、出雲大社参拜の途上の勝地はあらかた探り盡した。しかし、今市から石
 見の方へ出て行く路は、汽車もまた完全に出來てゐないし、旅客も容易には入つて行け
 ない。けれど、やがて汽車が延びて、濱田あたりまで行くと、また其方の方に行かうと
 思ふものも出て來るだらう。この路は、温泉津、濱田などを通つて、或は津和野、或は
 萩の方へ行つてゐた。沿海五六十里、車で行つてもかなりにかゝるが、今では、何うか
 すると、自動車の便がいくらかあるといふことだ。

十七 九州一巡

- ▲門司 熊本間、汽車六時間、賃金三等一圓六十九錢。
- ▲鹿兒島 まで、門司から十二時間。
- ▲鳥栖 長崎間、哩數九八、六鎊、三等賃金一圓四十六錢、この間に佐賀市があ
 る。久保田からは、唐津行の汽車が分岐する。
- ▲佐賀 唐津間は哩數三〇、八鎊三等賃四十八錢。途中に小城町がある。下車し
 て見るも好い。
- ▲遠賀川 室木間、遠賀川西岸屋間、香月野百間などといふ軌道がある。主とし
 て炭坑地方への軌道である。
- ▲西戸崎 宇美間は、香椎宮を中央にして海の中道をすつと海に近く出て行く軌

道である。西戸崎は博多の前港といふ形である。

▲福岡 二日市間軌道。汽車の線に添つてゐる。

▲二日市 太宰府間小軌道。太宰府遊覽者の爲めに至便である。

▲秋月 田主丸間は豆田、日田の方へ幹線からわかれて行く汽車だ。哩數九、六餘賃金二十九錢。

▲島原 半島にも汽車が完成したので、此處も一廻りするのに便利になつた。

▲佐世保 へ行くには、早岐からわかれ、伊萬里に行くには、有田からわかれて行く。

▲長崎 三角間の汽船は一日一回、八時間位かゝる。平戸へも、五島へも、長崎から汽船がある。

▲宮崎線 も漸く近頃完成した。幹線の吉松驛から分岐、六〇哩餘、汽車賃九十錢内外、途中に都の城町がある。

▲宮崎 内海間汽車、哩數一三、汽車賃三等二十八錢、これから濱つたみに鶴戸、神宮まで五里。

下の關までは、急行が何かで行くとして、哩數七〇五哩七鎖、汽車賃三等六圓十二錢、

▲宮崎 妻間、哩數二二哩、賃金三十三錢、佐土原町が途中にある。

▲久留米 豆田間にも軌道がある。

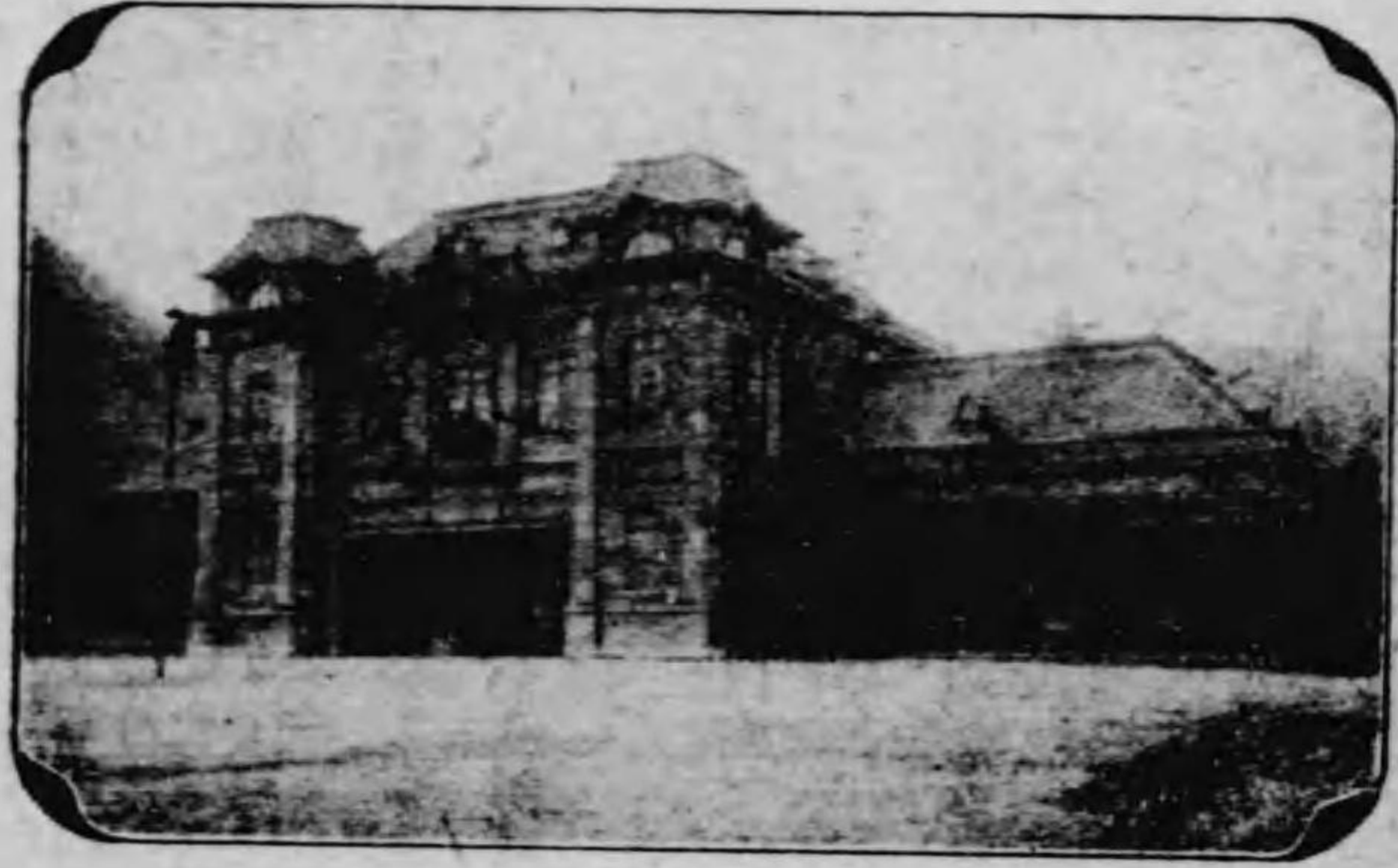
▲耶馬溪 に入る軌道は、中津町から柿板まで、三等賃金三十九錢。

▲大分白杵間 が新に出來た。

▲熊本 から菊池地方の隈府へ行く汽車も出來た。

▲別府 から四國へ渡る汽船は、確か晝と夜と二回出る。伊豫の高濱へ十時間位で着く。

▲別府 白杵、佐賀、徳島 それから日向灘を通つて、内海港に行く、大阪内海間の汽船と、大阪から油津を経て鹿兒島へ行く汽船とこの航路は、九州を一巡する人の是非研究しなければならないものがある。



門司停車場

時間は一晝夜、東京からわけなく其處まで行くことが出来た。

そして門司から九州の旅を始めることにする。九州一巡と言へば、昔は随分大旅行であつたが、今では、門司、鹿兒島間の幹線が貫通したので、一週間か十日あれば、樂に一通りは見物して來られる。九州は物價は高いと言ふけれども、それは門司とか福岡とかいふ九州の入り口だけで、内部に入れば、宿料だつてさう大して高くはない。先づ一圓平均と思へば、それで済む。汽車賃、車賃馬車を交せて、一日五圓あれば、贅澤といふわけには行かないが、先づ先づ一通に安樂に旅をして行かれた。

九州の交通路は、大略三筋にわかれてゐた。門

司鹿兒島の幹線、これが一つ、鳥栖から佐賀を経て長崎の方へ行く線路、これが一つ、それから、小倉から大分の方へ入つて行く線路、これが一つ。まづこの三つである。そして、これを補ふには、汽船の便があるから、それを利用する。長崎から三角に來る汽船、別府から東海岸を廻つて、日向の内海に行く汽船、油津に行く汽船、三角と天草とを連絡する汽船、八代米の津間を航行する汽船、これ等の汽船を汽車に雜せて利用すれば、大抵なところは見物して來られるやうになつてゐる。

で、門司では見るものは、神功皇后を祀つた用宗神社、和布刈の神事のある和布刈神社位のものだ。その次は大里、源平の時に、安徳天皇が内裏を置いたところで、その名を得てゐると言はれてゐる。そこには、有名の製糖所がある。

小倉には、大して見るものがない。しかし、此處から別府、大分の方へ行く汽車がわかれて行つてゐることは注意しなければならぬ。やがて煤烟天を暗くする八幡の製鐵所が來る。若松港の白聖が洞の海を隔て、向ふに見え出して來る。遠賀川を搬出する石炭の船の壯觀がついて來る。折尾驛に來ると、殊に石炭の運搬が盛んだ。これは皆な直方方面の炭山から採掘して來るものだ。

赤間行

立花山

海の中道

香椎宮



八幡製鐵所

III〇二
汽車は段々玄海の見える方へとやつて来た。赤間驛——そこからは、官幣大社宗像神社に行く路が岐れて行つてゐた。東郷から福岡に來る間に、始めて玄海灘の波光に接することが出来た。福岡の近所には宮地岳神社があつた。

それから少し來ると、左に松の生えた獨立山が屹度旅客の眼に落ちた。それは九州の英雄立花宗茂が秀吉の爲めに、島津の大軍を此處に支へた立花山であつた。右には松の生えた沙嘴が長く海中に突出してゐるのを認めた。

それは海の中道だ。矢張、天橋立や夜見ヶ濱と同じやうな成因で出来たものであつた。今ではその鼻のところまで汽車が通じてゐた。香椎驛では、香椎宮にお参りするために、乃

名島の帆柱石

箱崎宮



香椎宮

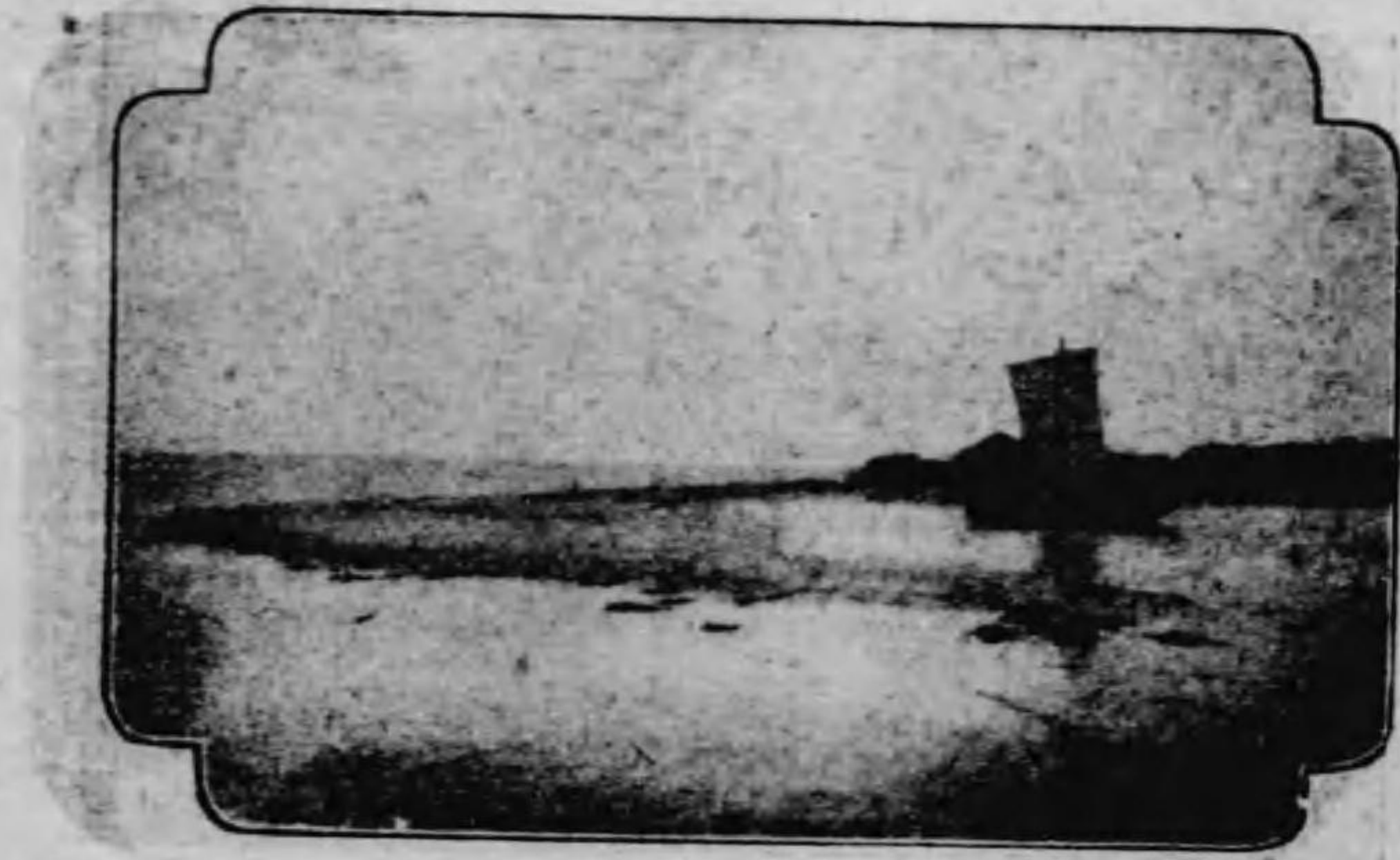
至は名島の帆柱石を見るために、一汽車遅らせても下りて見なければならぬところだ。香椎宮は仲哀天皇と神功皇后の行宮の址に立てられた宮で、此處で仲哀天皇は崩御せられた。香椎といふ名は、その時、椎の木にかけて置いた梓宮から異香が四方に薫したといふところから得た名であつた。社前に綾杉といふ大きな杉の木があつた。社殿は金碧燦爛としてゐた。名島の帆柱石は、停車場から一里ほど海近く行つたところにあつた。神功皇后が凱旋した時の船の帆柱の化石したものだと言はれてゐるが、唯、古い岩があるばかりで、別にこれはと言ふほどのことはなかつた。

で、箱崎宮はあとで見ることにして、先づ福

福岡市

市中で見物する處

東の公園



博多海の中道

岡に行つて其處で下車する。市にも電車が出來たので、町幅がひろくなり、繁華の中心が却つて、他に押込められて了つたやうな形になつた。市の中心は、矢張、博多と福岡との境を劃つた中島橋附近にあつた。一體、福岡よりも博多の方が昔から賑やかだつたので、商賈は福岡よりも博多の狭い通の方に多く住んでゐたのであつた。松島、今任などといふ旅館が感じが好いで、市中を見物するとして、先づ見るべきものは、箱崎宮のある千代の松原、即ち東の公園、それから福岡の西端にある西の公園、それから柳町の遊廓、普通の旅客には、先づ此の位のものだ。

そしてこの二つの公園を電車は東から西へと

銅像

千代の松原

箱崎宮

扁額



博多千代の松原

貫通してゐるから、何方に行くにも非常に便利だ。で、先づ東の公園に行く。電車を下りて、松原の中を少し行くと、龜山天皇の銅像と日蓮上人の銅像との竝んで立つてゐるのが誰の眼にも入つた。日蓮上人の像は、殊に大きい。つまり元寇の記念碑であつた。で、千代の松原を抜けて、海岸近い道筋に出て、一二町東に行くと、そこに箱崎宮の大きな華表が街道に面して立つて、奥深く樓門と社殿とが覗かれた。元寇の當時、龜山天皇が祈願あらせられた宮で、天皇の揮毫せられた『敵國降伏』の扁額は、今でもあざやかにその樓門の上に仰き見られた。社殿は朱塗で、かなり古く且つ立派であ

つた。これは大内義隆の建立したもので、今日まで依然として元のまゝである。この宮が戦捷の神のシンボルで、日清の時にも、日露の時にも、此處に敵國降伏の祈願の勅使が下向した。街道の前の華表の傍にある箱崎宮の字を日露の戦將東郷元帥の揮毫せられたのなども、好い記念だ。

福岡には、醫科大學がある。病院がある。工業學校がある。九州第一の都會と言はれるのも尤だ。

で、引かへして、今度は西の公園に行く。矢張り、電車がその前まで行つてゐる。電車を下りて、眞直に行くと、丘の上に瀧祖を祀つた荒津神社がある。その裏は、一面に博多灣に向つて開けて、残島などが一目に見わたされた。海は浅いけれども、眺望は中々好い。

柳町の遊廓は、移轉して、今は大門などが出来た。東京の吉原の小さいやうなものになつて了つた。だから、今では、昔の博多柳町なるもの、趣味を味ふことは出来ない。しかし、女郎が羽織などを着てふらふら、そこいら廓の中を歩いてゐる形は、ちよつと變つてゐる。それに美人が多かつた。一夜、遊んで、純粹な博多節を聞くのも面白からう。

西の公園

遊廓

太宰府への軌道

昔振山脈

二日市驛

太宰府軌道

天満宮

福岡から太宰府の方へ行く汽車の線路には、電車が並んで通じて行つてゐた。従つて、其方に行くのは非常に便利である。

博多を出て少しく行くと、右の車窓に當つてかなり高い山脈が見える。そしてそれがや、扁平に長く靡いて見えた。それは昔振山脈で、丁度その向ふ側に佐賀市のある平野が横つてゐた。

雜餉限驛——その名からして既に藤原氏時代を想像させるやうな氣分のするところであつた。その近所には水城の跡があつたりした。やがて二日市驛に着く。

太宰府へは、此處から小さな軌道がわかれて行つてゐる。それに乗ると、三十分で太宰府の天満宮の大華表のある少し手前のところにある停車場で下りることが出来る。太宰府の町は、茅葺の屋根の雑つた汚い町で感じも餘り好い方ではない。旅館などにもあまり好いのがありさうにも思はれない。やがて華表を入つて境内に行く。相變らず梅が多い。反橋などもある。社殿は近年の再建でまだ新しい。例の菅公の飛梅などといふのもあつた。裏は公園になつてゐて、腰掛茶屋などがあつた。そこでは餅を賣つてゐた。

この奥に龍門山が聳えてゐて、頂に龍門神社といふのがあつたが、普通の旅客は、其處まで登つて行くものはない。

で、引返して、太宰府の町を歩くなり、車に乗るなりして、もとの都府樓のあつた方へと出かけて行く。此處では、天満宮よりも却つて其方の方を見物しなければならぬ。車で行けば、太宰府の停車場前からあちこち見物して、二日市の驛まで、三四十錢位のものである。

町から入つて行く處には、確か標石が立つてゐた。で、一田圃越す。そこからは、例の天拜山の松が左に當つて見えてゐる。やがて觀音寺へと着く。

例の菅公の『都府樓纒見瓦色、觀音寺唯聞鐘聲』の觀音寺である。昔は、大きな寺で、その工事に八十年間もかゝつたと謂れたほどであつたが、一子院、別院なども非常に多かつたといふことであつたが、今は唯田疇の中にある小さいさびしい寺であつた。扁額『觀世音寺』と言ふのは、有名な小野道風の筆だが、かけてあるのはその副額で、本當の寺の寶物になつてゐる。頼めば、今でも見せて呉れる。それから鐘樓には、菅公時代の古い鐘が今もかけられてあつた。靜かな、昔の思はれるやうな氣分のする寺だ。

こゝを出て、少し行くと、それに隣つて、都府樓の址が、矢張田疇の中に残つてゐた。先づ大門の址、その奥に都府樓、即ち太宰府の政廳の址がそれと指點された。都府樓は東西十四間、南北六間、その屋根には、皆な支那の紫色の瓦を用ゐた。その瓦の断片は、今日猶島や田の中から出た。

今日残つてゐる礎石の数は三十二三、北の方地中低い處に五つ六つ礎があつた。其形は方六尺位で、柱を受けたところは四五寸ばかり隆起してゐた。そこには今、都府樓址と書いた大きな石碑が立つてゐた。そして何といふ縁故か、應神天皇の小さな祠がそこに祀られてあつた。天拜山の松は、殊にそこから正面にあざやかに見られた。いかにも、廢都と言ふやうな氣分のする處である。

これから天拜山の方に向つて、眞直に田疇の中を車で行く。少し行くと、こんもりとした木立があつて、そこに菅公の邸址が残つてゐた。で、旅客は二日市の停車場へと戻つて来る。しかし、此處では非行くことを勧めたいのは、すぐその向ふにある武藏温泉であつた。初め行つた時は、私は其處を知らなかつた。二度目に行つた時、始めて行つて見て「は、ア、こんなところがあるのか、これは

豆田の方へ

耶馬溪へ

高良山脈

鳥栖の分岐

背振山

佐賀市

面白どころだ』と私は思つた。

それはいかにも、田舎の温泉場、田舎の中の温泉場と言はれるやうな處であつた。旅館にもちよつと氣のきいた好い旅館があつた。確か私は大丸屋といふ家に泊つたと覚えてゐる。朝起きると、垣越しの野には、雲雀が好い聲を立てゝゐた。

二日市からは、太宰府に行く他に、朝倉郡の方から豊後の豆田の方へ行く軌道がわかれて行つてゐた。そこから豆田まで十三四里、この間は高良山脈の北の裾を掠めて行くやうなところで、溪山の勝に富んでゐた。豆田から耶馬溪の方へ出て行くのも、ちよつと面白い旅路であつた。この間には、齊明天皇が百濟を征された時に置かれた筑紫朝倉宮の址があつた。

二日市から南に進むと、高良山脈の城壁のやうな山の姿が段々左にあらはれ出して来た。その山脈の手前には、筑紫次郎の稱ある筑後川が流れ、その陰には、征西將軍宮の遺址のある矢部の谷が深く穿たれ、その山の西の一角には、官幣社高良神社が安ぜられてあるのであつた。此處等に來ると、南朝のことや、菊池氏のことなどが種々に思ひ出された。



佐賀松原神社

九州の特色の櫨の樹など段々あたりに見え出して來た。

鳥栖では、長崎へ行く汽車が右にわかれたので先づ、其方の方へ行つて見ることにする。段々ひろい筑後平野が見え出して來る。中原、神崎、そこは神崎索麵と言つて、索麵の澤山に出來るところ、背振山に登つて行くには一番近いところ、それからやがて佐賀市だ。

背振山に登つて見ると、右明の海から温泉岳が一目に見えて、非常に好いといふことであつた。神崎から登路五里。

佐賀市には、たしか馬車鐵道があつた。此處は江藤新平だの、大木喬任だの、大隈重信などの出たところで、氣風に一種違つたところがあ

松原神社

佐賀以南以西

名尾紙

久保田驛
唐津への分岐

つた。しかし、市街はさう大して立派ではない。それに見物するところもたんとない。一汽車遅らせれば、十分重立つたところは見物が出来た。

此處では、鍋島侯の藩祖を祀つた松原神社と、城址とを見れば、それで十分だ。松原神社の境内には、それでも大きな樟樹があつた。城壕には、夏は紅白の蓮が亂發した。市の附近では、閑叟公の別荘であつたお茶屋、多布施川の土手の上の松、その西北の九州探題府の址などがあつた。市から北へ三里行くと、川上の鮎梁があり、諸富から筑後川を渡ると、柳河町がある。

佐賀以南以西は、デルタの發達したもので、昔は、佐賀近くまで海波が入つて來てゐたであらうといふことであつた。従つて、こゝらあたりの有明の海は、唯、泥海で、あまりに見るに足りるやうな處はない。

川上の山の奥では、名尾紙といふ半紙の出来る山村があつた。

久保田驛からは、唐津行の汽車が右にわかれて行つた。此處から唐津まで、三十哩、五鎰汽車賃三等六十五錢、時間は二時間あれば行かれる。長崎まで行く往路なり歸りなりに旅客は是非行つて見る必要がある。何故と言へば、唐津半島は九州では一番すぐ

小城町

小さな炭山の連港

唐津町

れた風景を持つてゐるからである。

で、其方に行つて見る。

小城といふ町がある。好い處だ。城址には公園がある。櫻などもある。南朝の忠臣で、天山で戦死した阿蘇大宮司惟直の記念碑なども立つてゐる。

東多久、筋原などといふ停車場があつた。これから松浦の海岸まで出る間は、小さな炭山の連亘で、何處の山からも、石炭が出たり火山灰が出たりした。工場、烟突、トロコ、さういふものが到る處にあつた。

嚴本、岩屋、相知、山本、皆な石炭を運搬するための停車場だ。しかし、こゝを通過すると、松浦川が右に見え、例の望夫石の鏡山などが海岸の方へ顯はれ出して來た。

唐津は、感じの好い町だつた。何方かと言へば、さう大して商況が活躍してゐる方ではないが、しかし、家竝などはかなり揃つてゐる。其處では、唐津焼などといふ陶器が出来た。

市街から海岸に行く、西の溜の海水浴場までは、十町位しかない。右に小高い城址とそこにある松の生えた丘陵とが見えた。そこには眺望に富んだ公園があつた。

西の濱の海水浴場は、九州では先づ好い方だ。松が多く、波が清く、海中に島などが浮んでゐて好い。そこから見ると、右に芥屋の大門のある山脈の海に盡きてゐるさまが見え、左には二つ島、



唐津領巾振山

まが見え、左には二つ島、ことに大島の根元に、西唐津港から石炭を積み出す汽船の煤烟の白く黒く漲りわたつてゐるのが見える。一夜、静かに泊つて行くに好い處だ。
公園からは、満島から虹の松原の方が一目に見えた。鏡山の獨立してある形も好い。寫真にある唐津の全景は、成ほどこゝあたりから見た鳥瞰圖であるといふことが點頭かれた。

こゝまで来た次手に、もう少し奮發して、唐津半島の絶端まで旅客は行つて見る方が好い。車で行つて、往復一圓か一圓五十錢出せば行つて來られる。さうすれば、例の秀吉の征韓の役の名護屋の牙營の址も見られ、ば、二千年來の古祠田島神社にも參詣が出来る。風の都合で、七ツ釜の奇岩を見に船を出すことも出来た。

此間では、唐津から西唐津港のあたりがちよつと好い。それから、小さな山を越して呼子港に入つて行く感じが好い。呼子港はいかにも、漁市らしい特色に富んでゐて、町の通の狭いのも好ければ、後に靡いてゐる丘と、その丘の上の松のさまも好い。で、その通りを七八町行くと、其處に加部島に渡る便船の出るところがあつた。

この加部島に渡つて行く細い海峡が中々好い。それに、波も高いので、感じが雄大である。海中の鷹島の根元に怒濤の打寄せて碎けてゐるさまは、繪のやうであつた。

加部島の田島神社は、國幣中社で、二千年來の古社だ。

加部島から名護屋に渡る間は二十四五町位あつた。かなりな急な潮流で、船は押流されるやうに思はれた。名護屋の牙營の址は、その埠頭から七八町島の中を通つて行つたところにあつた。この附近は松が多く、その址のある丘陵にも、大きな松が海風に

鳴つてゐた。その址には、由來を書いた石碑などが立つてゐた。

其處からは、加唐島、松島、左に少し離れて馬渡島が見えた。かういふところから、征韓の師が出て行つたと思ふと、何とも言はれないやうな気がする。其時分は、この漁村はさぞ雑踏したことだらう。女なども澤山に入り來んで來たからうなどと思ひながら、私は長い間其處に立盡した。歸りには秀吉の栽ゑたといふ蘇鐵のある寺を訪ねた。

七ツ釜は九州でも聞えた柱狀節理の洞窟だ。此處と芥屋の大門、この二つの寫眞は世の中によくあつた。しかし、いづれも絶海のほとりにあつて、船からでなければ見ることが出来ない。そして海は非常に荒いと來てゐる。だから、わざ／＼それを見に行つても、風がわるくつて、三日も四日も逗留して、それでも猶行つて見ることが出来ないで空しく歸る人が澤山あるといふことだつた。私も矢張り行つて見ることが出来なかつた。土地の人の話では、舊の五月頃の靜かな日でなければ、樂に、船に酒でものせて見に行くといふことは出来ないさうだ。

私は歸りには、呼子から湊の方へと出て來た。つまり七ツ釜のある土器岬の裏を通つて海岸をつたつて唐津の方へ歸つて行く路だ。この間も風景はかなり好かつた。湊の

立神岩の見え出して來た時には、私は思はず快哉を叫んだ。

湊には、小さな鑛泉があつた。

湊から相賀、鳩川、浦などといふ處を通つて、唐房の方へ出て來る路も好かつた。

唐津から長い橋を渡つて、遊廓のある満島を通つて、虹の松原の方へ行くには、輕便軌道が出來てゐる便利だ。この軌道は、虹の松原から濱崎まで行つてゐる。

虹の松原には、海水浴場があつた。好い處であつた。鏡山の山の眺望も絶佳だ。私は松浦佐用姫のことを思ひ出して其處に立つてゐた。昔にあつては、此處が、外國に渡航する唯一の港であつたことなども想像した。そこには、鏡神社、惠日寺などといふ名刹

古祠がある。玉島川の上流一里にある玉島神社なども次手に參詣するが好い。

濱崎から、芥屋の大門の方へ出て、福岡に歸つて行くのも面白い路だ。

で、久保田まで引返して、又、元の旅をつゞけて、長崎の方へと向つて行く。牛津、山口、北方などといふ停車場がある。此處に來ると、島原半島の帝王溫泉岳がよく見える。

こゝらは矢張炭坑が多い。

祐徳院稲荷

鹿島町

武雄温泉

櫻山



祐 徳 稲 荷

三二八

北方附近から南に岐れて行つてゐる輕便軌道は、鹿島町から、こゝらで流行佛の祐徳稲荷へと行くものである。この稲荷の縁日には臨時汽車を仕立て、も、猶ほ乗せ切れないほどの雑踏をあたりに見せる。

鹿島町もちよつと感じの好い町だ。中學校などがあつた。

北方の次は、九州の樂園と呼ばれた武雄温泉のある武雄驛だ。設備は整つてゐるが、風俗が淫蕩で、あまり感じは好くない方だ。しかし、旅館は非常に大きいのである。矢張り湧出量が少いので、多くは、旅館から手拭を下けて大湯へと入りに行くやうになつてゐた。温泉の後は、櫻山、そこには公園がある。

昔の街道

嬉野温泉



武 雄 温 泉

九州一巡

火山岩で出来た奇岩が澤山にあつて、ちよつと變つてゐる。そこには栖崎神社といふ祠などがあつた。

武雄を出て少し行つた線路の左に、全山奇岩で出来た御船山といふ山があつた。その山の東の山麓には、武雄神社があつた。浴客はよく其處等まで散歩に出かけた。

長崎へ行く昔の街道は、此等あたりから左に深く入つて行つてゐた。そして多良岳の凹處を越えて、大村灣の彼岸へと出て行つてゐた。此の峠の此方の麓に、嬉野といふ温泉場があつた。

汽車の通つて行くところは、矢張りこの多良岳の北西の連亘したところになつてゐる

三一九

有田町

伊萬里陶器

工榊右衛門



嬉野温泉

三三〇

けれども、迂回してゐるだけに、さう澤山ト
ンネルもない。唯、丘陵の中といふ感じだけ
で、有田へと入つて行く。

こゝは、伊萬里焼の陶器の本場で、汽車の
中から見ても、特色のある町だといふことは
わかる。陶器の工場や、煙突からあがる白い
煙や、さういふものが、半は丘陵に凭つて面
白く展開されて来た。

例の名工榊右衛門の昔なども偲ばれた。昔
は、陶器は此處から伊萬里港へ出して、それ
から彼方此方へ輸出されたので、それで伊萬
里焼といふ名を得たのであつた。今でも、陶器
に興味を持つてゐるものは、ちよつと下りて
見るのも好い。それに、此處からは、伊萬里

伊萬里へ分岐して

早岐の瀬戸

佐世保

大村灣

多良岳

に行く一支線が右にわかれて行つてゐる。そこから伊萬里までは停車場がたしか一つか
二つしかない。そこに行つて、古風な昔の港のさまを見るのもわるくはない。生魚は澤
山にある。烏賊など殊に旨い。

三河内、それから早岐、それに丁度川かと思はれる早岐の瀬戸がある。
こゝからは、佐世保に行く汽車が右にわかれる。

佐世保は、軍港以外に、別にこれと言つて見物するところもない。矢張、横須賀など
と同じやうに、三十年前までは、一漁村であつたものが、海軍のために急に開けたとこ
ろで、氣風などにも、あまり變つたところがない。しかし、日清、日露兩役の海軍の根
拠地として、佐世保を偲ぶために、ちよつと寄道をして行くのも好い。

早岐から南風崎に行くと、地形は全く變つて、風光の明媚な大村灣がその前に美しく
開けて来た。そして、今まで右に見て来た多良岳連山は、今度は左に見えるやうになつ
た。

川棚驛あたりに來ると、大村灣は愈ゝその明媚な風光を汽車の右の窓に集めた。好い
景色だ。琵琶湖の沿岸よりも何れほどすぐれた景色だか知れなかつた。それに、湖水で

なく、入江だけに、水の色が思ひ切つて碧い。いかにも印象派の明るい繪に對したやうな氣がする。

汽車はこの灣頭をぐるりと廻るやうにして行つた。彼村驛あたりに來ると、この入江と外海とを連絡させた伊浦瀬戸の方が段々見え出して來た。昔、長崎街道を旅客が通る時分には、彼村へ下りて來る俵阪峠の山路が、この大村灣を見渡すための名所となつてゐたといふことであつた。

多良岳は此處等にと來ると、實によく見える。温泉岳に次ぐ名高い火山だけあつて、その容は頗る雄大を極めてゐた。

松原驛の近所には、松原温泉があつた。箕島、カロウ島などといふ島が見え出して來た。臼島も見えて來た。

やがて大村驛だ。

大村町は、大村侯の城下で、明るい好い町だ。そこには、歩兵の聯隊などがあつた。城址は灣に面してあつた。此處から各地に發着するペンキ塗の白い小蒸汽の浮んでゐるのが玩具か何ぞのやうに見えた。



小濱温泉

諫早町は、有明の海と大村灣を連絡して、その南に島原半島を制してゐるやうな位置にあつた。今では、島原半島を貫通する汽車がそこから岐れて行つてゐた。諫早から島原町の先の湊新地まで汽車が行つてゐるが、この間は哩數二六哩三鎖、賃金三等五十三錢、時間は二時間。諫早には、眼鏡橋といふのがあつた。それに、多良岳には此處から登るのが順路なので、夏は、登山者が多く集て來た。こゝから、南一里、千々岩灣に面して、有喜といふ漁村があるが、此處は温泉岳を見るのに一番すぐれた位置とされてゐた。

ちよつと一日を島原半島で暮らすのも好い。島原町から温泉岳に上つて、それから、歸りは

西に下りて、小濱の温泉に浴して、そこから、汽船で、長崎のすぐ裏の茂木港へと行くのなどは、頗る興味の饒い旅行々程である。小濱の温泉は、夏は香港、上海あたりから、暑を避けて、外国人のやつて来るところだけあつて、設備も完全してゐるし、旅館にも大きい立派なのがある。九州の西海岸では、屈指の温泉場だ。しかし、此處に行くには、島原の方に汽車で行かずに、長崎から茂木に出て、そこから汽船で行くのが順路でもあり便利でもあつた。

大村から汽車は喜々津、大草、長興、道の尾、浦上を経て、直ちに長崎の終點驛へと達して行つた。

此間には、別に見るものともなかつた。

長崎は日本の文明の母であつた。こゝから日本は新しい外國の知識を輸入した。だから、昔は、長崎と言へば、それは大したものであつたに相違なかつた。しかし、今では衰へて了つた。昔の町や市街は残つてゐるけれど——いかに古い町だといふ氣分は残つてゐるけれども、商業も振はず、人氣も引立ないといふ風があつた。長崎で見物するところは、諏訪神社、丸山、居留地、シーボルトの邸跡、ケンベルの

碑、崇福寺、先づその位のものだ。

停車場を出て、税關から出陣橋の方へと行つて見る。足は自然舊居留地の中に入つて行く。横濱、神戸の舊居留地などから見ると、古いだけに感じが好い。規模はしかし小さい。その後の丘の上には、各國の領事館があつて、旗が風に靡いて見られた。

それから引返して丸山の方へ行く。そこから長崎港を見た眺望はや、好い。丸山の遊廓に行つて、一夜遊んで、花月樓に、楊貴妃の遺物鶴の枕といふのを見るのも、馬鹿馬鹿しいが、旅の一興でないこともない。

大波止の賑ひ、此處から、稻佐、飽の浦、立神、水の浦、平戸、五島の方へ出て行く汽船、其處に集る乗客、それから昔は出島でオランダ人の商館のあつた出島町、片側が全く寺になつてゐる寺町通、往昔の立山役所のあつた趾、其處には、今、中學校が出来てゐる。立山の金比羅神社のある丘陵は、長崎人の有名な風揚をするところ、今でもその風習は残つてゐる。

諏訪神社のあるところは、長崎では、さう家並の揃つたところではなかつた。長い石階、それを登ると、『鎮西大社』と言ふ立派な額がか、つてゐて、樓門、正殿、成ほどこ

れが有名な諏訪神社かと點頭かれた。この祭禮は、九州でも名高い名物の一つになつてゐる。その詳しいことは『長崎案内』に書いてあるから、それを見るが好い。

この社の境内は、今は公園になつてゐて、樹木のこんもりと茂つた具合など中々に好い。感じも静かだ。そしてそこには、日本での活字製造の元祖本木昌造の記念像だの、有名なオランダ人ケンベルの碑などがあつた。その附近には、物産陳列所があつて、長崎縣の産物が並べてあつた。

ケンベルの碑
稻佐
飽の浦

暇があつたら、旅客は稻佐の方へ行つて見るも好い。そこは日露戦役以前は、ロシアの植民地のやうになつてゐて、ロシアの東洋艦隊は、冬は避寒地として、優遊地としてよく其處にやつて来た。今でもロシア人の墓だのいろ／＼なものが残つてゐる。

飽の浦には、三菱の造船所がある。船渠には、いつも汽船が入つて、機械の音が水を渡つてひびいて来た。細かく探れば、長崎には、まだ見るべきものが澤山にあるけれども、普通の旅客には先づ此位だ。これで、その裏の茂木港にでも行つて、島原半島の温泉岳でも見て来れば十分だ。

平戸へ
五島へ

しかし、少し念の入つた旅客はこゝから平戸に行つて見るのも面白い。五島列島の福江あたりまで行つて見ても好い。五島の海中には、男女列島といふのがあつて、其處で珊瑚が獲れるので、危険を侵して、漁師はよく出かけて行つた。

長崎からあとに戻るのが面倒なら、此處から肥後の三角に渡つて行けば好い。この間の航海はいけにでも逢はない限りは、さう大して困難ではない。そして夕方出て、寝てゐる間に、汽船はいつか三角に着くのが例だ。そして歸りに、熊本と、久留米とを見るが好い。

三角へ

再び鳥栖驛に戻る。

久留米市

久留米市では、東京の蠟穀町の水天宮の本家の水天宮と、高山彦九郎の墓とを見れば澤山だ。

水天宮

水天宮は筑後川の東岸瀬下町にある。安徳天皇、建禮門院、二位局を合祀したもので、當時建禮門院に奉仕した宮女伊勢子が創建したものだと言はれてゐる。それを有馬侯が江戸に分社したのであつた。高山彦九郎の事蹟は、此處に言ふまでもない。かれは天下を周遊して此處に来て自殺した。その墓は本町の遍照院にあつた。

高山彦九郎墓

此處では例の有名な久留米餅が出来た。
矢部の谷も入つて行つて見ると面白い。南朝の末路——征西將軍の末路が今でもそこに指點することが出来た。肥後の菊池は最後まで、山越しに、この深山の中に入つて了つた征西將軍宮を保護した。

それから三池地方に行くまでの中では、福島町の近所にある石人、羽犬塚驛の南の船小屋の鑛泉、それから瀬高町、矢部川を渡ると、もう三池地方で、大牟田市を中心にした炭坑が到る處にあつた。烟突、井櫓、煤烟、トロコ、實に目に驚かすほど盛んだ。大牟田の元は小さな町が、今、市になつて、人口五萬を算し、海を埋め立て、大きな築港をやつたのも、皆なこの炭坑の事業の大きいのを語つて餘りあるものであつた。

炭坑は福岡縣と熊本縣に跨つて、六坑區にわけられ、すべて三井がこれを經營してゐる。大浦、七浦、宮の浦、勝立、宮の原、萬田、その中で萬田坑が最も深く大きいと言はれてゐる。

築港の出来ない中は、すべて和船で島原半島の口の津港まで運んで行つて、そこで初めて汽船に積んだものだが、今では、すぐに棧橋に大きな汽船が横付けにされ、トロコ

で運んで来た石炭を積卸機で自由自在に船の中に移し入れることが出来るやうになつた。そして有明の海の干満の甚しい水深は、開門で堰いて水準を整調した。

肥後の長州驛はやがて来た。そこは、島原半島と相對して、島原町の瓦葺粉壁の上に、美しい温泉岳の秀姿を仰ぐことは出来た。こゝからは、島原半島に渡る汽船が毎日一度づつ、出て行つた。

長州からは有明の海とは全く離れて了ふ。ついでに來る高瀬町は、西南の役に、賊軍が官軍を悩ましたところであつた。町の東を菊池川が流れてゐて、菊池郡の豊饒な米穀と物資とは、皆な舟楫の便を利用して此處へと出て來た。

例の有名な田原阪の嶮は、木葉驛で下りて、街道を十五六町行つた丘陵の中にあつた。阪の上には、松林があつて、今、その事蹟を記した記念碑が立つてゐた。植木には賊軍がその本營を置いてゐた。

山鹿温泉——山鹿燈籠と山鹿團扇とできこえた山鹿温泉へは、植木驛で下りて北に入つて行く。里程二里半ほどある。温泉は硫黄泉で、設備もかなりによく、浴客の数は一年に十萬に達するといふほど流行した。

この山鹿に行く途中に立山といふ處があつて、菊池郡地方に行くには、其處から入つて行くやうになつてゐる。旅客は、菊池郡の中心隈府町に行つて、南朝の爲めに孤忠をつくした菊池氏の蹟を探るのも、興味が饒い。城址——その時分のま、残つてゐる城址は高いところにあつて、遠く平野を見渡すやうになつてゐた。別格官幣社菊池神社は、武時を主として、武重、武光、武朝、武政と配祀したものである。

正観寺には武光の墓があつた。

熊本で、是非見なければならぬものは、城と、本妙寺の清正公と水前寺の庭と先づこの三つであつた。

旅館では、錦屋、研屋。

熊本の城は、西南の役に兵燹にか、つて、宇土櫓だけを残したにとゞまつてゐるけれども、壕と城壁とは、昔のま、で、その規模の大きいのは、他に見ることが出来ないほどであつた。そして、名古屋でも此處でも乃至は江戸城の一部でも、皆な加藤清正が設計したのだと思ふと、清正も唯武勇一遍の武將ではなかつたことが想像された。今、そこに第六師團司令部がある。



熊本水前寺

城の北隅に百間壕といふのがある。これは清正が故らに北方の守備を緩やかにして、當時の中央政府に他意なきを示したのを、嗣子忠廣これを恐れて、急にこの壘壕をつくつたため、徳川氏の忌避に觸れたのだと言はれてゐる。城を見て、本妙寺へと志す。そこは日蓮宗本國寺の末寺で、清正公祠が其處にあつた。有名な流行佛で、賽客と香烟とはいつも絶ゆることがなかつた。この本妙寺は、清正が城を築いた時、京都から移したもので、今の堂宇はその子忠廣の創建したものであつた。

花岡山は西南の役に、賊軍が砲を其處に引上げて、城中を亂射したところで、こゝが取られてから、城では、殆ど何うすることも出来ない

苦境に陥つたのであつた。

水前寺は、市から東南一里、そこに行くには、軽便軌道があつた。成ほど細川侯の庭園だけあつて、泉石の布置頗る人の心を惹くに足るものがあつた。それに、こゝに特色



数鹿流瀑

なのは、清水が盛に湧き出すことで、池底の石も、水草も、そこに泳いでゐる鯉も、皆な手に取るやうに見えた。

それから暇があつたら、江津湖の方まで行つて見るのも好い。

阿蘇山は、九州の名山で

あるばかりでなく、また日本の名山であるばかりではなく、世界にもたんと類のないほど規模の大きな噴火山であつた。阿蘇と霧島とのこの二つは、九州に行つたものは、多少難

儀でも、是非上つて見る方が好い。でないと、屹度あとで後悔する。

阿蘇に行くには、熊本から軽便軌道で、大津まで行く。これはわけはない。それから



阿蘇の噴烟

立野に行つて、火口瀬の落口の數鹿流瀧を見物して、黒川に添つて、南方の火口原阿蘇谷に入つて行く。それから一里半

に驚かされる。

しかしちかきに山に登るには、的石まで行かずに、途中で折れて、賀田といふところを通つて、黒川から坊中へと出て行く。この方が便利で近い。しかし、普通は宮地まで行

つて、其處で阿蘇神社にお参りして、阿蘇大宮司の昔の寶物などを見て、古神西町を通つて、坊中に出てそして登るのを順路としてゐる。山はさして峻しくない。淺間や霧島のやうなことはない。下駄ばきでも登つて行かれる位の路だ。

噴火口が三つある。そして最も凄しい活動をしてゐるのは、南の新噴火口だ。で、この壯觀を見て、歸りは杵島山と烏帽子嶽の間を下りて、湯の谷に下りて来る。そこには温泉がある。一夜泊つて、靜かな谷川の音をきくのも妙だ。

熊本から南すると、川尻、それから緑川の鐵橋を渡つて、やがて宇土に着く。宇土は豊臣秀吉が熊本の加藤に對して小西行長を置いたところで、今でも其處にその城址が残つてゐた。町は丘陵を前にして展けたやうな感じの好い處だつた。こゝから、三角港に行く汽車が右に岐れて行つてゐた。

この三角線は、半ば有明の海に添つてゐて、風景が好い。殊に、此處から見た温泉嶽は秀麗極まるものであつた。三角までは哩數二五哩九鎖、三等二十七錢だ。三角の停車場は、三角港から一里手前の際崎にあつて、そこから、天草、長崎の方へ行く汽船の便があつた。

筑紫のしらぬ火は、宇土の裏山、天草あたりから、一番よく見えるといふことで、中でも宇土の近所の高良、下松あたりが好い。

宇土から松橋、その大野川の河口の埠頭からは、鹿兒島縣の米の津に行く汽船が毎日發着する。

これから八代に行く間は、前に玖摩郡の高い山脈を仰いだやうな形になつてゐて、その奥には、例の人跡の乏しい五家莊が横つてゐるのであつた。

小川、有佐——その近くにある宮原町から五里ほど山の中に入ると、昔は堂坊山を埋め香烟あたりに遍ねく、九州の高野山と言はれた釋迦院の址があつた。

此處は玖摩川の河口に當つてゐて、交通の要衝に位置し、殆ど玖摩郡の咽喉を扼した形になつてゐるので、人烟が稠密に、物資が皆な此處に集中してゐる。玖摩の山の中から伐り出した木材は、筏にして、皆な此處に流して来る。従つて大きな製材所があつたり、大きな工場を持つたセメント會社があつたりした。

しかし港は玖摩川の泥沙の爲めに埋められて、汽船の來るところが段々遠く沖の方に



日奈久温泉

なつて行つた。しかし、矢張この附近の主要港で、三角、米の津に行く定期汽船は、毎日此處に寄港して行つた。

町には、征西將軍宮がある。例の懷良親王を祀つたもので、町の中ほどから右に城址の方へ入つて行つたところにあつた。八月の祭禮は、中々賑やかだ。それから町の東一里の宮地村には、悟眞寺といふのがあつて、そこに懷良親王の墓があつた。親王は延元四年三月に八代に入つて、元中五年三月に薨去された。その間に三十六年の年月が経てゐた。

其他、遙拜堰、遙拜神社などといふのがあつた。遙拜はつまりこゝから、阿蘇の噴烟を望んだといふことを意味してゐた。



球摩川嶽飛の岩

八代から汽車は玖摩の山中に入つて行くが、一路は、海岸に沿うて、日奈久から薩摩の國境に行つてゐた。この道路は、昔は薩摩に入つて行くメインロードで、例の三太郎の嶮を越えて、水俣から米の津の方へと出て行くものであつた。日奈久温泉は、八代から三里、海に臨んだ生魚の多いちよつと好い温泉場であつた。八代からは馬車が出て行つた。

玖摩川の谷は、九州では一番すぐれた溪山の勝を持つてゐた。人吉から八代まで下る河船が昔はその交通路を成してゐて、その間に、清正公岩、鎗倒しなどといふ奇勝があり、瀬の数は四十八瀬と言はれてゐた。實際、この河船は、天龍、富士、阿賀などを下るものと同じで、奇

鍾乳洞
鐘倒し



川 摩 玖

景百出、殆ど應接に遑なかつたほどであつた。しかし、汽車が出来てからは、その勝を仔細に探ることは出来なくなつた。それでも、汽車の線路は、この川の岸に沿つてつけてあるので、風景はわるいことはない。トンネルを出てひろびろと川を見わたしたところは中々好い。しかし、旅客は白石驛あたりで下りて、神瀬の鍾乳洞と、清正公岩とを見なければならぬ。鐘倒と言ふのは、人吉の相良侯が河船で下る時、鐘を倒さないうではどうしても通ることが出来なかつたために得た名だが、その絶壁に偏つて溪の流れるさまがいかにも奇観だ。それから清正公岩と言ふのは、清正が宇土を攻略してから、人吉をも取らうと思

つて、此處までは入つて来たが、山が峻しいので、何うすることも出来ず、こゝから引返したといふところである。巨岩が岸に横つて欹つてゐた。

一勝地
人吉町

渡、一勝地などといふあたりは、殊に溪山が深い。人吉は玖摩山中の一小都會、相良侯の治所で、玖摩川に臨んでゐる。感じの好い、割合に明るい町である。それに、河港らしいカラアがあつて好い。鮎、焼酎が名産だ。

五家莊

五家莊、日向の椎葉那須の山中に行く路が此處からわかれて行つてゐた。人吉から大隅の吉松まで、この間に加久藤越の峻路が横つてゐた、昔はその大きな峠を馬車で越えて行つたものだが、今は大畑、矢嶽、眞寺の三驛で、ループ式などといふ新式の汽車のレールをつくつて、そしてわけなく越えて行つてゐた。矢嶽驛あたりからは、玖摩の谷が一目に見わたされて、いかにも感じが好かつた。

矢岳トンネル

トンネルもかなり多かつた。この大きな峠を越すと、もう其處は鹿兒島縣で、大隅國だ。地形も玖摩とは餘程趣が變つてゐた。其處には下流に行つて大きくなる川内川が流れてゐて、その向ふに、霧

吉松驛

宮崎の方へ
の分岐點

留孫神社

霧島山

登山各方面

島火山群が連亘してゐた。

吉松驛からは、日向の宮崎の方へ行く汽車がわかれて行つた。この汽車は、やがて宮崎まで行くのだが、今は都の城の先の山の口まで留つてゐる。この間は哩數四五哩、二等七十五錢で、都の城までは三八哩三鎖、三等六十四錢であつた。この汽車は加久藤、飯野、小林、高原、谷頭などといふ處を通つて、霧島の東の裾を掠めて、都の城へと行つてゐた。この間にも見るところが多かつた。飯野からは、その山奥三里にある留孫神社に行かれた。小林は市場で小林米といふ質の好い米の出来るところで、人口が三四千あつた。それに木材なども多かつた。こゝから野尻を通つて、眞直に、宮崎に行く路がある。里程十二里二十五町、確か馬車が通ずる筈だ。野尻の村はづれには、伊集院忠真の墓があつた。忠真は島津の家臣であつたが、その父章侃が島津忠恒に殺されたのを憤つて、兵を起して、島津氏に抗し、戦敗れて殺されたのである。

霧島山に登るには、高原驛で下りて、神武天皇の誕生地と稱せられた狹野神社に詣でて、祓川あたりで泊つて、案内者を頼んで登る。この登山路はかなりに険しい。馬背越あたりは殊にひどい。山頂には、例の天逆鉾があつて、それから向ふに下ると、噴火口

山ヶ野金山

犬飼瀧



霧 島 山

がある。かなりに雄大だ。それからその縁を廻つて西に下りて、榮尾温泉に行くなり、霧島神社のあるところへ出るなりする。この間の高原は、錦江灣と櫻島とを一目に見わたして、何とも言はれず眺望が好い。榮尾温泉も山の中の温泉場として、靜かに一夜泊つて見るのも好い。霧島神社のあるところから、國分の方へ出て來ることも出來た。

吉松から、栗野、こゝは、大口町に行く要衝に當つてゐるので、乗降の客が多い。横川驛は、附近に有名な山ヶ野金山を控へてゐるので、停車場も大きくあたりも賑やかだ。それから鹿兒島種馬場のある牧岡驛、安樂温泉、犬飼瀧、和氣清麿遺蹟碑、和氣温泉、それか

嘉例川驛に来て、西郷隆盛がよく行つたといふ日常山温泉、それから、丘陵はひらけて、大津川の向ふに、國分町のある平野がひろくひらけられて来た。

國分は例の國分煙草の出来るところで、かなり賑やかな町であつた。昔、大隅國の國府のあつた跡で、そこにある鹿兒島神社は、九州でも有名な古社であつた。今は官幣大社になつてゐた。華表は街道に面して立つてゐて、その奥に、結構壯麗な社殿があつた。その寶物には、彦火々出見尊が海神から得たといふ干珠満珠などといふ珠があつた。

國分のすぐ南は、錦江灣で、濱の市といふ港がその前港を成してゐた。國分からは、福山を経て都の城町の方へ行く國道がわかれてゐるので、交通が頗る頻繁であつた。

櫻島を持つた錦江灣の風景は中々好い。汽車は國分を出ると、絶えずその左の車窓にその激澗とした波光を反射させた。そこに浮んだ小さな島嶼は、邊田小島、辨天島、沖小島などといふのであつた。

加治木は島津義弘が關原役後に隠棲したところで、大隅では、この町が一番大きく且つ繁華だ。人口は八千近くある。この近所では橋南谿の『西遊記』の中にある龍門瀑が、名高かつた。

こ、から汽車は、錦江灣に沿つて圓を描いて、くろりと廻つて行つてゐた。そしてその右の方には、今の薩摩焼の前身帖佐焼の陶器の出来た帖佐郷だの、島津義弘の館址だの、眺望の好い米山薬師だの、老幹嵯峨たる寺師の梅だのがあつた。それ等の勝地には大抵重富驛から下りて行つた。

重富から鹿兒島驛に入つて行く間は、櫻島を左に見て、何とも言はれないほど風景が好い。汽車と國道とは殆ど海とすれぐになつて走つて行つてゐた。成ほど此處等の風景は、或は田子浦などよりも好いかも知れないと思はれた。日本新三景の候補者に選ばれるのも道理だ。

もうすぐ鹿兒島市だ。

櫻島は鹿兒島市の櫻島と言つても好い位であつた。風光明媚——實際この四字が、このさまを言ひ盡してゐた。

市街も明るかつた。

此處では明治旅館などに泊るのが好い。で、先づ見物に出かけるとして、一番先に行つて見るべきは、例の西郷隆盛の奮戦した城山だ。

今はそこは公園になつてゐて、町の彼方此方からすぐ上つて行かれるやうになつてゐる。公園は眺望が好かつた。錦江灣と櫻島とは唯一目に見わたされた。此間の櫻島の噴火を、此處で見ると、さぞ壯觀であつたらうと思はれた。そこにはかけ茶屋だの、明治天皇の記念館だのがあつた。そこから丘を一つ廻ると、例の隆盛の自盡した岩崎谷が展けてゐた。成ほどかういふ處かと思はれた。そこは丁度細長い谷のやうになつてゐて、城山が取られない中は、砲彈が雨注しても安全なやうなところであつた。隆盛の終焉の地には、大きな石碑が立つてゐる。そして、その墓は、それから少し奥に行つたところにあつた。立派な墓だ。

この他に、隆盛の邸址や、大保久利通の邸址などがあつた。で、そこを下りて、縣廳や聯隊司令部を中學校のある處を通つて、中町通に本願寺の別院を見て、島津齊彬を祭つた照國神社と、石造の興樂館と、波止場と名山堀と、これだけ見れば、市中では他に見るものがない。町の中程にある狭斜街に行つて、鹿兒島特有の唄でも聞いて見やうか。その他、海岸に行くと、松原の中に瀟洒な茶亭などがあつて、一杯やるのに好い。そ

れから島津侯の磯邸、こゝにもつてがあつたら、紹介して貰つて行つて見る方が好い。鹿兒島に遊ぶには、夏は暑い。冬の方が好い。それから、此處を基點にして彼方此方に行つて見ると中々見る所が多い。今では汽車が出来たから、川内の方へも樂に行かれる、途中で、朝鮮人の移住した薩摩焼の本場を訪ふて見るのも好い。薩摩の西海岸には、風景のすぐれたところがかなり多い。京泊あたりまで行つて、秀吉の島津征伐の址を探ぐるのも興味が饒い。

それから、南の方にも行つて見るべきところが澤山ある。汽船で、山川港に行つて、その温泉に浴して、鰻池火山から、海門岳の方へ行つて見るも好い。海門岳は、九州では名山の一つであつた。そして、そこから加世田、枕崎などといふ方に行く。交通は不便だが、風俗にも特色があつて、面白いところが澤山にあつた。で、引返して、宮崎線で、都の城町へ行く。都の城は好いところだ。ちよつと下りて見るのも好からう。で、山の口へ行つて、そこで峠を越して、車なり馬車なりで宮崎町へと志して行く。

宮崎町は感じの好い町であつた。遠くなく近くない山のさまも好ければ、大淀川が市

中を流れてゐる形も好かつた。それに、汽車が今、漸く出来か、つてゐる位だから、何うしても人氣が質朴で、物價が廉い。それに、國が古く、神武天皇時代の古蹟が彼方此方に残つてゐるのも興味が饒い。

此處は、交通は大阪を基點とした内海大阪間の汽船が今までその主要路をなしてゐた。内海港は宮崎から東に五里ほど行つたところにあつた。従つて、此處の風俗は、全く大阪風を帯びてゐた。藝者などにも大阪ものが多ければ、商人の店のかざり附けにも大阪のさまがあらはれてゐた。娘の風俗なども矢張さうだ。

此處では、神田橋といふ旅館が一番好い。二階からは、大淀川が一日に見えた。町にはこれと言つて見るところはないが、一里ほど北に離れて、官幣大社宮崎宮がある。神武天皇の古蹟を語る宮として、九州でも名高い社であつた。社殿も、清楚、瀟洒、人をして襟を正さしめるものがあつた。建築も上代の風だ。

その他、内海港に行く途中に、青島の勝がある。ヒロウ、油竹、蘆竹などの熱帯植物のあるので聞えた島で、陸と島との間に、橋がかつてゐるさまなど、頗る相模の江の島に似てゐた。折生迫には、かなり流行る海水浴場があつた。

それから健脚な旅客は、内海に行つて、そこから七浦七阪の險を越えて、鶴戸岬に官幣大社鶴戸神社を訪ふのも面白い。この間は、路は峻で、馬も車も通らないやうな處だから、是非草鞋がけで歩かなければならないが、一夜そこに泊るつもりなら、宮崎からさう困難をせずに行くことが出来る。鶴戸神社は、すつと岬頭を波打際まで下りて行つた岩窟の中にあつた。頗る特色に富んでゐた。そこは鶴合費不命令の降誕地で、日本の多い古い神社の中でも殊に名高いものであつた。海山の眺望も頗る雄大を極めてゐた。

しかし、其處まで行つたら、次に、油津から飯肥の方まで行つて見るのも好い。志布志まで行つて、有明灣頭の海山の勝を探ぐるのも好かつた。

で、宮崎に引返す。これから國道を眞直に細島、延岡まで行く道は、馬車の便が唯一の交通機關で、宮崎から延岡まで二十四里、一日で行くには、ちよつと忙しい。この間には、都農の都農神社、美々津の立磐神社、大友と島津と戦つて大友の大敗した美々津の古戦場などがあつた。この國道の左に連る連山は、九州で最も峻峻な九州山脈で、その山の中に、那須、椎葉などといふ平家の落武者のかくれたところがあつた。

細島は好い港だ。こゝから汽船に乗れば、土々呂、延岡、佐伯、臼杵などといふ處を

通つて、十時間か十一時間で、大分、別府の方へ來ることが出來た。延岡には、西郷隆盛の古戰場可愛岳があつた。

九州見物をする旅客は、今まで書いて來たとは、逆に、先に、小倉から豊後に入つて、耶馬溪、宇佐、別府、それから海をわたつて、細島、美々津、宮崎、鹿児島といふ風に出る行くのも好い。そして最後に長崎から唐津を見て、博多を打留めにする。何方でも同じことだ。

大分にはさう大して見るところはない。齒莖灣の海と、長曾我部信親の島津と戦つて戦死した墓とその位のものだが、別府に來ると、中々見物するものがある。

大分と別府の間には、電車の便があつて、往來に至極便利だ。

別府は溫柔郷で樂園だ。福岡あたりから、遊山と言へば、大抵そこに出かけて行つた。いや、福岡ばかりではない。四國からも、中國からも、大阪からも浴客は皆な其處へ出かけて行つた。別府は好い。東京からでも、却つて經濟だ。一月位ゐる氣なら、別府が「い」などと言つた。

別府ほど温泉の豊富なところは、日本でもまア他にあるまい。何處でもあるところま

別府温泉

で地面を掘りさへすれば、温泉が滾々としてわき出して來るといふ風だ。そして、この温泉の井を掘るのが、三十圓もあると出來るのだから、何處の家でも温泉があつた。豆腐屋にも八百屋にもあつた。

濱脇あたりに行くと、温泉附

別きの貸家が七八圓から十二三

府圓くらゐでいくらもあつた。

海女などを連れて行つて、わざ

地と自炊と洒落れる紳士なども

賦尠くはなかつた。

別府では、旅館では日名子

が一番大きい、米屋などの

埠頭近くにある小さい旅



方が却つて氣がたまらなくつて好い。宿料も大して高くない。埠頭近くにある小さい旅館に泊るとさう大して違はない。

別府の町は賑やかだ。いかにも湯の町といふ氣のするところだ。魚を賣つて歩く男が

「魚、魚」と觸れて賣つて歩くのは、不思議な氣がした。魚類も新鮮な旨いのが多い。町の東の方に遊廓があつた。

別府で退屈したら、山の方へ行つて見るが好い。観海寺、カナ輪、地獄などといふ温泉が由布岳の周圍に到る處に湧出してゐて、何處に行つても、一夜泊るに足りる旅館があつた。それでも退屈したら、由布岳に登つても氣が晴れた。

別府から日出町に行く間は、由布岳の東の裾を通つて行くやうなところで、前には美しい繪のやうな別府灣が展開されてゐた。概して九州では、西海岸の海よりも、東海岸の海の方が好い。西海岸は、博多の海でも、有明海でも、三角の海でも、八代の海でも、海深が浅く、水の色が美しくないが、——西海岸の海で好いのは、先づ先づ唐津附近位のものだが、東海岸では、別府灣といひ、日向灘といひ、内海港と言ひ、すべて、海深が大きいので、水の色は深く碧い。感じがいかにも澄刺としてゐる。

で、汽車の窓から、その晴々した別府灣を見ながら、龜川を経て日出町に行く。龜川にも温泉があつた。日出町には、たしか大きな蘇鐵のある寺があつた筈だ。日出町の向ふには、國東半島が長く突出してゐて、別府から四國にわたる汽船の甲板から見ると、

その半島の沖に磯島があつて、上に由布岳の高く聳えてゐるさまがいかにも壯觀だ。汽車は杵築から大きな山を越えて、中山香、立石を通つて、宇佐へと行つてゐた。此處等に來ると、地形が大分變つて、右の海が浅くなつてゐるのを見る。それに、左には耶馬溪に近い山の連亘がそろ／＼現はれ出して來てゐた。

宇佐の停車場から、宇佐八幡宮のあるところまでは、かなりに遠い。一汽車遅らせて參詣して來るには、ちと遠すぎる。この間が二里、車も馬車もあるが、車賃は往復たしか五六十錢だつたと覺えてゐた。

宇佐八幡は九州では名高い古社だ。例の和氣清麿の勅使に立つた宮であることは、歴史でも名高い。それに歴代の皇室にも非常に縁故の深い宮で、國家に大事のある時には、勅使が來て、いつも祈願を籠められるのが例になつてゐた。停車場の方から行くと、横から入つて行くやうになつてゐるが、正面は古い町から入つて行くやうになつてゐて、先づ反橋それから樓門、その中がちよつと門前町のやうな形を成してゐて、それから境内へと折曲つて入つて行く。さう大して高くない石階、それを登り切ると、樓門があつて、その奥に朱塗の宏壯な社殿があつた。社殿は西面して立つてゐた。それに、境内

中津町
公園
耶馬溪山
八面山

に老杉が多く、いかにも神々しく感じられた。祭禮の時は賑かだといふことだ。
で、参拜して、もとの停車場に歸つて、また汽車の旅をつゞける。豊前長洲、柳ヶ瀬、
四日市、この邊に来ると、左の山嶺の特色を帯び来て、耶馬溪に近づいて来たやうな感
じがひとり手に起つて来る。それは二つ岳などといふ山で、耶馬溪の入口の八面山に相
連亘してゐた。

中津町は好い町だ。家並なども揃つてゐる。大きな紡績の工場などもある。城址は今
瀧酒な公園になつてゐた。

此處で汽車を下りて、耶馬溪行の軌道に乗換へる。

この軌道は、樋田を通つて柿阪まで行つてゐる。哩數一五哩四鎖、三等賃金三十九錢
である。古城、大貞公園、上の原、眞阪、野路、これで樋田に行つて、それから羅漢寺、
冠石野、城井、津民、柿阪といふ順である。この軌道が出来たので耶馬溪は女子供でも
樂に見物することが出来るやうになつた。

頼山陽の最初に泊つた寺は、何でも大貞公園の近くにあつた。汽車は中津を離れて、
松原の中を通つて、八面山の城壁のやうな山に向つて段々近いて行つた。しかし、山國

帯岩
樋田洞門



耶馬溪坂の下

川の谷に添ふのは、眞阪、野路あたりから
で、それまでは、全く林や野の中を走つて
行つてゐた。で、野路の少し手前で中津か
ら来る街道を横つて、そして初めて山國川
へと添つて行つた。

トンネルが一つ二つあつた。

樋田に入る手前に、例の鮎返瀧といふの
が見えた。つゞいて、青の洞門、それから、
山の奇岩が續々として笥のやうに現はれ出
した。この洞門のあるあたりから青の溪橋
のあるあたりまでは、汽車で見て了つては、
飽足らない。是非下りて歩いて見なければ
ならない。帯岩などといふのが、中でも殊
にすぐれた奇岩であつた。

羅漢寺の停車場のある處は、青から少し行つたところだ。羅漢寺に行くには、此處で下りて、青の溪橋の畔から山移川に沿つて入つて行くのであつた。この谷はかなり深い。落合から新耶馬溪の方へも行かれるやうになつてゐた。

羅漢寺まで停車場から一里半位、麓まで車が通ずる。山陽もこ、は餘りに褒めてはならないが、實際、妙義の小さなやうなもので、岩山の上に寺が構へてあるだけで、さう大して大騒ぎをするほどのところではなかつた。しかし話の種に、一度は上つて見る方が好い。

羅漢寺驛をすぎると、溪山は次第によくなつて行つた。溪流はさう大してよくないが、それに添つた岩山が奇觀だ。冠石野、それから益々奥に入つて、津民近く行くと、例の五龍の瀧があつた。其處等は歩いて仔細に探りたかつた。

津民川の谷が右から流れ落ちてゐた。

汽車は溪に添つて折れ曲つて行つてゐた。さびしい山村は其處にも此處にも見えた。やがて柿阪に着く。

柿阪は以前は街道に添つたさびしい山村であつたが、汽車が出来てから、その近所に

新しい家などが立つて、ちよつと活氣のあるところとなつた。宿屋では、かぶと屋。この宿屋は、昔からある旅館で、本宅は街道にあるが、近頃、山陽の擲筆岩の前のところに、二階屋の新しい旅館をつくつた。そこは擲筆岩の深淵に望んでゐて、ちよつと風景が好かつた。

こゝから、新耶馬溪へは、左に折れて入つて行く。丁度向ふ側の森町に行く街道に添つてゐた。車で行けば、柿阪から朝立つて、午後の三時頃には歸つて来られるといふことだ。矢張、溪流よりも岩石の奇だが、此處まで入つて来た次手に、行つて見る方が好い。

しかし、耶馬溪は溪山としてさして好いとは思はない。山水の少い九州では、好いところには相違ないが、山が浅く、水がぬるく、到底中部、東北地方に見る山水のやうなわけには行かない。

しかし鮎が盛に取れる。津民谷では旨い鰻がとれる。一月もゐて、谷々に入つて行つて見たら、多少の逸興はあるであらうと思はれた。

中津から行橋を経て、小倉に来る間は、普通の旅客には、わざ／＼下りて見るといふ

やうなところはなかつた。行橋から彦山権現の方へ行く路はわかれて行つてゐるけれど、これは交通が不便で、ちよつと行つて見て来るといふわけには行かなかつた。

十八 四國めぐり

- ▲四國へ行くには、是非船便を要する。一番簡單なのは、岡山から宇野に出て讃岐の高松に渡る連絡船である。
- ▲多度津へは尾の道から汽船。
- ▲伊豫の高濱へは、宇品又は嚴島から汽船。
- ▲大阪内海間、大阪鹿兒島間の汽船で行けば、瀬戸内の諸港へは、大抵は寄つて行く。

て行く。

- ▲阿波へ渡るには、大阪徳島間の汽船に由る。
- ▲土佐へは、大阪高知間の汽船による。直航一夜と少しかゝる。
- ▲阿波の東海岸を一つ一つ港に寄港して甲浦まで行く小蒸汽船がある。
- ▲土佐の海岸は高知を中心にして、東海岸と西海岸とを絶えず航海する汽船がある。
- ▲大阪宿毛間の汽船も四國めぐりの旅客の研究すべきものだ。

四國は讃岐と伊豫とが、交通の便があるので、人に知られてゐるが、阿波、土佐は餘り出かけて行く人がない。

讃岐、伊豫は、つまり瀬戸内海の内に入るべきもので、宮島見物に行つた人ならば大抵、海を渡つて、松山なり、多度津なり、琴平なりに行つて見る。行きを、中國筋に取

つて、歸りを四國に出て、高松から汽船で宇野にわたつて岡山にもどつて來るといふ順路は、旅行團體などの大抵取つてゐる道順であつた。

これと言ふのも、中國と伊豫、讃岐との交通が至極樂に取れてゐるからであつた。宇野、尾の道、糸崎、宇品、宮島、その何處からでも簡単に、讃岐の高松、多度津、伊豫の高濱へとわたつて行かれた。それに、大阪内海間、大阪油津間の汽船は、大抵讃岐伊豫の沿海の諸港に寄港して行つた。

中國の汽車の幹線からでは、岡山から、宇野線に乗り換へて、宇野から、連絡船で、讃岐の高松に渡つて行くのが、一番便利であつた。

それから伊豫に行くには、大阪内海線で行くか、でなければ、宇品から高濱に渡つて行くのが便であつた。

で、宇野線で、讃岐にわたつて行くことにする。岡山から宇野までは、別に見るものがない。諭迦山といふ山があるが、地方では名高い山であり寺であるが、わざわざ行つて見るほどのこともない。宇野と高松との間を連絡してゐる連絡船は、船も綺麗だし途中の景色も好いし、旅客の是非一度渡つて見なければならぬ處だ。

宇野驛

連絡線

高松市

屋島山
栗林公園



五 劍 山

人に由ると、この間の海の景色が三景に比して決して多く劣らないと言つてゐる。實際、此方から五劍山の屹立した姿と、屋梁のやうな屋島山とを望んだ風景は、他には澤山にはないやうな眺めであつた。それに、この間の海では、例の讃岐の鯛網の漁のさまなどが見られる。高松の旅館では、高松ホテル、平山、琴富貴角田、中西など。こゝで第一に見物すべきは、黒田如水のつくつた城とその城址、その東に、屋島山の古戦場、こゝまではたしか電車があつたと思つた。城址あり屋島山の上の眺望は、絶佳だ。木下、海軍、それから町の南端栗林村に有名な栗林公園がある。停車場から二十町位ある。庭の廣さがある。

十六萬坪、西湖、南湖、北湖等六つの池沼、飛來峯、巾子峯、櫻山、諸山等十三の山坡これに泉石を點綴して、頗る日本園藝の美を盡してゐる。人に由ると、岡山の後樂園よりも、却つて此方の方がこじんまりしてゐて好いと言つてゐた。

屋島では、東の山麓が壇の浦、この山の北に延びた長崎といふところが、安徳天皇の行宮のあつた址、屋島山の頂上には四國遍路八十四番の八島寺があつた。そこには源平の軍旗、合戦の繪巻物などを寺寶としてゐた。山を東に下りて、志度街道に出ると、佐藤繼信の墓だの、讃岐國造の祖神櫛王の墓だのがあつた。

志度街道の方には、汽車の便がないので、旅客は多く出かけて行かないけれど、五ノ山、その山腹にある僧空海の建てた千手院、志度寺、長尾寺、極樂寺、それからもう少し東に行つて、津田の松原がある。琴弾松原と言つて、此方側では、最もよく瀬戸内海の氣分を現はしたところとして知られてゐた。その近所に、脇屋義治の墓などがあつた。高松から西に向つて行く汽車の線路に添ふて、鬼無、端岡、國分などといふ停車場があつた。

こゝで最も見るべきものは、崇徳天皇の遷謫された例の白峯で、國分驛から右に入つ

て行く山の中にあつた。上田秋成の雨月物語や西行や、さういふ人達のことなども思出されると、今も天皇の御陵がその山の頂近いとこに残つてゐたり、眞言の巨利白峯寺があつたりした。

それから阪出驛、そこは鹽の産地として知られてゐた。町も賑やかな家並の揃つた町だ。

宇多津を過ぎると、平野の間に獨立した飯野山の翠色が見え出して來た。この山は讃岐富士として聞えたもので、その山の形がいかに面白。それでも、千米近くあるといふことだ。

丸龜には、兵營がある。それから田宮坊太郎の墓がある。他には別に見るものもない。で、その次は多度津驛。

この町はかなり広い。それに、人烟も稠密してゐる。汽船から來ると、元は埠頭のすぐ近くに、停車場があつたものであつたが、觀音寺の方へ線路が延びて行くと共に、停車場は、町の北のはづれになつて了つた。

琴平へは、此處から汽車が左の方へ入つて行くのであつた。右の方には、丘陵がそ



琴平本宮

そる見え出して来てゐた。

此處と琴平との間に、金藏寺、善通寺の二驛があつた。善通寺は兵舎町として聞えてゐる他に僧空海の誕生地である善通寺の巨利をもつて知られてゐた。金藏寺驛には、智證大師の誕生地として有名な四國遍路七十六番の金倉寺があつた。共に、賽客の多いところであつた。

やがて琴平へ着く。停車場から町がすつとついでゐて、虎屋、備前屋、櫻屋、芳橋などといふ大きな旅籠屋が兩側に並んでゐた。賽客は常に陸續として跡を絶たない。で、町を突當つて、琴平山へとかかる。石階が際限なくつゞく。その規模の大きいことは、成ほど日本一だと思はれる位だ。その石階の長さが少くとも十三四

町ある。そして、漸く中腹の金刀比羅宮に達することが出来る。正殿には大物主命、相殿に崇徳天皇を祀つてゐるが、その社殿の内外の立派なことは、容易に筆に盡されないほどであつた。昔は象現頭山金刀比羅大権現であつたが、今は國幣中社になつて、毎年十月九日、十日、十一日を大祭の日とした。海上の災難保護の神として知られてゐるだけあつて、社殿の傍の額堂には、海上で此神を信じて危難を免れた由來をしるした額が澤山にかけてあつた。こゝから奥の院までは猶七八町あつた。何はともあれ、四國では、旅客の是非行つて見なければならぬところだ。

で、多度津に歸る。これから、汽船で中國の尾の道に渡ることが出来る。

これから西の方、觀音寺町へも、汽車が出来たので、わけなく行けた。多度津から觀音寺町まで哩數一四哩八鎖、三等賃金二十五錢である。觀音寺町には、町の外れ一町のところに、琴彈山があつた。そこに八幡が祀つてあつて、頂上の風景は頗る好い。そしてこれを左に下ると、琴彈公園、麓には弘法大師開基の觀音寺がある。

伊豫の方に行くのに、多度津から内海大阪間か、大阪油津間かの汽船に乗る。そして新居濱、今治などといふ港を通つて、來島の瀬戸を過ぎて、伊豫の高濱に行く。この

間、海上七時間位かゝつた。

中國の宮島、宇品からそこにわたるのも頗る便だ。だから、旅客は都合で宮島から四國の伊豫に渡り、松山、道後を見て、それから引返して、高瀬から逆に琴平に参詣するのも好い。

多度津、高瀬の間では、例の別子銅山の製銅所の大きな島がある。規模の雄大なのできこえてゐる。それから、今治附近には、例の脇屋義助が新田の遺族を率ゐて、四國に再舉を謀つた遺址が残つてゐる。そこから、四國の名山石槌山に登つて行くのも興味が饒かつた。

宇品の方から行く間には、例の平清盛の開鑿したといふ瀬戸の瀬戸があつた。そこは瀬戸内海の特徴を發揮して、風景が頗る好い。そこから高瀬に至る間も、島が多く海が青く、容易に甲板を離れることが出来ない。

やがて汽船は高瀬に着く。そこがまた景色が好かつた。伊豫富士の稱ある興居島、鎗のやうに立つた岩石の島、いかにも繪でも見るやうな海岸の町だ。此處では海水浴が出来て延齡館といふ海水旅館などがあつた。

埠頭で汽船を下りて、二三町で、松山に行く汽車の停車場に着く。これに乗ると、松山はもうすぐだ。トンネルをぬけて先見えるのが三津ヶ濱。帆檣が林立して、いかにも和船の港であるといふことが點頭かれた。やがて間もなく松山城の天主閣とその下に連る松山の瓦葺粉壁とが見え出して来た。

しかし旅客は松山見物は翌日のこと、して、先づ道後温泉へと志す方が便利だ。それには、たしか松山驛の一つ手前の古町驛から道後の方へ行く電車がわかれて行つてゐるから、それに乗替へる方が好い。少し行くと、松山の天主閣は右になつて、左に、ロシ

アの俘虜の墓が小高い丘の上に見えた。やがて道後温泉へと着く。道後は日本では有名な古い温泉だ。山邊赤人の詠んだ歌もあるし、景行天皇の行幸されたこともある。光明皇后の事蹟などもある。こゝでは、鮎屋に泊るが好い。靜かな感じの好い旅館だ。

温泉はすべて外湯だ。皆な旅客は外へ出て、湯札を買つて、てんでに好きな湯に入るのであつた。一の湯、二の湯、三の湯とわけてあつて、それがまた各一二三等にわかれてゐる。一の湯の一等は二十五錢で、其處に行くと、設備がよく整つてゐて、綺麗な女中

が茶などを勧めた。しかし一浴二十五銭は、餘り安い方ではない。温泉はアルカリ性で、女などの入るのに適してゐる。兎に角有名な温泉場だけあつて、あたりの色彩が中々濃厚である。

少し行くと、遊廓がある。藝妓も二枚鑑札で、遊ぶには便利だ。それに、藝者や女郎にも綺麗なものがあつた。

この近所の名所では、公園になつてゐる河野氏の湯月城址、石手にある石手寺、その上流の湧ヶ淵、聖徳太子の入浴されたといふ湯の岡、大きな長い石段のある某神社、それから少し離れて、湯山村にある新田義宗脇屋義治を祀つた新田神社、龍櫻寺の十六日櫻、御幸村字姫原にある輕太子と輕皇女を祀つた輕神社などがある。一週間位逗留しても見るものはかなり多い。

で、翌日は松山見物に行く。矢張、電車ですぐ行ける。停留場の名は忘れたが、物産陳列所のあるあたりで下りて、一番先に昔の城の天守閣のある丘の上へと登つて行く。この間は樹木が深く茂つて、晝猶暗い。十町位で、昔の城の門の中に入つて行く。城のさまは、割合に昔のまゝに残つてゐる。門を出たり入つたりして、頂上のひろい平地

のところへ行くと、櫻の木の下に休茶屋などがあつて、四面を眺望するに頗る便だ。それに眺望も頗る好い。

こゝを少し行くと、天守閣に入つて行く。番人がゐて、切符を賣つてゐる。確か五銭位だと思つた。天守閣の中は依然として昔のまゝだ。それに掃除が行届いてゐる感じが好い。昔の武器、書畫などが到る處にならべてあつた。松山出身の名士の書などもあつた。やがて一階、二階、三階、階梯は段々せまくなつて、最後は天井なども餘程低い。眼鏡のやうなものも残つてゐた。昔を偲ぶには、好箇の建物であつた。

松山の町はちよつと綺麗だ。家並なども揃つてゐる。兵營のあるあたり、縣廳のあるあたりも感じが好い。それに、藝者などにも綺麗なものがあつた。松山の停車場のあるところには、十二階見たいなものがあつた。

この他、松山の近郊では、久米驛附近の四十九番の西林寺、横河原驛から一里ほど隔つた白猫の瀧、唐崎の瀧、久米驛から西へ半里ばかりで、南朝の土居、得能が長門探題を打つた大星ヶ岡の古戦場などがある。

こゝから土佐の方に行く路は、汽車で森松驛まで行つて、そこから、宮内、久谷など

といふところを通つて三阪峠を越えて、久萬町へ出て、仁淀川の谷をすつと高知市の方へと下つて行くのであつた。この道は普通の旅客にはあまり面白くないかも知れないが、旅行家には面白い處だ。仁淀川の谷はかなりによかつた。松山から車で行つて、初めの夜は久萬町とまり、その翌日は樂に高知市に入つて行くことが出来た。

宇和島の方には汽車が出来てゐないので、ちよつと入つて行くのに臆劫だ。そつちへ行くには、郡中驛まで行つて、そこから、馬車なり車なりに乗る。大洲町へ七里、この間に大きな峠が二つある。大洲から卯の町、それから峠を一つとして、宇和島まで猶七八里あつた。

土佐の高知に行くには、大阪高知間の汽船の便があるばかりだ。この汽船は大阪を午後の四時に發して、神戸に九時三十分に着いて、海上で一夜を明して、翌日の午前十時に高知に着くことになつてゐた。室戸崎附近はかなりに波濤が荒い。

土佐は仔細に探ると、中々見るところが多い。それに、土地が邊陲に僻在してゐるので未だ天下に知られないやうな勝地が多い。これは一々歩いて探つて見るに越したことはないが、高知から東海岸と西海岸とを縫つて航行する汽船の便があるから、これに乗つて行く方が好い。東海岸では、紀貫之の土佐日記にある宇多の松原の址、安藝町、奈半利、捕鯨業できこえてゐる室津、浮津の兩港、この先きが例の室戸岬の金剛頂寺がある。これは西の蹉跎岬にある金剛福寺と共に、四國遍路中、最も重要なところで、旅客の是非一度は行つて見なければならぬ處だ。

昔は江戸から高知に通ふには、大阪から和船で甲浦に着き、それから野根山越をへえ、この東海岸をすつと高知まで入つて行つたものであつた。

そこに達する汽船の航路がある。それは大阪を午前の九時半に出て、夜の十一時三十分
に多度津に着き、高濱が翌日の午前の七時半、八幡濱がその日午後六時、その翌日の午
前六時五十分宿毛に善くことになつてゐた。つまり大阪から二晝夜を要するのであつ
た。

高知から北して、吉野川の峽谷に添つて阿波に出て来る路もちよつと面白い。吉野川
はかなりに奇勝に富んだ川である。それにその東北は、四國山系の峻峻な山嶺が蟠居し、
例の祖谷の深山幽谷を控へてゐるので、感じがいかにも深い。高知から阿波の池田へそ
こには汽車がある。まで二十二三里、急行すれば、車で一日に横断することが出来た。
阿波に行くには、大阪徳島間及阿紀線の汽船の便があつた。これは午前の九時半と午
後の八時と、同じく午後九時三十分とに三回に大阪を出るか、この中の午後の八時は不
定期船である。この汽船は大阪から兵庫を経て、小松島に行き、徳島に着くことになつ
てゐる。そして最後の午後九時半に出るものは、歸途に、徳島から小松島を経て紀州の
和歌の浦へと行くのであつた。

その他大阪甲浦間の一航路があつた。これは汽船が小さい上に、主として阿波の東海

岸を巡航する船であるから、前に比べると、時間が餘程長くかゝる。しかし、阿波東海
岸の奇勝を探らうとする旅客は、是非ともこの航路に由らなければならぬ。
徳島には、大瀧山、眉山などといふ山があつて、ちよつと感じが好い。市街の中央に
は、城山の翠微が摇曳してゐた。

こゝから撫養に行く間に、勝瑞といふ足利氏時代に郡邑であつたところがある。徳島
市以前の阿波の首都である。土御門天皇の陵もそこに行く途中にある。

吉野川の流域は、阿波で一番豊饒なところで、そこには汽車が徳島から西の外れの池
田まで通じて行つてゐた。丁度吉野川の南岸を走つて行つてゐた。

北岸では、脇町、南岸では貞光町などが最も賑やかであつた。
池田の對岸の白地といふ處には、長曾我部氏の發祥の城址が残つてゐた。箬藏寺、雲
邊寺など、いふ巨利もあつた。

阿波の東部、南部は勝浦川の谷と那賀川の谷とでしきられてあつた。海岸地方には、
小松島だの、富岡だのといふ郡邑があるけれど、一步入ると、多くは山間僻地で、見
るに足るやうなものは少い。しかし、東海岸には、風光の勝を以てきこえてゐるところ

が多い。日の峯、今津浦、大原の石門、津の峰、それから牟岐浦から浅川浦へ行く間に、八坂八瀨の勝があつた。阿波の親不知と言はれるところで、徒崖が海中に突出してゐて、旅客は矢張り、波濤を避けながら、海岸の沙濱を歩いて行かなければならなかつた。淡路島にわたるには、須磨明石あたりから行つても好いし、瀬戸内海を航行する汽船で行くのも好い。例の鳴戸は、阿波の撫養から、船を艀して行つて見るのが、一番好いといふことだ。

福良、由良、志筑——このあたりを歩いて見るのも面白い。

十九 房 總 半 島

▲兩國 を起點とした汽車、一つは房總線、一つは總武線、それに房州線、この

三つがある、そしてこの三つは千葉までは一線で行つて、そこで三つにわかれる。最も右が房州線、中央が房總線、最も左が總武線。

▲房州線は木更津から湊を経て、館山まで行く汽車、今は半は完成した。兩國から上總湊(今の終點)まで哩數六〇哩、汽車賃六十二錢、途中に木更津町がある。

▲房總線(千葉勝浦間)は、今の終點勝浦まで兩國から六七哩、汽車賃三等一圓四錢。この線は上總安房の東海岸を駛るもので、大原、一の宮、大東、勝浦などの海水浴に行くものはこの線に據る。大網から東金支線が岐れてゐる。

▲總武線(兩國銚子間)は哩數七二哩七、三等賃金一圓十二錢。この線の佐倉から成田又は佐原に行く汽車がわかる。成田、及び利根川線の地方に行く人はこの線に由る。

▲銚子 から犬吠に行く銚子遊覽軌道がある。

▲銚子 から霞ヶ浦を航行する汽船、——鹿島へ行く汽船、土浦へ行く汽船、この航路もこの邊を旅行するものに取つては必要だから、旅行案内で研究しな

ければならない。
▲常盤線 我孫子驛からわかれて成田に行く汽車もある。

房總半島

房路

東京附近では、房總半島は、ちよつと旅客に取つて、一日二日とまり位の旅行をするのに好いところだ。
房州にはまだ汽車は出来ないが、やがて上總の東西の二線が延びて行くだらう。さうすれば、海を渡らずに、陸から行くことが出来るやうになるが、今では安房に行くには、靈岸島から出る汽船で行く方が便利である。毎日そこから汽船が六回出る。そして朝の六時四十分には東京を出た汽船は、その日の午後一時に館山に着く。夜行で行くと、夜の十一時に出て、翌日の朝の四時に北條に着く。普通賃金八十七錢で、至極便利だ。海だつて、風がある時は、浦賀から先が少し荒れるが、要するに、東京灣の中だから大したことはない。

汽船

鹿野山

で、先づこの航路で、安房に行くとする。東京を後に残して出て行く形も面白ければ、本牧の鼻の白い絶壁を成してゐる景色も好い。
観音岬、富津岬あたりも好い。

やがて、房總の山が見え出して来る。あれが鹿野山、あれが鋸山、あれが清澄山、天氣の晴れた日などに、かう甲板の上から指して行くのも好い心持である。浦賀から、汽船は、房總半島に向つて進んで行つて、最初に上總の湊町に着く。こゝまでは、木更津驛の汽車が入つて來てゐた。

鹿野山は汽車で木更津まで來て、そこから登つて行つても好いが、湊からでも、さう遠くはない。湊から上ると、木更津の方から來るのは丁度反對になつてゐて、裏から上つて行く形になつてゐる。湊から田倉といふところを通つて、山の上まで二里位しかない。木更津から上つて來るよりは、路はわるいが、里程はいくらか近いかも知れない。

鹿野山は不思議な山だ。山そのものは、頗る低いが、眺望の絶佳なのは、これに比すべきものが澤山にない位だ。それに、山の頂に町があつて、その旅宿屋の欄干から、

一目に見渡すやうになつてゐるから猶好い。それに、丘陵は重り合つて、次第に陵夷して、東京灣の晴波に盡きて行つてゐる形が何とも言はれない。それに、夏の朝の霧の變化はちよつと他では見ることが出来ない。谷文晁の『名山書譜』の中に、この山が入つてゐるが、成ほど文晁は目が高かつたと思ふ。

神野寺

九十九谷

山の上には、神野寺といふ古刹がある。

それから、その南に展げられた九十九谷の眺望も頗る奇観だ。上總丘陵の起伏を上から一目に見わたしたもので、これも此處にのみ恣にする事の出来る不思議な眺望であつた。小櫃川の谷の入り込んだ形などを見るにも好かつた。

一時、鹿野山が避暑地として非常に流行つたものだが、此頃はすっかり衰へて、餘りその名を言ふものはなくなつた。惜しいものだと思ふ。

汽船は湊から安房に入つて、金谷、保田、勝山、それから富浦、船形、那古、北條と寄港して、そして館山に行つてゐる。

鋸山

旅客は此間で、鋸山や、那古の観音とを是非見なければならぬ。鋸山に登るには、保田で下りるのが一番便利だ。そこから三十町で山の麓に達し、それから上ること

日本寺

香海樓

三十三町、聖武天皇の勅願所である日本寺は、その中腹にあつて、今、公園になつてゐる。山中、到る處岩石に羅漢の像が彫つてある。その他に、蛭岩、聖岩、無漏窟などといふ奇岩が多い。香海樓の眺望、頂上の十州一覽臺の眺望は、頗る人目を爽かにするに足りるものだ。

旅客は此處を見てから、勝山を通つて、那古まで歩いて行つても好い。此間はさう大して遠くない。それに、道路も平坦で車の便も自由だ。勝山の町の漁市らしい感じも旅の興を惹くことが出来る。

那古の観音

船形観音

那古の観音は、行基の開基で、房州では屈指の勝地であつた。寺は半ば丘陵に架してつくられてあつて、その舞臺からは、一目に鏡ヶ浦の晴波を見渡すことが出来た。このぢき近所にある船形の観音は、慈覺大師の草創で、矢張眺望が好い。馬琴の八犬傳の舞臺に使はれた富山は、岩井村合戸から三十三町ほど上つたところにあつて、そこにも矢張観音堂があつた。

北條と館山

北條と館山とは汐入川を境にして、相接してゐた。この附近は、昔から學生の避暑地、又は肺病患者の療養地で、貸別荘などが到るところにあつた。旅館なども多かつた。

それに漁師の家で、一間いくらで間貸をするものなどもあつた。比較的低廉に夏三月をくらすことの出来るところなので、遊客は常に群集した。

北條には、木村屋、吉野屋、吉田屋、館山には鶴屋、松岡樓、藤屋など、いふ旅館があつた。宿料もさう大して高くない。平均一圓から八十錢位で一日ゐられる。それに、本場だけに肴が多い。

附近で見るところは、館山公園、大日岩、琴平神社、船を雇つて、沖にある鷹の島、沖の島に行つて見るのも興味が饒い。館山の東に、里見義實の城址を探つて見るのも面白い。

こゝから太平洋側の白濱へ、國道を行けば二里しかないが、車も通ずるが、旅客はそれよりも少しく迂回して、州の岬から平沙浦、布良をくると廻つて見る方が好い。館山を出て一里、龍伏の松、濱田の洞穴、鉦切神社、やがて州の崎だ、こゝから太平洋岸に出て行く路の海の眺望は頗ぶる絶佳だ。

こゝから布良まで一里半、この間に落莫とした平沙浦が横つてゐた。土地の人は平沙と言はずに、へいたごうらと訛つて呼んでゐた。布良には氣象測量所があつて、邊陲な

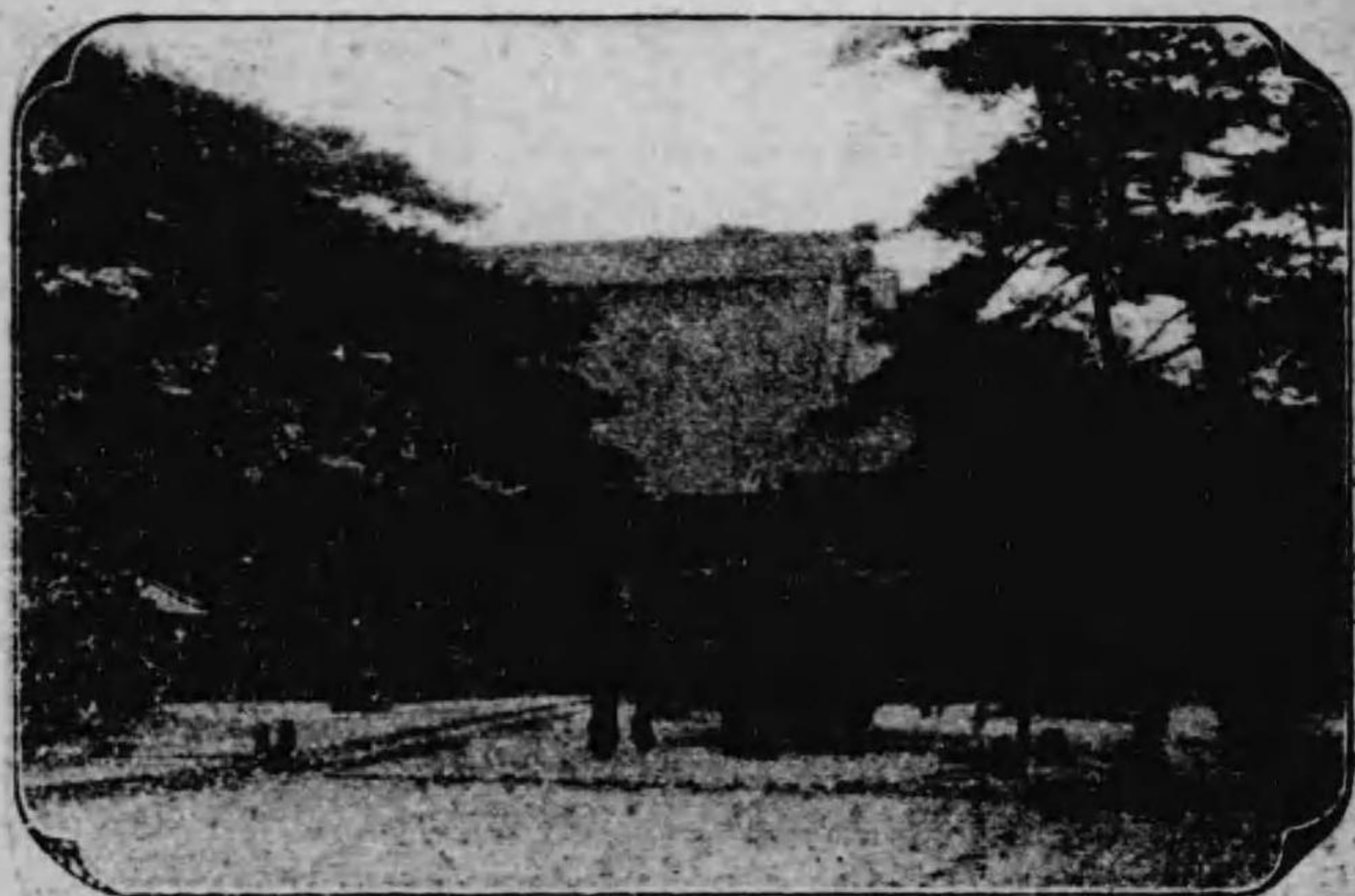
漁村だが、北條、館山あたりの海と比べて、氣象が確かに雄大であつた。そこには柏屋といふ旅館があつた。

根本海水浴場には、養壽館といふのがあつた。其處から、伊豆七島と富士とを眺望することが出来た。

白濱には、例の野島岬の燈臺があつた。先年二萬噸の大船タコマが沈没したのもこの沖である。この附近には健田村字村田にある下立松原神社、富島村の西にある鬼ヶ浦、豊田村字杵見にある莫越山神社、行基作の十面觀世音を有した満録村字石堂の石堂寺、こんなものを見て、東海岸をたどつて行くと、波太島、一名仁右衛門島、大夫崎の洞、柑子島、ぐみ島、辨天島、怒濤と島と漁村とが長く長くつゞいてゐる。

江見、鴨川、天津など、いふ村がその海岸に散在してゐた。鴨川は北條から眞直に來れば半里半位しかなかつた。乗合馬車などもあつた。千倉といふ鑛泉がその近所にあつた。

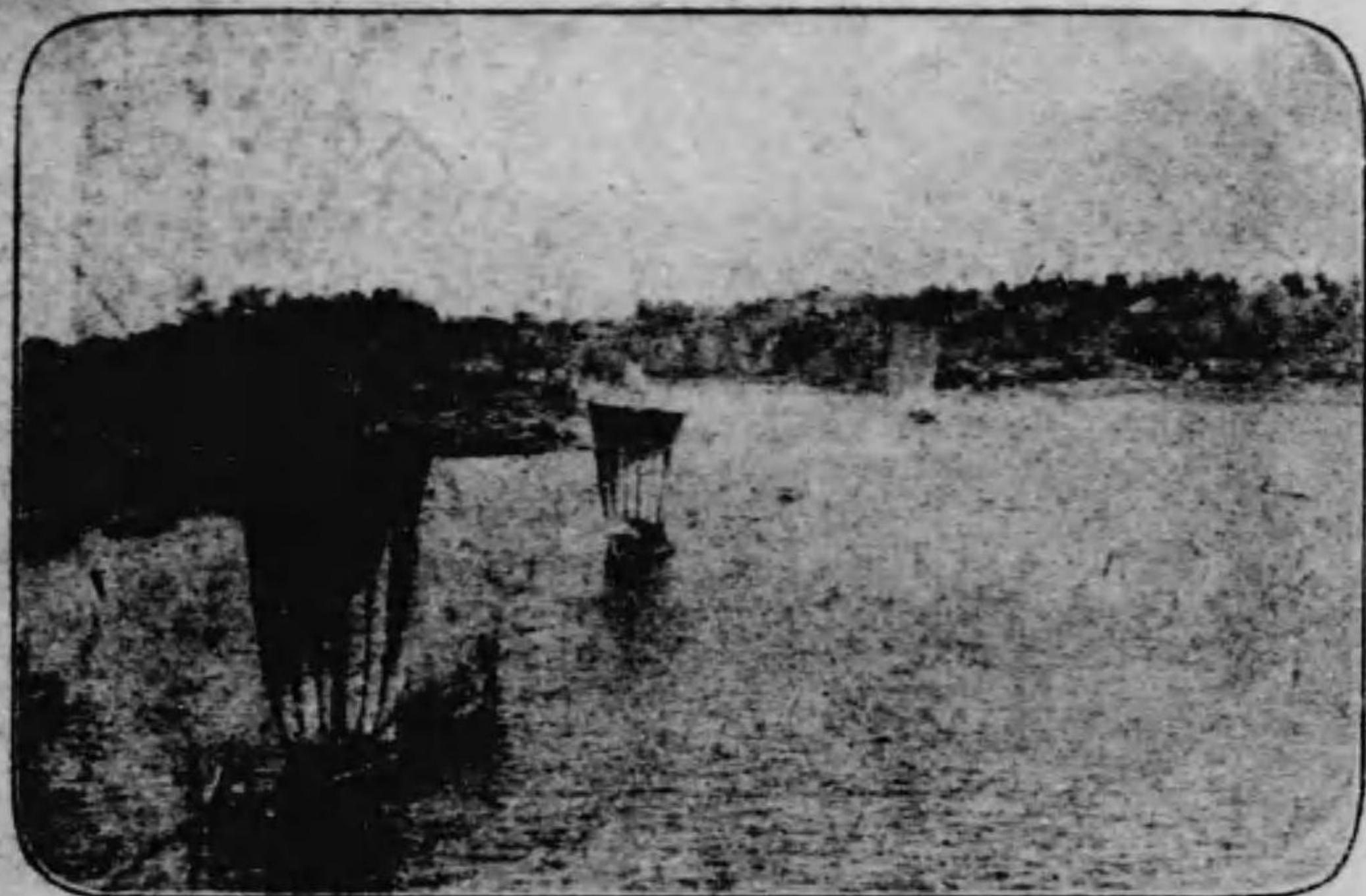
天津町から、安房の名山清澄山に登つて見る必要がある。そこは安房第一の靈場で、太古には天富命が鎮座され、孝仁天皇の朝には、一旅僧柏樹に靈空藏の像を彫り、伽



小湊誕生寺

藍を建て、その後慈覺大師登山し、竟に日蓮上人を産み出した。山上に池があつて、いかなる時でも清く澄んでゐるといふので、寺は千光山清澄寺と呼ばれ、天津から本堂まで一里足らず、本堂は十五間四面、観音堂、鐘樓寶篋塔、日蓮が朝日を拜した朝日堂など、頗る宏壯だ。それに、山上の眺望が好い。左に伊豆諸島、右に筑波、正面に富士、箱根を見て、人をして思はず快哉を叫ばしめる。それに、山は林相の美を以てきこえてゐて、深樹鬱蒼、晝猶暗い。

三九〇



江戸川の風光

そこから四里、馬車か車で行く方が便利であるが、兎に角、次手だから此處で参詣するのとした。小湊は町そのものが既に感じが好い。海も好ければ、肴も多い。旅館にも好いのがある。誕生寺は日蓮の誕生した地で、堂宇も頗る宏壯である。山を負ひ海に臨んで、風景もまた絶佳だ。本堂には、水戸黄門の奇進した運慶作の十界の木像、祖師堂には日坊が彫つた日蓮の木像が安置されてゐる。共に見るべき價值がある。山の東麓の海は妙の浦と言つて、日蓮が鯛漁を禁じたため、今でも鯛が多いと言はれてゐる。で、俗には、此處を鯛の浦と言ふ。

これからずつと勝浦の汽車まで行つても好



市川梅林

いが、此處では、引返して其方の方は、更に、房
 總線で行つて見ることにする方が順路だ。
 で、今度は兩國の停車場から、房總線の汽車に
 乗つて出かける。千葉までの間には、かなりに名所
 がある。市川の桃、眞間の手見奈祠、それから上
 つて弘法寺、その傍をぬけて、兵營の傍を通つて、
 十町ほどで、國府臺、その眺望は、東京近所で
 は、指を屈せられるところであつた。それに、其
 處は北條里見の古戦場で、里見が敗けたのは、歴
 史で誰でも知つてゐるだらうと思ふ。八幡には、
 八幡知らずの竹藪、こゝから中山までは、春は桃
 が一面に續いて咲いた。中山の法華經寺は境内も
 ひろく、堂宇も立派だ。例の鬼子母神は、祈禱が
 驗があるので、賽客が多い。船橋には遊廓がある。

その海岸には、平將門の妾桔梗の前が將門の戦死を悼んで入水した遠の溜と言ふところ
 るなどがあつた。やがてひろい平原、陸軍の習志野をその附近に持つた津田沼町、八犬
 傳の馬加太記のゐた幕張驛、ついでつれ込んだなかで東京の紳士がよく女などをつれて
 行く稲毛の停車場、そこは松の多い海岸で、狭いところだが、ちよつと景色が好い。海
 氣館、養生館、東京館など、いふ旅館がある。海は遠淺、魚も先づ食へる、中でも、
 海氣館の離座敷は一組のお客で占領することが出来るやうになつてゐて心持が好い。
 千葉では、猪鼻臺、そこはちよつと眺望が好い。千葉氏歴代の墓のある寺に行つて見
 るのも興味が饒い。寒川には海水浴場の設備がある。旅館では、加納屋、梅松屋、油屋、
 海老屋などが聞えてゐた。

こゝで、汽車が三方にわかれて行つた。最右が木更津から湊へ行く線、中央が上流
 丘陵の中を横つて、大綱から一の宮へ出て勝浦へ行く線、左が佐倉から八街、成東、八
 日市場を経て銚子に行く線、この三つであるが、佐倉からは、酒々井、成田の方へ行く
 汽車がわかれて行つてゐた。

右の木更津線では、前に書いた鹿野山の他に、別に見るやうなところもない。で、先